読者が創る新しい性風俗誌

奇譚クラブ

1982年

10

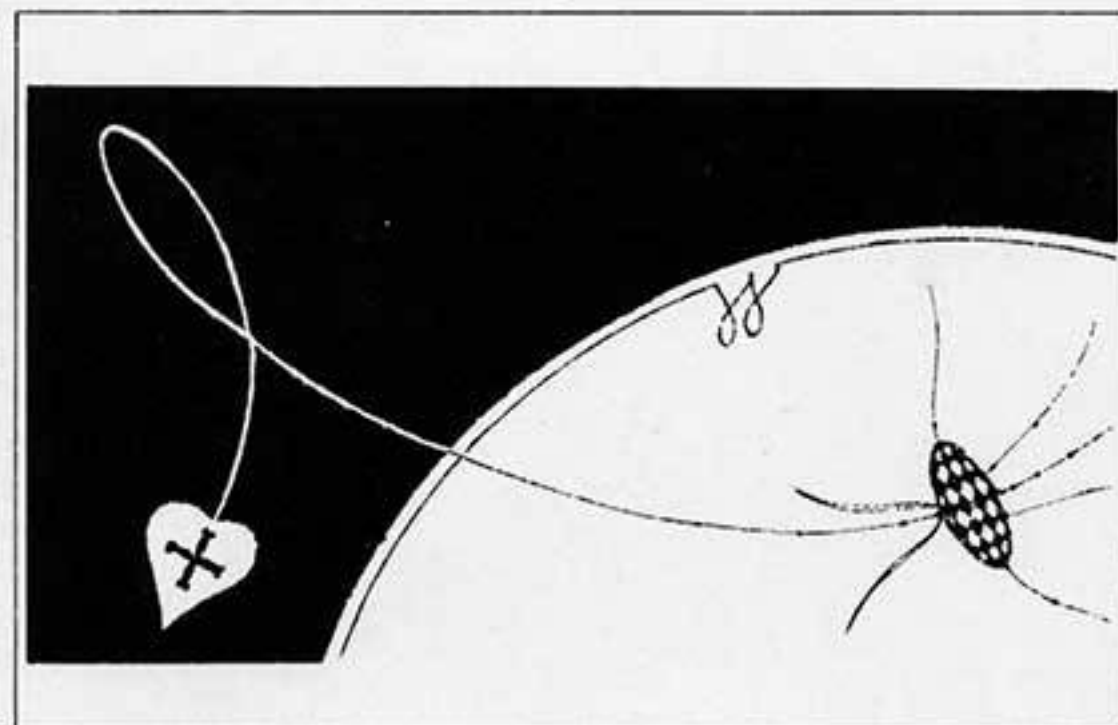
連載・生人形地獄

昭和57年10月1日発行（毎月発行）第一巻第8号

奇譚クラブ 1982年 10月号

昭和57年10月1日発行（毎月発行）第1巻第8号

雑誌02805－10　定価1000円　㈱きたん社発行

奇譚クラブ10月号目次

投稿規定

〔体験・告白・日記など〕

SM・エネマ・フェチ・レズ、スワップ・トリプル・複数・アニマル・窃視・妊婦嗜好など、本誌にふさわしい異色なものをのぞみます。

創作ではなく、実際に経験、実行したことをありのままに、平易な文章でお書きください。

文章の上手下手は問いません。写真（モノクロ、カラー、ポラロイド）のある方はそえて下さい。

四百字原稿用紙2枚以上（長篇は連載）。

掲載分には規定の原稿料をお支払いします。

文章がニガ手な方は写真だけでも結構ですが、簡単な説明を書きそえて下さい。

〔創作・小説など〕

SM小説界に新風を吹き込む新人の登場を期待しています。

題材はSM、フェチなど情念的なもので、既成の作家のものとは異なる作品を歓迎します。

四百字詰原稿用紙で二〇～三〇枚以上です。

優秀な作品は本誌に掲載（長篇は連載）とし、規定の原稿料をお支払いします。

〔イラスト・カットなど〕

写実的なもの、幻想的なもの、あるいはイメージ画ふうのものなど自由に描いて下さい。

なるべく白いケント紙か画用紙にエンピツ、ペン、筆で。

イラストの大きさは本誌2ページ大ぐらいまで、カットは葉書半分大ぐらいまで。

採用分には規定の原稿料をお支払いいたします。

〔文献・資料など〕

文献や資料を提供または譲って下さる方はご一報下さい。

※投稿作品（写真を含む）の返却を希望される方はその旨書きそえて下さい。

宛先
〒160 東京都新宿区新宿1の7の11
加藤ビル1F
(株)きたん社内
現代芸術研究会

奇譚クラブ10月号　定価1000円　昭和57年9月1日発行　発行所(株)きたん社
東京都新宿区新宿1-7-11 加藤ビル1F　電話03(356)0825番　発行人／森田公治
編集／現代芸術研究会

淫
嬲

縄 鬼

SMイラスト 魔夢

たつみ良行・画

拷問部屋

行田和子・作 ・ 都築峯子・画

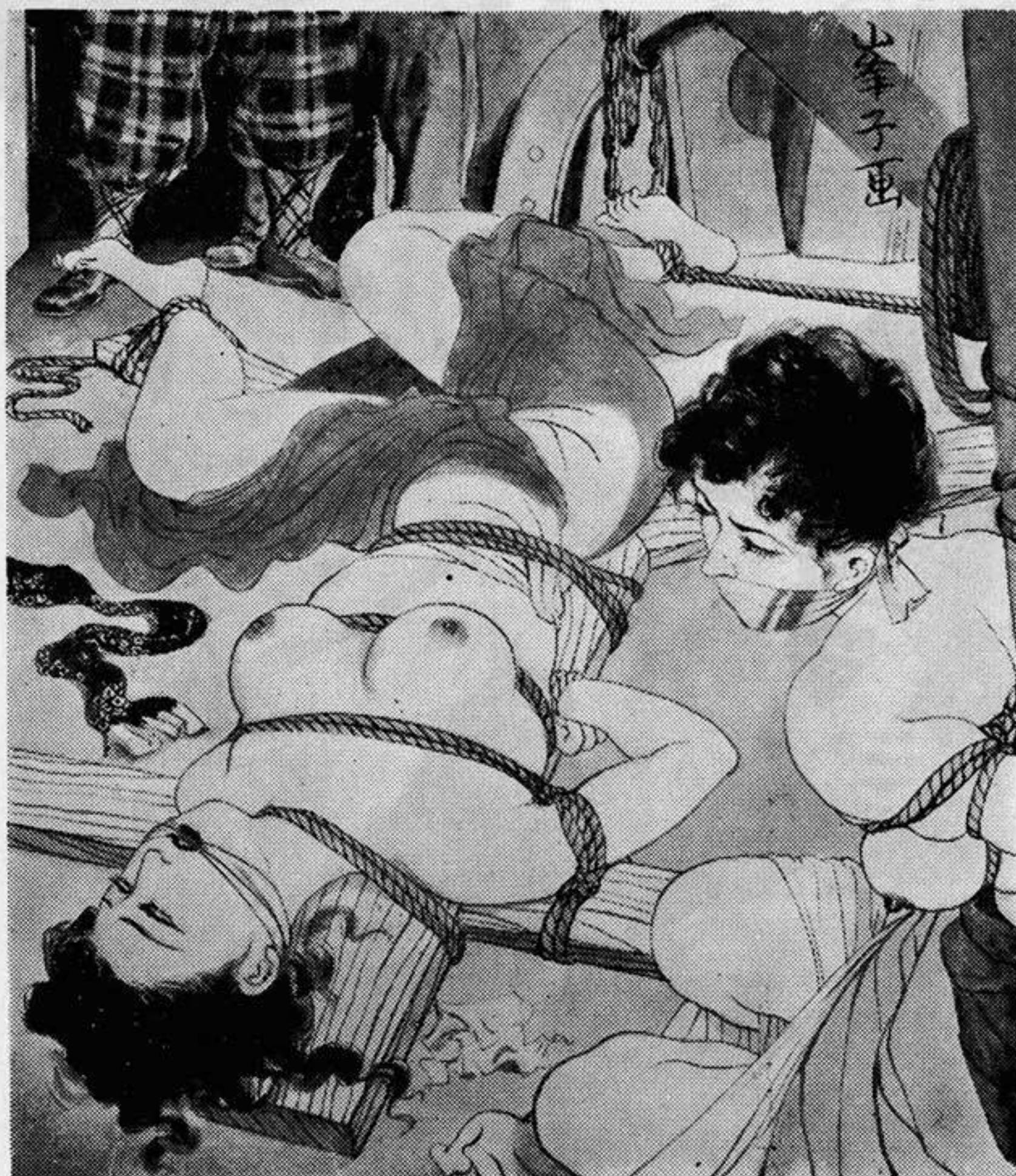
（一）

そこは八畳ほどもあろうかと思われるジメ〳〵した倉のような部屋で、私のからだはその真中の太い柱に後手に縛りつけられて、口には何か油臭いにおいのする布で猿轡がはめられていました。意識を取り戻したばかりの私には、何故こんなひどい目に逢う理由があるのか直ぐには判らなかつたのですが、やがて自分の前にニタ〳〵と笑いを含んで酒を飲んでいるのが、二十数年前罪を犯して獄に入つたあの安本重造であると判つた時の驚きはどうであつたでしよう。

「フフフツ、今夜のことを楽しみに、俺ア、今日まで生きて来たんだぜ、俺ア今日まで…………………」

重造は酒臭い息を私の顔に吐きかけながら黄色い歯茎を見せていやらしく笑いました。

「お母さま――ツ」

消えいるような悲鳴が聞えたので、私はハツとして、重造の肩越しに見えるドアーに眼を向けました。そして二、三人の男に突つき廻されながら転がり込んで来た喬子の姿を見た時、思わずくら〳〵と眼まいがして気が遠くなる程の驚きに打たれて息をのみました。

（二）

あゝ、なんとした事でしよう喬子は前を掩う布さえ許されず必死に前かがみになつて部屋の中へ突き出されると、太股を合せて冷たい床の上にうずくまつてしまいました。両手はむごたらしく後に捻じ上げられて、荒縄が蛇のように乳房や二の腕に喰い込んでいるのです。声をのんで羞恥と恐怖に泣きぬれる喬子の姿を眼のあたりに見た時、母の私にはどれ程

辛い責苦であつたでしよう。若い娘盛りの喬子の死ぬ程の羞しさがよく判るのです。

私達のそんな苦悩をよそに、やがて木製の大きな拷問椅子が運び込まれて来て喬子のもがき廻る両足は左右に開かれて椅子に縛りつけられてしまつたのです。

「源、水を持つて来い」子分に持つて来させた水を、重造は喬子の口から無理矢理に飲ませるのです。私が堪えかねて眼を開くと真正面に喬子の椅子に縛られた姿が、苦悶と羞恥に身動き出来ぬ身体を波うたせているのが見えました。

（三）

私はそつと眼を開いて喬子を見ま喬子は拷問椅子に腰掛けさせられた姿のまゝ、乳房がセイセイと苦し気に息づいて、全身の筋肉が時々ピクピクと反射的に動くのでした水を無理矢理飲まされた為か、なだらかな腹部の曲線は常とは違つて異様にプックリと盛り上り、全身は雨に濡れたように濡れていました。喬子は尿意を催して来たのです。いやという程水を飲まされ、冷たい地下室で裸体にされているのですから無理もありません最初のうちは腰をもじ〳〵させたり、足の指先に力を入れなどしてこらえていたのでしようけれど私の眼にもその排泄の苦痛をこらえる様子が判る時分は、もうこれ以上辛抱出来ない程の限界に達したのでしよう。

「……お、お願い、御不浄に行かせて、ああ……」

喬子は恥しさも忘れて現在の敵に向つて蚊の鳴くような声で哀願しました。

「え、なんでえ、なんでえ、足の裏がかゆいのかい、え？」

知つていながらわざと、とぼけた男の一人が喬子の足の裏を擽るのです。

「あーツ、アア……ツ」

喬子は縛られた身体を引き締めて懸命に生理的な苦痛と戦いました。

然しそれも時間の問題でしかありませんでした。限界一杯に達した生理現象は、男達の好奇の眼の前に迸りました。喬子は消えいる程の恥しさに差し俯向き泣いていました。

（四）

それから一時間程の間、嬲りものにされた後、喬子はどこかへ連れて

行かれ、意識を失つた私が気の付いた時は、さつきとは違つた畳を敷いた部屋に転されていました。

「お母さまツ、お母さま、しつかりしてちようだい」

どうしているだろうと心配していた末娘の君子の声なのです。私はハツと限を開き疲れ切つたからだを起しました、その時、襖を開けて重造がニヤ〳〵笑いながら近づいて来ました。

「君ちやんとか云つたなア、エヘヘ大人しく俺の云うことを聞きさえすりや、何もひでえこたあしねえよ、その代り、若し、云つた通りにしなきや、こうするんだ、いゝか、よく見ときな」

こう云うと、私の着物の双肌をグイグイと引き脱がせて持つていた煙草の火を胸といわず、背中といわず顔といわず無茶苦茶に押しつけるのです

「ううツ……ムムツ、ヒーツ」

突き刺すような熱さに思わず呻き声を洩らす私の姿を見て、君子は転げるように私にすがりついて来ました。

（五）

重造はゆらりと立ち上つて君子に近づいて来ました。

「アツ、いや、いやツ」

重造はもがく君子を畳の上に俯伏せに押え込むと、膝で君子の背中を押しつけながら、見守る私の前でゆつくりと、しかも素肌に細引きが喰い込む程、ひし〳〵と縛り上げるのです。あゝ、何という無惨な姿でしよう、胸に三巻きも廻された縄は恐らく一本の小指も差し込めぬかと思うばかりに膚に喰い入つて乳房は大きく細引きの間から盛り上つているのでした。

（六）

キリ〳〵と滑車が鳴り、太いロープが重造の手元に引かれて君子の縛られた後手の縄と結び合されてしまいました。必死に裸身を前にかゞめる君子の悲しい努力も何の効果もありません。一寸、二寸とロープは引かれて吊り上げられてゆくのでした

「アツ！あーツ……」

背後に廻された腕のちぎれるような痛みに君子は悲鳴を上げて、縮めていた脚を伸ばして畳に足をつけ少しでも身体の重みを助けようとしました。

（ＫＫ通信連載地獄絵より）

緊縛美のオンパレード（1）

緊縛美のオンパレード（2）

緊縛美のオンパレード（3）

緊縛美のオンパレード (4)

奇譚クラブ

1982年10月号

生人形地獄

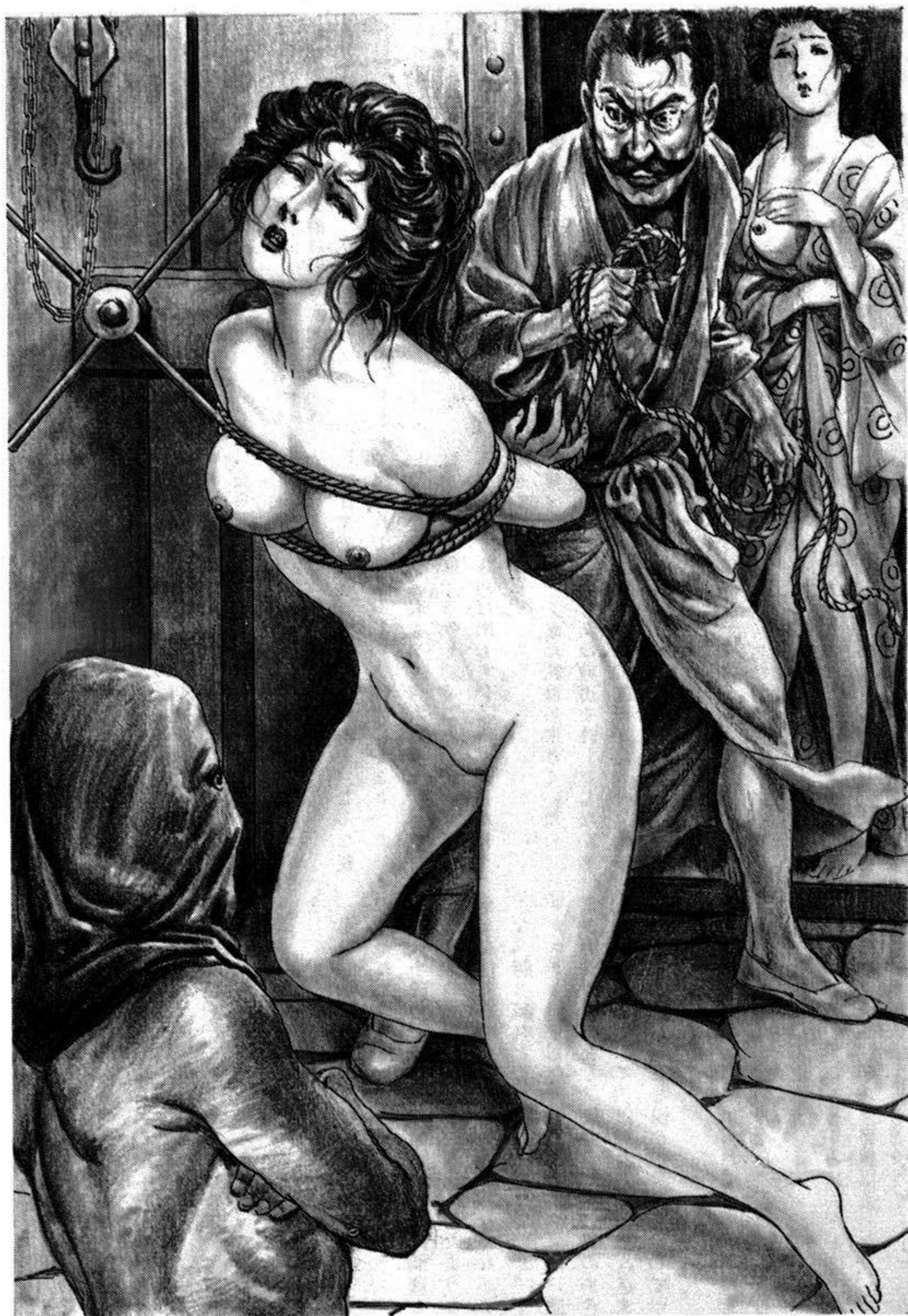
美保戸実彦

連載第七回

あらすじ

　龍二郎は名家の生れながら身をもちくずし、女郎屋・天狗楼の女衒をなりわいとしている。
　父親の代に親交のあった須黒男爵は龍二郎の常顧客であり、龍二郎は男爵から特別待遇を受けている。
　男爵邸におもむき男爵が折檻中の奥女中小夜を嬲るのを手つだい、美肉のごしようばんにあずかる。
　帰り際、屋敷の玄関にうずくまる乞食の娘を捕えて天狗楼につれ帰るが、父親は乞食姿に身をやつして仇討ちを企てていた士族の者。娘の姉はなんと天狗楼の女郎に身をおとしており、ちようど不都合があって主人より折責を受けているところだった。

呻くように泣いた敦子夫人

　まばゆいばかりの白光のもとに一糸まとわぬ裸形を曝し、あろうことか小間使いになぶられて、浅間しい悦びを極めてしまった敦子夫人は、もはや生きた心地もない。羞ずかしい汗に上気させた頬を必死にシーツにこすりつけて呻くようなすすり泣きを洩らしつつ、緊縛の身をうねらせている。
　だが男爵にしてみれば、結婚以来はじめて心ゆくまで溜飲を下げた思いだ。が、溜飲を下げれば下げるほど、もっとこの美しくも気高い妻にみじめな思いを味あわせてやりたくなってくる。それは成り上り華族が堂上華族に対して抱く劣等感によるものかもしれなかった。
（それには高崎雅彦との姦通を口実にすればよい）
　夫が妻を責めるのにこれ以上の口実はなかった。
　面も上げられぬていの敦子夫人を、男爵は床から引きずり起こした。いたいたしい後ろ手姿をぐらりと崩しそうになるのを縄尻を絞って立ち上らせた。
「歩けい、この売女」
「……こ、これ以上、なにをなさるおつもりですか……このような恥をお見せになった上に……」
　よろめきつつも抗議する夫人を、男爵は戸口へ突きとばした。
「高崎とのことは、とうとう口を割らなかったな。その強情さをすこし撓め直してやろうというのだ」
「高崎さまとは、何もありませぬ。信じて下さい」
「そんなこと誰が信じるか。それ、トットと歩かんか」

「ああ、いやでございますッ………、このような浅間しい恰好で……」
襖を引き開けて暗い廊下に突き出された夫人は、ヘタヘタとそこに白い裸身をしゃがみ込ませた。
「どうか、おゆるしを……女中達に、見られてしまいますッ」
あたりをはばかり押し殺した声で泣訴するのを嘲笑うように、男爵はわざと大声をあげる。
「おお、誰が見ようと構わんぜ。罪人の引き廻しだからな」
「ヒイ……」
ますます身を縮かめる敦子夫人を、男爵は弱腰を蹴り上げて無理やり引き起こし、引ったてた。その後をお小夜が帯ほどけの長襦袢姿でオロオロとついて行く。
淡い常夜燈の下に鈍く光る廊下はくろぐろと続いている。奥のその辺は左右に上女中たちの寝室になっている。女中たちはさっきからの騒ぎで眼を覚ましているに違いない。襖や障子の陰で耳をそばだてて、泣きながら引きずられて行く奥さまをうかがっているに違いないのだ。
だが廊下はシンと冷やかなまでに静まり返っている。その中を髪もしどろにうちしおれて曳かれてゆく敦子夫人の裸形は、幽鬼さながらだ。
「……せめて腰だけでも、覆わせて、くださいまし……」
何度目かにそこにヘタリ込みそうになりながら、夫人は哀願した。
「ならん。女囚は素っ裸と相場がきまっとる」
しじまの中に夫人の白い尻がパシッと音をたてた。
昨日まで君臨していた屋敷内を、こんな姿で曳かれてゆくみじめさは死にもまさった。いくら腰を引き股をスリ合わせても、外気が腰を下腹を撫でるのを防ぐことができず、そんな所までさらけ出しているみじめさが背すじを駆けのぼる。
実家から付いて来た乳母が生きていたら、体を張ってでもこんな非道を許しはしなかったであろう。しかしその乳母が亡い今、敦子夫人を身をもってかばおうとする者は一人もいないのだ。たった一人味方と信じていたお小夜も、すでに男爵のあやつる人形になりさがって、この苦境にただオロオロと泣くばかりなのである。

相像を越える地下部屋の惨

同じ屋敷に主婦として住みながら、敦子夫人はこの地下室に足を踏み入れるのは初めてであった。妻は表向きの事に口をさしはさんではならぬという亡き父の厳しいしつけのためだ。女中たちのヒソヒソ話から、この屋敷のどこかにいかがわしい地下室があって、夫がひまさえあればそこに入りびたっているということは薄々知ってはいたが、知らぬふりをしていた。
その部屋が、これほどにも想像を絶するものだったとは――
時代小説の挿絵で見る徳川時代の拷問蔵と西洋中世の異端審問所とを一緒にしたような見るだけで総毛立ち慄えが止まらなくなるような、隠々滅々とした雰囲気ではないか。グロテスクな形をした拷問具のかずかずが、燃えさかる暖炉の火と、壁のランプのほのめきとに照らし出されて、白裸の生贄が連れ込まれて来たのに、陰惨な悦びの身悶えをしているかのようである。
「あれらのどれかに　けられて、その柔肌を血だらけにしたくなかったら、正直に姦通したことを認めるんだな」
そこの石敷の上にしゃがみ込んでしまった夫人の腰を蹴りながら、男爵は言った。
「そ、そのようなことは、誓って……」

「フフン、強情な奴よ。姉の優しさの半分でも持ち合わさんのか」
いま男爵が何かと口実をもうけて夫人をいたぶるのは、夫人の姉、子爵未亡人涼子をここに引きずり込むための予行演習みたいなものだ。妹よりその気品と美貌においてはるかに勝る涼子未亡人をここに引きずり込んで、思いのままになぶり抜く日も、そう遠いことではないと思うと、妻を責める想いにも自然に熱がこもってこようというものだ。
「おい、牛太」
男爵の呼び声に、石壁の一部がゆらいだように黒い巨大な姿が進み出た。中世の拷問吏のかぶるような眼だけくり抜いた、肩までかぶる黒いマスクをつけ、下半身には黒いタイツをはいている。黒皮のチョッキの胸に組んだ腕は女の脛ほどもあろうという太さだ。
敦子夫人は牛太の魁偉さよりも、自分の屈辱の裸形を下賤な男の眼に曝す羞ずかしさに、魂消えんばかりの悲鳴をあげて、身をしさった。
「あ、あなた、この人は……この人はッ?」
「拷問蔵に拷問吏はつきものよ。牛太、この女はこの屋敷の奥方、つまりわしの女房だ」
ヒイーッと敦子夫人は身も世もなく裸身を揉み捻じる。黒い穴からのぞいたふたつの眼が、この家の女主人でありながら、天上と地下に分かれて、影さえ踏むことを許されなかった女性の生身の悶えを、ジーッと見据えている。
「それが事もあろうに姦通をしおって、口をぬぐっておる。その口を開かせてやるのだ。まず、吊るせ」
軽くうなずいて歩み寄った牛太に、男爵は縄尻を渡した。
「あなた、お願いでございますッ。嘘は、申しておりません……ああ、こ、こんな人にわたくしを渡さないで下さいましい」
石の上を引きずられながら、敦子夫人は半狂乱に叫びたてた。
だが唖の牛太は男爵の命令にだけ犬のように服従する。床に膝まづいて事の成りゆきを見守っていたお小夜は、わが身に加えられた数々の責めのことを思って、長襦袢の袖で顔を覆った。
鎖が硬い音をたてて鈎の先端に掛けられた敦子夫人の裸身を引きずり上げてゆく。唖の牛太の操作するハンドルが歯車をギリギリ鳴らして、夫人の体重に逆らっている。
「か、かんにんしてッ」
下肢を必死にすくめた夫人の上体が浮き上り、続いて腰が引き伸ばされた。よじり合わせた太腿の付け根に陰毛がのぞき、鎖の音につれてそれが次第にあらわになってゆく。吊り上げられた体を支えるには足を立てていなければならず、そうすれば上体が引き上げられてゆくにつれて、いやおうなく下肢を伸ばさねばならないのだ。
「ああ、もうッ……」
敦子夫人はそこに立って冷たい眼で眺めている夫に涙の眼を向けた。丸髷がガックリ肩先に崩れ、ほぐれた髪が乳ぶさの喘ぎを刷いている。
腰が伸び切って、下腹がいやおうなくさらけ出された。ガクガク慄える膝が屑曲を許されなくなり、夫人の体は完全に伸び切った。剝き出しの白い腹が、縦長のかたちのよい臍を中心にして、ふいごのような喘ぎを曝し、その下にけぶる繊毛が極度の羞じらいにフルフルとそそけ立っている。
ハンドルをロックした牛太が、両側の壁際から鎖を引きずって夫人の足元まで持ってきた。その鎖の先端には革の枷が取りつけてある。その枷を夫人の細く締まった足首にひとつずつ取りつけた。それからふたたび壁の所にもどって、別のハンドルをまわしはじめた。
ハンドルはチェーンブロックを介して床に這う鎖を左右に巻きあげてゆく。

「ああッ……い、いやですッ」
　夫人は足首を左右に引っ張られて、腰を激しくよじった。吊り鎖がキリキリ鳴った。
「いや……いやあッ」
　爪先立ってなんとかあらがおうと足ずりしても、鎖はかすかなきしみをたてながら、か弱い力などないかのように着実に夫人の足を開かせてゆく。内股に折り曲げた膝が非情な力で引きはだけられ、内股の断末魔の痙攣がさらけ出された。
　悲鳴が慟哭に変った。いまやいかに股に力を入れようと腰をよじり立てようと、女としてもっとも隠しておきたい部分を寸分も人の眼からへだてることは不可能なのだ。夫人のすらりと伸びた白い下肢——洋装など一度もしたことなく、従って、つつましく歩くときの歩幅以上に拡げたことのない下肢は、いまや六十度の角度をもって、あられもなく開き切ったのである。
「いい恰好だな、敦子。高崎に見せてやったら何というかな」
　ガックリ折った夫人の顔を髪を摑んで引きずり起こした男爵は、夫人の泣き顔にたたきつけるように高笑いした。そして、夫人の髪をおどろにほぐすと、それを束にして吊り鎖にからめつけたのである。こうして敦子夫人

は羞恥に泣く顔さえ隠すことができなくされた。

羞恥の顔すらも隠せずに…

「自分がいまどんなに浅間しい恰好を曝しているか、わかるか。あン?」
　男爵は縁なし眼鏡を光らせて夫人の屈辱にまみれた泣き顔を覗き込んだ。
「お蚕ぐるめで育てられてきたお前には、とても想像もできない羞ずかしい恰好だぞ」
　夫人は眼を固く閉じ、ほつれ毛をひとすじふたすじキリキリ噛みしばって、慄えている。その凄艶とも凄惨ともいえる貌が、男爵にとっては、ふるいつきたくなるくらい好もしい。
「牛太、鏡を持ってこい」
　台付きの大きな姿見が、夫人の前に立てられた。
「眼を開けてよく見ろ。姦通をおかした罪の肉体がどんなものか自分の眼でよく見てみろ。あまりの罪ぶかさに、ガマのあぶらを絞り出すぞ」
　あごをつまんでゆさぶられる敦子夫人は必死に眼をつぶっている。が、男爵は強いて夫人の眼を開かそうとはしなかった。人間である以上、いつまでも眼をつぶり続けることは不可能なのを知っているからだ。そして薄眼ででも眼を開いたが最後、その映像は自分に返ってくる。
　男爵は夫人の呻き泣きに耳を楽しませつつ抜けるほどの白さにランプの灯影を遊ばせている夫人の肌をいじりまわし始めた。縄目に絞り出された乳ぶさを握りしめて乳首を絞り上げ、さらに柔かな腹から腰のくびれを撫でまわす。ブルブル慄える尻にツイと移った。冷やっこい肌ざわりがキュウと締まって、掌の下におののき悶える手ざわりは、自分の妻でありながら、かつて知らないものだった。
「いい尻だ。高崎もさぞ夢中になったことだろう」
　さらに尻から内股に移り、そこから鼠蹊部を逆撫でした。
「お前がこんな毛の生やし方をしていたとは今になるまで知らなかったよ」
　こんもりとした盛り上りを掌にくるんで摑みしめるようにしていじりまわすのだ。夫人は悲鳴をあげ、呻き、そしてはらわたをよじるように泣いた。
「高崎もこんなようにして可愛がってくれたかい。そうしてお前は、息を乱しながら、しがみついていったんだろう」
　開き切った柔らかな肉の閉じ目にスイと指を這わされて、敦子夫人はひときわ高く泣き声を噴き上げ、腰を激しく振りたてた。
「さっきはわたしのものを咥えて、ここを振りたてながらよがり泣きしたというのに、もうはねつけるのかね」
　いかにも貴族の令夫人らしくつつましやかな閉じ目を、強からず深からずになぞりあげながら、男爵は夫人のうなじにわざと熱い息を吹きかけ、もう一方の手で乳ぶさをこねまわすのだ。
　夫人の肌はしっとり汗をかき、それがほのめく灯影を吸い込んで、妖しい生きものに変身してゆくようだ。
「これが最後の慈悲だ。今言ってしまえば牛太の鞭でこの玉の肌を裂かれずともすむ。どうだ、正直に言って胸を軽くしたら」
　お為ごかしの言い方に、敦子夫人は泣きながらも、激しくかぶりを振った。
「そうか、それほど高崎との思い出を胸に抱いていたいか」
　男爵はさもガッカリしたように言うと、牛太にあごをしゃくった。
「わしの女房だからといって手加減することはいらんぞ。まず十打て」
　牛太の手にしたのは先がいくつにも分れた革鞭であった。それに尻をなぜられて、夫人

はヒイーと喉を絞りたてて腰をゆすった。
「シミひとつない、いい尻だ。大事に打て」
牛太は覆面の奥で呻くような声をあげた。もと曲馬団にいたこの唖男が、興奮し切った時喘らす呻きであった。
男爵は鏡の傍に椅子を引き寄せて掛け、お小夜を膝に抱き上げた。
「どうだ、奥さまのあの恰好は」
「……おそれおおうございます……眼が、つぶれます……」
「ハハ、眼がつぶれるか。ハハ、こいつはいい」
一撃が夫人の　惑的な尻に鳴った。夫人は髪を吊られて反り気味に曝した顔をさらに反らせて、喉を絞った。体のどこかをぶたれることなど、かって一度もなかった夫人だ。まして尻を鞭打たれるなど、あろうこととは信じられなかった。それが今起こっているのだ。素っ裸に剝かれ、縄目の辱かしめを受けて——
だが唖の牛太にそんな夫人の内心の苦悶など問題ではなかった。自分の振るう鞭の下で類いまれな美臀がおびえにうねり、激痛に痙攣するのを見ることだけが生甲斐だ。
透けるような尻肌はたちまち赤の色を浮かせた。その色に押しかぶせるように二撃をたたき込んだ。黒い蜘蛛手が雪白の尻に触手を拡げ抱き込むようにしてからみつく。たおやかな筋肉がおののき、悲鳴があがる。
「どうかね、鞭の味は」
男爵はお小夜の乳ぶさをいじりまわしながら、楽しげに夫人の苦悶する顔に問いかけた。ねっとり生汗を噴いて、ほつれ毛を噛みしばった表情はなかなかいい。羞ずかしい毛まで丸出しにした腰が、ひと打ちごとによじれるのが、その表情とあいまって、すごく色っぽくもある。
「お、おゆるしを……」
五つ六つ打ちかまされると、夫人は息もたえだえの様子で、屈服の呻きを絞り出した。夫人の雪のようだった尻は全体が腫れぼったく赤らみ、所々にみみずの這ったような赤紫色の鞭痕を刻んでいる。
「高崎とのことを白状するんだね」
「……——」
弱々しくかぶりを振った。それを荒々しく拒否するように鞭が鳴り、敦子夫人は泣き声を悲鳴と共にドッと噴き上げた。身におぼえのないことを責め問われるつらさ——それがひそかに愛する男とのことであるだけに一層つらい。崩れそうになる夫人を支えているのは、姦通罪の汚名を愛する高崎と共に着せられることは、この愛の冒瀆を意味するからであった。
「どれ、牛太、わしがやって見よう」
男爵はお小夜を膝から降ろして立ち上った。

濡れ衣を着せる陰気な悦び

男爵にしてみれば、姦通は口実だから、夫人が口を割ってくれない方が楽しみも多いわけだ。もっとも無実の罪をかぶれば、それはそれで責める口実になるが。
男爵は壁に掛けた幾種類もの鞭の中から、愛用の乗馬鞭を手に取り、夫人の前に立った。
「これはちと痛いぞ」
内股を軽くたたいて、夫人の瞳をおびえにすくみ上らせながら、口髭をゆがめて薄笑った。
「それに尻と違って体の前の方は神経が鋭敏だ」
ピンピンと腹を打った。柔らかな腹が疼痛によじれ、悲鳴が苦痛に絞れた。
「お、おゆるし下さいましッ」
「そら、ここはどうだ」
繊毛を盛り上げた柔かな丘がなぎ払われた。女の急所をおそわれるおそろしさは、夫人から悲鳴さえ奪った。重く呻いて、ビクリと腰を

慄わすところを、今度は股の付け根、おびえにヒリヒリしている鼠蹊部を抉った。
急所急所を狙い打ちする底意地の悪い男爵のやり方に、敦子夫人は見栄も恥もかなぐり捨てたような号泣を噴きこぼしだした。男爵の鞭はほとんど肌に痕さえ残さぬ軽いものではあったが、女に与える恐怖の点では牛太のそれにはるかにまさった。次にどこを打たれるかというおびえが錯乱を呼ぶのだ。
さっきまで固く閉じていた眼をカッと見開いて、夫人は鞭の行方を追った。いやでも姿見に映る自分の姿が眼に入った。胸も腰も丸出しにしてあられもなく股を踏みはだけ、髪をおどろに振り乱して眼を吊り上げている自分の姿が。が、そんなみじめさに気を奪われているいとまもなく、鞭は飛んでくる。
張りつめた乳ぶさが横になぎ払われ、ヒイとのけぞったところを、さらけ出した腹に次の鞭が打ち込まれた。と思うと内股をおそわれた。
「ゆるしてッ……お、おゆるしをッ……」
あぶら汗のなかにのたうちながら、敦子夫人は息もたえだえに泣き散らす。
「牛太、お前は尻を打てい」
男爵は落ちかかる眼鏡をズリ上げながら命じた。

尻を打たれて反り返るその腰に男爵の鞭がたたきつけられる。敦子夫人は鞭のサンドイッチの中に泣きわめきのたうちまわった。白磁の肌は無残に傷つき破れて、ところどころ血をにじませはじめている。
（ここら辺が限度かな）
打たれるたびに白眼を剝き、しまりを失なった口の端からドロリとよだれをあふれさせる夫人の様子を見て、男爵は判断を下した。
牛太に停止を命じておいて、最後の焼き入れを、股の間を下からしゃくり上げるようにして行なった。
「う、うむ……」
もっとも傷つきやすい女の急所をまともに打たれた夫人は、四肢を断末魔さながらに痙攣させると、ガクッと首を折った。髪を掴んで顔を引き起こして見ると、完全に白眼を剝いていた。
「フン、あくまでも好いた男に心中だてか」
眼鏡の奥で好色な眼を光らせながら、かって見せたことのない妻の無防備な姿を眺めやる。気品と矜りの衣裳をまとっている時より何倍も色っぽく見えるのだ。くびられた乳ぶさも喘ぐ腹も、力を失なった腹も、ビッシリとあぶら汗に覆われて、肉そのものが剝き出しになったようだ。ほつれ毛をしどろにまつわりつかせた横顔も、閨事の果てを思わせる艶やかな上気を見せている。
ねっとり掌に吸いついてくる乳ぶさをもてあそんでいた男爵は、夫人が無意識のうちに喘ぎだすのを見て、体をしゃがみ込ませた。艶っぽくもつれ合った繊毛を掻き上げて縦割れを剝き出しにし、指を這わせた。
「やっぱりな」
縦割れは蜜をいっぱいためて、灼けんばかりに熱かった。指を両側にかけてグイと押しくつろげると、濃く煮つまった吐液がトロリとあふれ出し、内股に流れた。
「尻打ちは女の体を燃え上らせるというが……華族の女も例外ではなかったわけか」
ほくそ笑みに男爵の口髭が慄えた。

めくられた肉襞の甘い匂い

内につつましく折りたたまれていた襞肉は充血し肥大してプリプリと外側にめくれ、肉から溢れるものにぬらぬら光り、その頂点では実が瑪瑙色の頭をハッキリ見せている。そこらから立ち昇る女の匂いはむせ返るばかりである。
（これが発情した男爵夫人のお××××か）
舌なめずりながら男爵は指で襞をなぞり、

実を弾いた。完全に剝き上げて息を吹きかけてやると小さな生きもののようにうごめいた。その間にもさらけ出された小口の赤くただれた肉は喘ぐようなうごめきと共に、熱い吐液を吐き続けている。

剝き出しの実をゆっくり擦り始めると、敦子夫人は腰をよじって低く呻き始めた。

（高崎に可愛がられている夢でも見ているのか）

実を擦りつつ、二本そろえた指を、熱くとろけた肉の中にゆっくりもぐり込ませた。

「あ……」

鼻から声を出しつつ、夫人は咥え込まされたものをギュウッと食い締めてきた。喘ぎと共にクッ、クッと締めたりゆるめたりする。男爵は指を根まで埋めて、ゆっくり出し入れしはじめた。夫人ののけぞらせた顔が眼に見えて紅潮し、むずかるような鼻声を洩らしつつ腰をゆすりだした。その女っぽさは男爵さえ眼を瞠ったほどだ。

（これが男爵夫人の正体か。それにしてもよく締めるな）

「ああ……」

感極まったような声をあげた敦子夫人は、自分の声で我に帰ったように、ハッと眼を開いた。ヒイーッと悲鳴をあげた。

「な、なにをなさるの……やめてくださいましッ」

「遠慮することはないぞ、ついさっきまで鼻を鳴らしてよがり声を出していたんだ」

「いやッ……やめて……」

満面に朱を注いで、夫人はがむしゃらに体をよじりたてた。だが、股を開いて固定された体は、男爵の指なぶりを防ぐことはできない。悲鳴をあげるたびに肉が締まるので男爵をかえって悦ばせるくらいだ。

「体裁ばかりつくろっていずに、裸になったらどうかね。お×××は正直だから、こんなにグチョグチョになっているぞ。それも鞭でしばかれた結果だ」

「ヒイーッ……」

敦子夫人は鎖に巻きつけられた髪が引き痙れるのも構わず、顔を振りたてた。なんとかおぞましい指を振りほどこうと腰をよじりまわした。が、その運動そのものが刺戟を体の奥にもたらすのだ。夫人は歯をキリキリ嚙みしばったと思うと、すぐ大きく口を開けて熱い息を吐く。

「牛太、張型を持ってこい。特号だぞ」

実をこねまわし、小口をせせりたてながら、男爵は命じた。

特号というのは小、中、大、特、特大と五段階に分かれた張形の大きさをあらわしている。直径はそれぞれ、二、三、四、五、六糎である。つまり符号というのは直径五糎の張形だ。材質も古典的な水牛の角や黄楊ではなくて、針金を芯にして生ゴムを男根形に整形したものである。むろん雁首や茎胴のゴツゴツは実物以上に誇張して造ってある。

それを見せつけられた敦子夫人は魂消えんばかりの悲鳴をあげた。

「どうだ、みごとなもんだろう。お前の物欲しげなお×××にはピッタリの代物とは思わ

瘤のようにふくれた先端で夫人の頰を撫でまわしながら、男爵は笑った。夫人は眼尻を引き痙らせて青くなったり赤くなったりしている。

「いくら高崎でも、これほど太くはなかったろうが、え？」

「……かんにんして……そ、そのようなものは、おしまいになって……」

「フフ、どこへしまおうかね」

細頸をさすり上げられて、夫人はおぞましさに身ぶるいした。

「お、おゆるしを……おゆるし……」

「その口で、いまになんと言うか、じっくり聞いてやるぞ」

男爵はふたたび夫人の前にしゃがんだ。隠

しようもなくさらけ出した下腹の、繊毛をおののかせている柔らかなふくらみに押しつけてこねまわした。引き痙るようにおののいている鼠蹊部を抉った。

「……おやめ下さいまし……おねがい……」

　敦子夫人はおそろしさに舌をもつれさせながら、白い腹をふいごのように喘がせる。

「欲しそうにお×××をパクパクさせていながらかい？よだれだって、それ、こんな所まで垂れ流しにしておる」

　太腿の半ばまでしたたった吐液をすくい上げられて、夫人はヒイーと泣いた。

　男爵は繊毛を掻き上げて剝き出しにした縦割れを左の指で大きくくつろげ、張形の先端を充血しきった襞に軽く押しつけ、襞を分けるように前後に動かした。

「どうですかね、奥方さま」

「ああ……」

　夫人は内股をビクッビクッと慄わせつつ、そこから生じるどうしようもない快感に声をあげる。剝き上げられた実を小突かれてピクッと背を反らした。

「ご、後生でございますッ……そんなものをお使いにならないでッ……」

　声が昂ぶりにおののき、喘ぎにとぎれた。

「子壷をたぎらせているくせに、まだそんなことを言っておるか」

　ゆっくり小口に押し当てた。

「ヒイーッ……い、いやあ……」

　腰をよじったことが、濡れ切った小口に捻じ込むようなかっこうになった。ぬめ光る秘肉が苦しげに喘ぎ、襞がくろぐろとした先端をくるみ込もうとするかのようにうごめいた。

「う、うむ……」

　じわりと汗を生白い額ににじみ出させながら、引き裂かれる苦痛に、夫人は美貌を引きゆがめた。

「これくらいのもの咥え込めぬはずがあるまい」

　男爵はじょじょに力を加えつつ、肉がひしぐさまを凝視している。さすがに額をベットリの汗にしていた。

「わしに処女を捧げたときも、こんなものだったか」

「ヒイ……ゆるしてッ……ヒイイ……」

　息もたえだえに夫人は腰をよじった。とたん、先端のもっとも拡がった部分が、肉壷の中に消えた。

「あッ……ハアッ……ハアッ」

　肩で苦しげに息をしながら、夫人はどうにか咥え込んだものの巨大さに白眼を剝き、歯をガチガチ鳴らしている。

　まさにそこは鶏の卵を呑み込んだ蛇さながらの様子を呈していた。すぐにはそれ以上呑み込めずに、咥えた肉を引き痙らせながら喘いでいる。

「どうだ、入れるぞ」

　声をかけられても、息もたえだえに首をぐらぐらさせるばかりである。

　男爵は、太い胴を捻じるようにして、ゆっくり沈めていった。

　重い、肺腑を抉られるような呻きが、夫人ののけぞった口から絞り出された。秘肉が、襞が引きずられて、めくれ込んでゆく。実がはじけ出てピクピク躍る。

「どうだ、まだ白状せんか」

　なかばでひと息いれて、男爵は夫人の顔を振り仰いだ。

　おどろな黒髪になかば隠れた夫人の顔は苦悶と愉悦をないまぜにして、紅の汗にまみれつつ、絶えだえの息をついていた。そして男爵の問いに対して、ゆらゆらとかぶりを振って見せるのだった。（以下次号）

「磔」再考

古代愛彦

何気なくページを繰って思わずドッキリ。「磔」という大きな活字と、それに珍らしく本格的に磔柱を背負わされた写真が目に入ったものですから。ハリツケーというと、子供の紙工作などに「このところをハリツケます」などと書かれてあったり、若い女性同志が、「きょうはずーっと机にハリツケになってたの」とか言う会話が耳に入ったりすると、もうドキドキして話している人の顔を見るのさえ気恥かしくなってしまうというくらい、このハリツケという言葉に惹かけれいました。でも最近は映画にしろ、小説のさし絵なんかにしろ、殆んど満足できるような磔シーンにお目にかかることはないようです、こちらの要求が大きすぎるのか、先方にいろいろな事情があってのことなのか、時代考証などというものに重きをおかなくなった時勢のためなのか、まあ今どきの時代劇は着物を着てちょん髷をつけていればそれで通るような有様なのですから、期待を持つ方が間違ってるのかも知れません。ち体ロマン派生氏の言われるように、磔に関心を持つ人たちは、そのことをあまり大っぴらに表明しない、口にしたくないという気持ちがありますから、いいかげんな磔シーンがはびこるということになるのでしょう。ところでロマン派生氏説くところの磔の美学の要件はまことに的確でありその理由の裏付けも明快で、生意気な言い方を許していただけるなら正にわが意を得たりというところでした。　の美学ーというものがあるのかどうかわからないのですが、とにかく悲愴美とか残酷美とかいう言葉もあるようですし、美の感じ方にしろまあ個人の感性の問題でしょうから、それは自由として、物の本によりますと、美学というからには形式の存在が必要な条件となるのだそうですが、ロマン派生氏の説かれるところは磔の美学すなわち磔の形式の確立ということのようですからどうやら、この美学の成立は斯界に認められることになりそうです。江戸時代の刑罰は、なにしろ本人を処罰することよりも、見せしめの方が大事で、再発を防ぐためにはまずお上の力を誇示しなければならない。死刑の執行などはその点絶好の機会というわけで、いやが上にも迎々しい、物々しい段取りにして大衆に示す。いわば見世物、お上主催の残酷ショーというわけです。処刑される囚人が若くて美しい女性だったりしたら、これはもう最高のロードショウで、囚人の肉親や知人以外の人たちにとって興奮の極といった状態だったことでしょう。磔などはこの点いろいろな舞台づくりが必要ですから、他の処刑、たとえば斬首のように、刀をひと振りすれば囚人の首が飛んでそれで一巻の終りというあっけないものでないだけに、当時のSマニアの目はさぞ血走っていたことだろうと想像します実際刑場に着いてから処刑が終わるまでにどれくらいかかったのだろうなどと思います。映画でも小説でも、死罪人はたちまちのうちに柱に上り、すぐさま槍がわき腹をえぐって見物のとなえる念仏のうちに昇天してしまうといった具合でまことにあっけないのです。しかし実際には柱に縛りつけるのだって時間がかかるでしょうし、人間一人を縛りつけた不安定な柱を立て、それを倒れないようにするのだってかなりの時間は必要だったと考えられます。その間中囚人はやり切れない思いで待たされてるわけですから、もっと簡単に殺してくれと言いたいところでしょうが、そこは格式、形式を重んずる封建時代の美徳で磔柱の寸法から材質から、囚人への縄のかけ

方まで厳格に規定されていて、この手続きを省略することは許されないという律気さでしたから、役人たちは忠実に自己の役目を果たしたわけでした。こうして長々と段取りが進められる間囚人は生きた心地もなく過ごしていたわけでしょうが、無実の罪だったりした場合にはやはり、最後まで救いの手の現われることを期待したものでしょうか。考えてみればこのことの方がむしろ残酷のように思われます。囚人は、ただ死んではいないというだけで、生きているというに値しない立場に置かれているわけです。ここにロマン派生氏の言う、足台否定論の意義があるわけです。つまり磔柱の上の囚人は、その足が地面から離れていなければ磔の意味はないということです。俗に三尺高い木の空なんて言葉があったそうですが、囚人は正に空に浮かんでいるわけですでに彼、または彼女の足－肉体は地面－この世から離れて－追放されているという図式が成立するわけです。この足を宙に浮かせてぶら下げられるということがどんなに恐ろしいものなのか、残念ながら私には経験がないので何とも言えませんが、吊るされることによる苦痛はひどいものでしょう。拷問のひとつに吊るし責めというものがあることでもそれは考えられます。磔柱に架けられた囚人はただそれだけのことで恐怖と苦痛にもがき苦しみ、そのまま放置しても死に至ることは想像できます。古代ローマ時代の磔はこの方式だったらしく、例のスパルタカスの反乱の結末で捕えられた奴隷たちがローマとナポリを結ぶ街道の両側に磔柱を林立させて処刑された時も彼等は吊り下げられたまま死んでいったということです。なにしろ三千とか五千とかいう膨大な数の囚人ですからいちいち槍で突いてなどしていたら手間がかかって仕様がないというわけでしょう。ところが映画やTVドラマなどに登場する磔は、この原則を全く無視して、彼や彼女たちは柱に設けられた足台の上にすくっと立ち、両手をひろげて、槍を待ちます。緊張感もなにもあったものではなく、まるで交通整理のお巡りさん。ロマン派氏のお腹立ちもよくわかります。大分前のことになりますが、細かい考証とリアルな演出で評判になった「日本拷問刑罰史」の中の磔シーンでもやはりそうでした。あの映画はドラマの中の拷問や刑罰ということではなくて、拷問と刑罰そのものの種々相を主題としていたという点で画期的な作品でしたが、他の場面はさておき、強盗に押し入って捕えられた男女に対する磔という設定－では正直言って失望という気持が強かったことは否定できませんでした。男性は大の字磔、女性は十字磔で、見せ槍やら、止どめ槍やらと一応の形式は見せてくれましたが、かんじんの縄がけがいけません。御多分にもれずで、足台の上に乗ったお巡りさんスタイル。囚衣が長々と足首までをかくしていたのはいただけませんでした。足台がなければ、体重は当然横木に固定された両腕にかかります。両腕にかかる体重を支えるためには、腕は横木に一本に縛りつけなければならず、それもロマン派氏のおっしゃるように手首、ひじ、肩口を縛る必要があります。ここでロマン派氏の御説に少々疑問があります。ロマン派氏は手首は常に肩より高くなくてはならないとおっしゃっているのですが、足台に乗らず、従って体重が腕、特に肩口のあたりにかかった場合、その部分を厳重に固定、つまり縄がけしておかなければならず、肩の高さは当然手首の高さと水平になるわけだと思うのですが、いかがでしょうか。磔の唯一の実写として有名な、明治初年の英国人の撮影したものなどでも、槍を受けた囚人はかなりもがいたとみえて、胴部はねじれ、大の字に開かせられた両足も多少縄目がゆるんだように見えますが、両腕はがっちりと固定され、それだけに力の抜けた指先が哀れをそそります。ですから映

画などの場合、仮に足台を用いるにしても、それを辛うじて指先の届くぎりぎりくらいの高さにしておくべきで、そうすれば体がずり下がってかかとが足台についたとしても、今度は頭部が両肩にはさまれたような姿勢になりますから、いかにも身動きできないという緊縛感が表現できると思うのですが。「日本拷問刑罰史」はその後何本か亜流作品が出ましたが、皆中途半端で遂にそれを超えるものはありませんでした、それだけにあの磔場面の不徹底さはほんとうに残念でした。ところで、ロマン派氏は日本には開股磔はなかったのではないかとしておられるが、私は逆に、日本の磔は本来開股　だったと考えています。磔は機物などと呼ばれて戦国時代のころに盛んに用いられていたようです。人質やむほんを企てた者などに対する報服的な刑罰としての意味があったようです。両手両足を引きひろげられた姿勢は完全に自由を奪われ、抵抗を封じられた屈辱的な姿勢で、女性にとっては犯される時の姿勢でもあります。この最も屈辱的な姿勢でさらし物にされ、なぶり物にされたあげく殺されたのでしょう。サドの大スターであった織田信長による例の荒木一族の女性たちに対する大量磔はその典型でしょう。男たちに見捨てられて捕われの身となった彼女たちはいわば戦利品ですから、どう扱おうと勝手、百何十人とか二百人とかという女性たちは魔王織田信長の怒りにまかせての一言によって、ことごとく磔柱に架けられることになったわけですが、その当時の殺伐とした時世では一々男だめだと区別なんかしなかったのではないでしょうか。処刑に当たった下っ端連中にとって、ふだんなかなかお目にかかれぬ高級な衣類などは真っ先にはぎ取って群がり集まって分配したことでしょう。どうせ殺してしまうのになにもきれいな着物を着せておく必要はないとばかりに、女たちは腰布一枚残さぬ全裸にひきむかれて、柱に追い上げられたのではないかと想像したいのです。荒くれ男たちの前に屈辱の姿をさらす女たち。その引きひろげられた手首、足首に荒縄がかけられ、身動きひとつできぬ姿をさらさなければならなかった女性たちは戦国群雄割拠時代の最大の悲劇のひとつでしょう。林立する　柱の数はスパルタカス一味の処刑に劣るとは言え、花のような女性の裸身の立ち並ぶ残酷美によって日本刑罰史に特筆すべき出来ごとでしょう。小説やドラマではこの場面は至極あっさりと扱われていますが、それはむしろこの女性たちの最期があまりにも無残強烈だったためであると思います。この時代の人質の女性たちの処刑はかなり多かったようですが、人質なんて便利な品物くらいにしか考えられていなかったのではないでしようか。ロマン派氏御撮影による開股磔はかなりショッキングですが、注文をつけさせていただければ次の点があります。九十一ページの写真について、まず着衣のすそがはだけてそれが主柱をかくしていることです。はだけたままの姿は少し緊張を損うと思いますし、柱がかくれたのは磔らしさを弱めると思います。すそを腰きりくらいにまではしょれば、恥部がかくれ、逆に足がほとんど露出するので開股の姿が強調されると思います。次に、腕にかけられた縄ですが、手首の縄はいいのですが、上腕にかけられた縄が、横木と腕を別々に縛ってあるように見えるのが気になります。これはあくけで横木と一緒に縛りつけるべきだったと思います。もっともこの写真の場合、上下の横木の間隔がモデルさんの体格と合わなかったようなのでやむを得なかったのだろうと拝察します。以上釈迦に説法を覚悟の上でくどくどと書き並べましたが、久しぶりで本格的な磔を見ることのできた興奮からとお許しねがいます。残酷美に彩られた江戸の歴史は限りない夢を呼びます。ロマン派生氏には感謝。

爛漫母子狂乱

老沼悠久

最近の新聞・雑誌やテレビを見ていると、小説以上に猟奇的な出来事が、毎日のように目に入ってくる。おそらくそんな事は昔からあったのだろうが、マスコミの発達の所為か、公になるあるいは公にする、というのが現代の流行りなのか、どんどん世間の人々に知らされていく。

今年の春、潮出版社から出た「密室の母と子」など、まさに小説より奇なりだ。川名紀美という新聞記者がまとめた母子相姦の記録だが。六十四才の母親とセックスしているという三十二才の会社員。母親にマスターベーションをしてもらっているという学生がいるかと思えば、母にフェラチオをしてもらっている大学生もいる。己れの息子の股間に顔を埋めている母親の姿を相像した時、吐き気を催すか、または快感に身体を震わせるかは、人それぞれであるが、奇クを手にされる読者なら後者が多いのではないだろうかと言ってしまえば、筆者の人間性を疑われるであろうか。

母とその子供がセックスをするというのは「密室の母と子」を見る限り、一般の家庭より少しばかり悲劇的な場合が多いようである。父親が居ない、あるいは居ても妻から見離された駄目な夫だとか、妻を全く理解しないワンマン型というように。その結果母親は手近かな所で息子にはけ口を求めていると見られるのが多いようである。

それにしても、息子の一物を口に含みながら母親は夫のことをどう思っているのであろうか、夫の顔など浮かぶことも無くただ快楽を貪っているのであろうか。それとも夫と息子の味でも比べているのであろうか。

母子相姦ということだけではなく、近親相姦すべてについてではあるが、昨年青土社から出版された小田晋著『狂気の構造』において、その発生の原因と動機を書いている。原因としては、①飲酒、②思春期現象、③貧困etc、動機として、①酩酊、②性欲亢進、③性的倒錯、etcをあげている。

注目されるのは、原因・動機のどちらにも酒の所為というのがある。いくら酔っているとはいえ嫌な事なら行う筈もなく、日頃心に秘めていたものを酒をうまく利用しているのではないかという気がする。

また、同著によれば、わが国では近親相姦はそれのみでは罪にはならない為、処罰されることもない、したがって近親相姦を犯罪と定めている国に比べて、その研究は遅れているという。

しかし、切実な問題として取りあげられているのか、あるいは興味本意だけなのかは知らないが、最近はかなり公然となってきていることは事実である。ここで気になるのは、現在公にされている母子相姦の内容はといえば、母とセックスしてどこが悪いのといったものや、受験勉強をしている息子の性欲のはけ口にといったように、どことなくユーモアさえ感じられるものがほとんどである。

けれど、けっして公にしたくない、出来ないといったケースも多くあるのではないだろうか。例えば、暴行・強姦が行なわれている場合だとか、S・M的な事をしていたり、家族入り乱れて乱行セックス等が繰り広げられている場合等々。もしもそれ等から逃れようと考えても、家庭内の事であるから人道的・法律的に、他人とのトラブルより始末が悪いかもしれない。

『現代の眼』本年二月号は、引き裂かれた性と題して母子相姦やその他様々な性を特集している。その中でルポライター柿沼美幸氏

は、最近各誌上を賑わした母子相姦記事のタイトルをあげ、まるで母子相姦流行という感があると記している。

また、柿沼氏は、母子相姦流行現象には不思議な魅力があるらしいとも書いているが、確かに、神聖なものあるいは神聖であって欲しいものを、汚す・犯すということは魅力的なことである。女教師や尼僧・女高生等が、今までに繰り返しその対象とされてきた。

そして、子供にとって絶対に神聖であるべき母さえ汚されてしまった現在、神聖なものはもう存在しないのであろうか。というより、神聖なものなど昔から存在しなかったのかもしれない。神聖であると信じてきたものも内をのぞいてみれば、みんなただの人間だったのであろう。

けれども、犯す側からすれば、神聖なものはあった方が良い。神聖なものを己れと同等にあるいはそれ以下におとしめる、というのは最高の快感であろうから。

ギリシャの神話に、実の母とは知らないで妻にしてしまったオイディプスが、後に事実を知り己れの目をえぐり取ってしまうという話しがある。この物語と比べてみても、母子で戯れ合った後、何食わぬ顔で夫あるいは兄弟と食卓を囲んだりしている図の方が、はるかに恐怖である。

「密室の母と子」の中で、現代のオイディプスはいかにもひ弱であると決めつけているが、果してそうであろうか。平気で母親にマスターベーションをさせる、母にフェラチオをさせ、その口の中に射精をする。そして、父親に対して何とも思わない。ギリシャのオイディプスもきっと驚くことであろう。

五年前、『ソドムの市』を最後のメッセージとして、愛人であったという少年に惨殺されたイタリアの巨匠パゾリーニが、オイディプスを元に『アポロンの地獄』という映画を撮っているが、そのとき彼は、「身近かな問題などということではなく、自分自身がそれを生き抜いてきた」と語り、母と相姦関係にあったことを公然と口にしている。

いつの日か我国にも、母子相姦を禁じた法律が出来るかもしれない。又その反対に、他国が日本を見習って解禁とする時が来るかもしれない。法律家でも研究家でも無い筆者にはわからないことである。

◆

告白

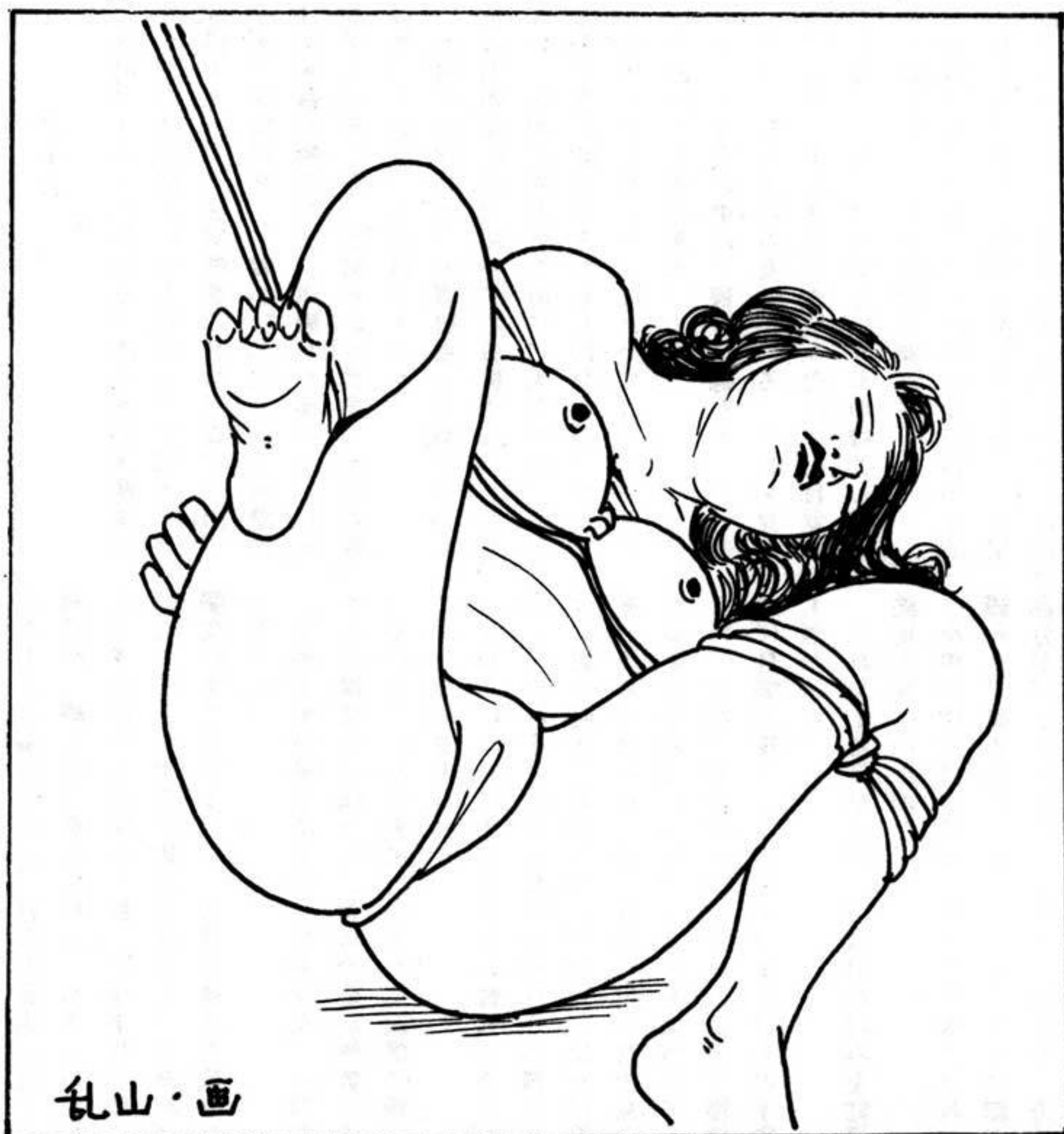
梅川幸子氏を求めて

I・N

梅雨どきになりますと、汗で肌がベトベトして、大へん過し憎いと、普通の人は申されます。なんだか気分迄憂鬱になりますとか。しかし、私のような、生ゴムの、妖しい魅力に、取り憑かれました者にとりましては、この、入梅どきほど、情欲の益す時期は、他にございません。こんな折、私の心に、蘇りますのは、あの、梅川幸子氏のことです。奇譚クラブの黄金時代後半を、ご存知の方は、憶えておられるかも知れませんが、幸子氏は、数少ない女性生ゴムマニアで、当時の「奇ク」に、いく度となく、告白手記を記載されておられました。なかでも、私の心が、発奮の極致にまで達した、幸子氏の手記は、忘れもしません、昭和五〇年三月一日発行「奇ク三月号」の一一五ページに、記載されました、あの、「悩ましい、ゴム合羽」と言う手記でございます。当時、女性の生ゴムマニアと言うのは、大へん貴重な存在（今でも、そうかも知れない）だったものですから、その人気は、凄まじく、ファンも大へん多かったと、記憶致しております。もちろん、この私も、そのファンの一人でした。幸子氏の告白内容は、まず素裸になり、総ゴム合羽（フード付の、上下に別れたもの）を着て、ゴム長を履く。そして、その上からゴムマントを羽織る。最後に、ゴム手袋をはめて、二人でプレイを始める、と言ったものでした。プレイの内容は、同じ姿の二人が、深夜の豪雨の中を肩を寄せ合って歩き、草むらや、水中で愛し合う。そして、相手の男性を、ゴムマントですっぽりと包み込み、水中で抱き合って、おたがい「坊や」「ママ」と名を呼び合ったまま、身も心も昇天すると言った内容だったのです。

私は、幸子氏の顔こそ拝見したことはありませんでしたが、その手記を朗読しながら、幸子氏が生ゴムにもだえる姿を思い浮べ、何度も何度も、自慰したのを憶えております。私は、何とか一度だけでも良いから、この幸子氏と、プレイをしてみたいと望み、当時の編集部に、幸子氏の連絡先を尋ねてみましたが、残念なことに教えては頂けませんでした。その後、色んな風俗雑誌の読者通信欄に投書致しましたが、連絡などは、一度たりとも来ませんでした。ですから、私は今日迄、ひたすら、幸子氏の幻を愛しつづけているのです。一度でいいから、幸子氏にゴムマントで包んでもらい、「坊や」と呼ばれたい。そう言って、頭を撫でてもらいたい。と思って参りました。今、私の考えておりますプレイは、幸子氏の書いておられたプレイにつけ加えて、豪雨の中の冷たい雨にうたれながら、幸子氏に水中に入ってもらい、顔とお尻を、こんもり出して頂くのです。そして私は、そのお尻に、ほおづりして、鼻をアナルに押し込みます。幸子氏の、アナルのにおいに酔い痴れながら、「ママの、いい。ママのは、いい」と、何度も、くり返し言うのです。でも、これは単なる私の夢にすぎませんが。私が思うに、幸子氏のような女性は、おそらくM的要素が強いのではないでしょうか。また、母性本能も強い方だと思われます。私も、どちらかと申しますと、Mの方でして、特にM同志で、愛し合うのが好きです。共に苦しみたいと言う願望が心底にあるようで、縛られたり、ムチ打たれるのは、好むどころか、逆に毛嫌いしたりします。徹頭徹尾M性質ではございませんが、子供の頃、予防注射の順番待ちをして、列にならんでいる時、何とも言えぬ快感が、体の隅まで走ったのを憶えております。そんな私が、生ゴムの魅力に取り憑かれたきっかけは、高校生の頃でした。当時、自転車通学をしておりました私は、雨季になります

と、良くゴム合羽を使用したのです。自宅から、学校迄、約二十分かかります。自転車を漕ぎ始めた、その瞬間から、全身から汗が流れ出しますので、学校へ着いた頃には、もう体じゅう、びしょぬれです。その時、ゴム合羽の身にピタリと締めつけてくるあの感触に、思わず昂奮し、そのままトイレにかけ込み、夢中で自慰したのです。その頃から、私は、生ゴムの魔力に取り憑れてしまいました。高校を卒業し、勤め出すようになってから、「奇ク」を、愛読する様になりました私に、強烈なショックを与えて下さったのが、まぎれもなく、この幸子氏だったのです。あれから私は、ひたすら幸子氏を夢めて参りました。今、この瞬間も、私は幸子氏を夢み、幻を愛しております。私の想像します幸子氏は、和服が良く似合う小柄な女性で、日頃は、お茶お花を嗜しなむ貞淑なんだと思います。暖かな母性本能で、男を包み込んでくれる天使のような女性だと思うのです。そんな女性が、今この時代に、果して存在するかどうかは解りませんが、私は今後も、ただひたすら、幸子氏の幻を愛して行くつもりです。そして、もし万が一、幸子氏の消息をご存知の方がおられますなら、お手数でも、ご一報下さい。お願い申し上げます。

投稿作品

個人的SM考

町　陽一

ブーム

SMブームと云われる。次のSEX産業のポイントはSMという人もいる。SMクラブ、SMスナック、SM喫茶、SM写真、SMビデオ、SM用具……確かにSMという言葉が日常茶飯の物となり、体験した事のないOL女学生に至る迄、SMという言葉とその内容は知っている。これはブームか？

SMとは何ぞや、と肩肘張って論ずるつもりは毛頭ないし、精神的に分析するつもりもない。SMが陽の目を浴び、大らかにプレイ出来る事を歓ぶべきかもしれないが、私のようなオールドタイマーにとっては、いささか、ひっかかるものがある。

プレイ写真の中に、裸身に縄をまとい、楽しそうに笑っている女性がいる。それを見ると、SMの美しさより先に「白け」が目覚めてしまう。違う、SMというものはこんなものではない、と内心の声が叫ぶ。

では、SMは楽しくてはいけないのかと問われると、また、疑問が生じてしまう。SMはプレイしている当人は楽しいものだ。だが、それは笑うような楽しさなのだろうか。

私が初めてSM画（写真なんてお目にかゝれなかった）に出会った時、その全てが陰惨なムードに溢れていた。自分の意志に反して剝がれ、縛られ、責められる。あきらめが生じ、さらにそこの中から歓びが生まれるにしても、決して明るい歓びではなく、人知れず闇夜に咲く花のような、人目を避けた歓びだったのだ。

半地下牢の格子にすがった美少女。その若々しい裸身には痛々しい責めの跡が無数に残っている。そんな表紙がいまだに記憶に残っている風俗誌もあった。

SMというのは人に云えない性質でありながら、それを人に云えないのをむしろ誇らしげに思う時すらあったのだ。他人に話せば変態ときめつけられ、次の日から白い目で見られるような時代だった。プレイを実行してみたい。だが、仲間はいない。かと云って積極的に仲間を探すこともせず、また、その手段も無かった。

それでも風俗誌を読み、自分の好みを結構満足させていたのだ。

小説の中では、美女がむりやり裸にされ、縛られ、責められて行く。だが、もし実際に自分がプレイできたとしたら、相手を一方的に責めることはできなかったろう。後日、プレイする機会にも恵まれたが、必ず合意の上

で行なっていた。すなわち、現実と夢の中とは大いに違うというわけだ。もし現実に、目の前で女性が無理に責められていたら止めに入るだろう、決して見て楽しむことは無いはずだ。

また、SEXの描写が多くなった事も目につく。男である以上(女でもだろうが)その事を嫌うわけではないのだが、そのテの表現は、露わにしない方が良いような気がするのも私が古い人間だからだろうか。以前のSM小説にはSEX描写が非常に少なかったような気がする。女性が囚われ、責められても、肉体的交渉があるか無いかで、大いに違うような気がするのだが。

私も今迄、色々駄作を書いてきたが(もっとも大半は没になる運命であった)SEX描写に関してはどうも苦手だった。全く書かないというのではないのだが、どうも微に入り、細に穿った描写ができないのだ。

それは確かにSEXによる責めもSMには違いないのだろうが、後味の良い責めにはならないような気がする。SMプレイそのものがSEXと同じだと云って云えないことはないが、プレイから比べたら、SEXの行為そのものは非常に単調に思えてくる。

SMブーム大いに結構。若い女性にも顔を赤らめることなくSMという言葉を使える。だが、その反面、今のSMは昔のSMと同じものなのだろうか。これが本当のSMなのだろうかという疑問も生じる。

勿論、SMが変態性であるという気はない。だが、SMプレイというゲームの中では、変態性、陰花性のものが欲しいような気がする。

責め具

勿論、プレイの中での責めである。ということはプレイとしてできる範囲の責めである。昔から東西に伝わる拷問用具はプレイで簡単に使うというわけにはいかない。もっとも近頃ではプレイ用具を備えたホテルやクラブ、さらに個人でも集めている人は多いという。

確かにマニアとしては一度は木馬責めや本格的な吊りを試してみたいと思うのだが、簡単にできる場合はさておいて、色々と余曲折を経てのものであると、どうしても道具にたどりつくまでに疲れてしまう。

個人的に準備するには経済的にもさることながら(実は、これが大問題なのだが)置く場所に困ってしまう。

そこで、人目をしのぶこともでき、かつ、効果的な責めというと限られてくる。

先ず、道具であるが、私は革製品、金属製品をあまり好まない。

革製品は、プレイだけの為に作られたわけだから、余りにも仰々しい。もっとも革鞭だけは好きなのだが(持ってはいないが)

金属製品は女性のデリケートな肌、美しい曲線には合わないと思っている。

責められる女性は美しくあるべきだ。Sの男性としては、その女性の美しさに敬意を払いながら責めるべきだ。

金属は冷た過ぎる、柔肌に困過ぎる、肌の曲線に添わないのだ、確かに縛るという手間無しに、簡単に拘束する事ができるから、手軽であるという事は認めるが、その過程を楽しむことはできない、経過よりも結果を楽しむ人に向いていると云えようか。

というわけで、私は縄を最大限に利用している。

初めのうちは縄でも紐でも手近な物を、さして考えることなく使っていたが、だんだん材質を考えるようになってきた。

最初は、殆どの人がそうであろうと思われるが、綿ロープ。確かにMの人にとって肌ざわりが良くて、気分的に抵抗がない。今でも使うことは使うのだが、あくまでも補助的な使い方しかしていない。すなわち、力のかゝる所には使っていない。

しばらく使ってみると判ることだが綿ロープは引っぱりに対して非常に弱い。特に少し古くなったり、ぬれたりすると極端に力が落ちる。一寸力を入れて縛った時に、ロープが切れたりすると、全く興覚めである。新しいうちでも、体重がかゝるような吊りには絶対に使わないようにしたいものだ。

麻縄、これは写真には非常に効果的だ、絹のような女の素肌に、けば立った麻縄、いかにも、おぞましい感じが良く出る。だが実際に使ってみると、そのケバが、肌を必要以上に刺激する。それが良いというのなら仕方がないが、別のプレイに移る前に、縄だけの刺激が強過ぎると、先に進めないことになる。

同じ感じのものに荒縄があるが、こちらの方が力が弱い、それにケバ立ったものは部屋に多量のゴミをまき散らすから、後の掃除が大変だ。だが、屋外の場合、荒縄はとてもムードがあるものだ。

麻縄の場合、使用前に、新聞紙に火をつけて縄を通し、ケバを焼いておく必要がある。さらに立木等に麻縄をまわし、何度もこすってしなやかさを出す必要もある。たゞし、こうすることによって、強度が落ちるのは仕方があるまい。綿ロープよりはずっとましだが、麻縄も矢張り、強さを過信してはいけない。プレイに使う位の6ミリや8ミリの太さでは、体重をかけない方が良い。

ということで、私が現在使っているのは、8ミリのクレモナロープである。これはしなやかで、肌ざわりも良く、ぬれても大して強度は落ちない。太陽光にさらすと強度は落ちてくるが、日常生活ではそんな事もなかろう。さらに、強度はシングルで成人一人を吊ることもできる。もっとも安全を期してダブルにして使用した方が良いだろう、長さも違うものを二、三本用意する。

他に鞭。これは前述したように持ち合わせがないのでベルトを使う。と云ってもハードな鞭打ちはしない。打つ度に、女体が緊張し、白い肌に赤い筋が残る程度を限度とする。相手が耐えられれば、もう少し力を入れるが、どう考えても、出血に至るまで行なうことはあり得ない。

洗濯挟みは乳首責めに欠かせない。もっとも乳首が敏感な者、慣れていない者にとっては、最初は苦痛が大き過ぎるので、スプリングを弱くする。バネの針金を外して、少し短かく切り取ってから、もう一度、はめ直す。間が少し出来る位でも、結構刺激にはなる。

ロウソク。これも後仕末に困る責め具だ。責めるムードとしては良いし、跡も残らない。少し赤くなる位いで、すぐに消えてしまう。だが、肌に固まったロウの後仕末が大変だ。一つずつ取らないと、床にへばりついて取れない場合がある。一度、風呂場で流してみた。湯をかけながら取ると、外れるのは簡単だったが、流し口が詰ってしまった事があった。

小さな筆はくすぐり責めに良いし、かさばらないから良いが、実はあまり使った事はない。

そして、カメラ。これも一種の責め具と考えても良かろう。普通のカメラも良いが、ポラロイドも視覚による責めの一手段となる。たゞ、プレイの時の撮影は、どうしても、相手から離れなければならないので、ムードが途切れてしまう。別にカメラマンが居れば良いのだが、プレイに第三者が入ることは余り好きではない。リモートでシャッターが切れるモータードライブのカメラがあれば良いのだが、残念ながら持っていない。

プレイに向う時の私の鞄には、以上のロープ、カメラ、二、三の小物しか入っていない。では、それを効果的に使うには……。

責め方

慣れた相手の場合は、いきなり全裸から始

める。もしくは、風呂に入ってもらって、バスタオルを巻いただけの姿からする。

初めての相手の場合、慣れない相手の場合は着衣から縛り、縛り方を変える度にぬがして行くようにする。こういう時、カメラは場面転換の手段として有効だ。

縛る、写す、解く、ぬがす、縛ることと区切りをつけて変化させることができる。

縛り方は、後手縛りを最高とする。初めに手首を縛る、次に胸と二の腕を縛る。その方法にバリエーションはあっても基本的には同じだ。腕を縛ってから手首を縛るというのは好まない。

両手を後にまわして引きしぼると胸が美しくつき出る。単なるヌードでは目立たない程の乳房でも、後手に縛ると結構美しくなるものだ。

それに、両手を後にまわしている事によって、羞しい自分の前面を全く隠すことができないという心理的な責めも味合える。

後手縛りの正座、あぐらをかゝせて足を縛る、そのまゝ上体を前に縮めるのも良い。

脚を後にまわして逆海老、その型で一寸持ち上げてみると、被虐者は軽い恐怖を覚えることもできる。

柱への立ち縛り。脚を揃えるのも良し。開くのも良し。

乳首への責め、くすぐり責めなど。

変に凝った縛り方をするより、後手縛りだけのバリエーションも結構多いものだ。

次に好むのが、吊り。たゞし、これは本格的に吊ろうと思ったら大変な作業になる。いくら相手が小柄で、自分の腕力に自信があっても至難の技である。

だから、吊り上げることは滑車でもないとまず駄目であろう。となると台に立たせたまゝ吊って、台を外すという方法が考えられる。だが、普通の家では吊る場所が比較的低いし、縄に体重がかゝった時、伸びるという事を考えればほとんど、瓜先が床につくような状態でしか吊れない事になる。結局、本格的に吊るには助手が要るわけだ。

では、一人では吊れないのか。

いさゝか変則ではあるが、方法はある。上体を上から吊っておくのは前と同じだ。たゞ、このまゝでは両足が床にしっかりとついている。そこで、片脚ずつ、上に吊って行くというわけだ。逆海老吊りのような形にはなるが、一応吊りにはなる。

吊りの魅力は、第一に女体に喰い込む縄目の深さにある。普通に縛っただけでは得られない喰い込み方が、吊りにはある。それはそうだろう。全体重を縄目が受けるのだから。

たゞし、それだからこそ、縄のかけ方に注意をしなければならない。一ケ所の縄に全体重がかゝってしまうと、苦痛も激しく、息さえできなくなってしまう。どの縄にも、できれば均等に体重がかゝるように気を使って欲しい。

磔、これも好きなスタイル。

何故か。日頃隠されているものが全て露わになるポーズだからだ。特に、腋の下。私は女性のそこに色気を覚える。

近頃は、腋の下を自然のまゝにしておく女性をほとんど見かけなくなったのは淋しいことだ。若い女性の自然な腋の下は色気がある。いやあり過ぎるから手入れをしてしまうのかもしれない。

若かりし日の事、電車で座っていると、前に立ったセーラー服の半袖から自然な腋の下が見えて、大感激したのを今でも憶えている。また、高校時代の同級生と話をしている時、ふと上げた彼女の袖口の中にたくましい自然の繁みを見て、あわてゝ視線を外したのは、まだ純真さの残っている年頃だったからだろう。

腋の下。そこは普段、人の目にさらされることの少ない場所。ノースリーブであろうと

水着であろうと、いやヌードであろうと、立っているだけでは視線にふれることの無い場所なのだ。それだけに、そこの皮膚は柔らかく神秘的なのだ。

自然のまゝの繁み。だが、個人の好みとしては中位が丁度良い。濃過ぎるのは、たくまし過ぎて、圧倒されるし、薄過ぎるのは弱々しい感じもする。などとはいっていても、実際の場では、どれでも良いという事になってしまう。たゞ、もし長期間に亘って親しくつき合える人ができたとしたら、その人には自然のまゝにしておいてもらうように頼むだろう。

一方、きれいに手入れしてあるのも、それはそれで好ましい。中程がふっくらと盛り上りを見せるような腋の下なら最高だ。

は、この腋の下が全て露出されるポーズだ。だから、正式（?）な十字型、Y字型でなくても私の好みには合う。両手吊りでも良いわけだ。

たゞ、実際のプレイにおいて、都合良く行かない場合がある。部屋によっては独立した柱もない所があるし、上に縄をかける所も無い部屋もある。その場合は仕方ない。両手首を頭の後で縛り合わせることにしている。腋の下が露出するという目的にはかなうわけだから。

では、どんな相手が……という事になるが、マニア諸氏はほとんどがプレイメイトに困っておられる事と思う。

読者通信欄なる物が各誌にあるが、これは余り効果がない。特に男性の場合、誌上で呼びかけても、まず反応は無いものと思って良い。女性の投書がたまに載るが、その人に対して手紙を出しても、返事もこないことがほとんどだ。これは失礼な話だ。もっとも返信用切手を入れておかない事も悪いのかもしれないが、例え一行でも、手紙は受け取ったが、プレイはできませんという返事は出すべきだろう。勿論、その場合、匿名で良いわけだが。

さて、そうしてみると、プレイメイトをどうするか。

プロは除外しよう、その種の店がふえているから、金銭的な問題さえ片付けばOKだ。だが味が無いとも云える。

矢張り、本当に気心の知れ合った者同志のプレイが一番良い。となると、結局は、まめにくどいてまわるより仕方がないのだろう。何か簡単で、良い方法があれば、私が教わりたい。私自身が困っているのだから。

だが、鉄則として、決して脱線しないことをマニアとして守りたい。プレイと個人的生活を切り離すこと。（もっとも愛し合う仲のプレイは、勝手にしてくれ！）

プレイだけの相手を脅迫したりするのは最低であり、マニアではない。もしそういう人がいたら、徹底的に退治する勇気は持とう。

映画

映画でのSMシーンは、写真や小説、さらには自分のプレイにもない迫力もある。写真は動かない、小説は自分のイメージ、自分のプレイは主観的。映画は客観的に楽しめるわけだ。

印象に残った作品の一部を挙げてみよう。成人映画は除く、というのは数が多過ぎてキリが無いからだ。

たゞ、にっかつのSMシリーズに先鞭をつけた谷ナオミについては一寸ふれたい。体当りであるし、ボリュームもある体は良いのだが、これは本人の責任ではないのだろうが、特に後期の作品では、二の腕を縛られていないシーンが多過ぎる。これは迫力に欠ける。もっとも手抜きの映画やTVのように、両手は後にまわしているだけで、縛られているのは胸だけ、等というのよりましだが……

さて、映画の方では「月光仮面」シリーズを最初に挙げたい。こゝで縛られるのは女の

子で、しかも着衣のまゝだ。それでも後手に縛られて高々と吊られるシーンもあって大いに楽しませてくれたものだ。

ロリータブームとやらで、女の子のヌード写真は数多く出まわっている。だが女の子の(幼女)のSM写真は余りお目にかゝらないようだが、もっとも私としても血まなこになって探しまわっているわけではないから大きな事は云えないのだが、未だに目に留っていない。欲を云えば、女の子より、もう少し成長して胸が少しふくらみ出した頃、すなわち女性になりかけた頃のSM写真が欲しい。

プレイ・メイト

プレイをするなら小柄の女性が良い。それも少し肥り気味が良い。脚、特にふくらはぎが太目の方が良い。足首が締っている太さなら、なお素晴しい。

乳房の大きさは構わない。欲を云えば体のしなやかなのが良いが、大した問題ではない。

プレイの最中、喋り過ぎない相手が良い。

プレイをする時、好意を持ってできる相手が良い。

M女性を責める時、その女性の美しさをたゝえながら責めたいのだ。女を責めることは、その女が憎いからではない。愛するから責めるのが、プレイである。度を越さないプレイである。この一線を守れば、プレイから起る悲劇も生じない。お互いに信頼する、信頼を裏切らない、好意を持ち合う。プレイの生活が私生活と別な人は、決して、お互いの私生活には立ち入らない。

プレイの相手は異性ばかりだったが、近頃、ふと、若いアベックを責めてみたくなった、年のせいだろうか。

恍惚の美学

小島駿介

責めの型とムード

わが国にも昔から木馬責めがあったが、この木馬はたいてい背中が屹立しているので、俗に「三角木馬」ともいっている。これに跨がせられると、責められる女は、痛さと、木馬から転落しまいとして腰を左右によじって身悶えるので、それはまた西洋木馬とは別の色気が見られる。

西洋木馬で責められる女が黒いストッキングの裸身であるなら、三角木馬の場合は、眼も醒めるような友禅模様の長襦袢でなければならない。

この場合、西洋木馬のエロティシズムには一種の量感といったものが見られ、何がしら新らしい感覚をうけとることができる。それに比べると、三角木馬の場合は凄艶な色調感こそ見られるが、それは日本画に見る扁平な感じで西洋木馬のような量感は見られない。

昔からいわれている蠟燭責めというのは、宗教的な意味が含まれていて、女を全裸にして肩や背、手足などに蠟燭を点じて責めたものといわれるが、私刑としては肛門や局部に挿入して火を点じて責めることもかなり行われた。算盤責めは、鋸型に刻んだ板状の刑具のうえに刑罰者を坐らせ、膝のうえに伊豆石を一枚ずつ乗せ、だんだんその数をふやしていく残虐な公刑である。

松葉いぶしは、主として女を責めるのに用いた私刑で、生の松葉などを燻して、その煙で窒息状態にする責めである。海老責めは江戸時代の公刑で、股間に首を突っ込むくらいに を折り曲げて責める。薬味責めは指先などを傷つけて、そこに唐辛子、胡椒などを塗って苦痛を与えるもので、ことに女は局所にそれを入れられると耐えられないほどの苦痛にのたうちまわるという。

駿河責めは「駿河問い」ともいわれている責めで、駿河の代官彦坂九郎兵衛が考案したところから名づけられたものである。刑罰者をがんじがらめに縛って吊り上げ、縄をぐるぐるよじると、それがもとに戻るとき、被縛者もまたぐるぐる回されるわけで、かなりきつい責めである。

水責めというのは、水を顔にそそいで窒息に近い状態にしたり、刑罰者の体に重石をつけ水中に沈めて責める。

このように昔ながらの拷問にはいろいろの型があるが、これらは感覚的にも時代がかかっていて、どうも現実的なものを感じられない。

そこで、どのような責めが新らしくでのような責めが古いか、またそれら昔の拷問の型を現代の感覚で扱かったとしたらどうであろうか、これはきわめて興味ある課題であると思う。

たとえば「松葉いぶし」を例にとってみるなら、シュミーズいちまいという半裸で高手小手にいましめられた現代娘を対照に、松葉のかわりに何十通となくあるその娘の恋文を一枚いちまい読みあげながら火鉢にくべてゆく、というようにしたら、女に裏切られた男の復讐としてフィクションがあって面白いだろう。また木馬責めの場合でも、突き出された女のヒップに浣腸責めを併用したら、かなり感覚の麻痺した者でも新らしい情熱をおぼえることだろう。

このように、責めの本質には新旧というものがなく、責められる者（女）の服装や責め場の雰囲気で、昔ながらの拷問の型もおのず

からその様相を一変してしまうだろう。

M女狩り白書

いまでこそSM写真を撮ろうと思えば、まずモデル探しに苦労するようなことはないが、戦前にはそういうモデルは一人だって見当らなかった。だからそういうモデルの協力を得るには、特別の交渉をもってからでないとほとんど不可能だった。現在のように、金銭づくで口説けることなど考えられなかったので、当時はモデル探がしにはひどく苦労したものである。

そのかわり、いったん体の交渉をもってしまうと、嘘のないギリギリのものを記録することができた。いうまでもなく表情もリアルにそのままの感情を内包しているし、だいいち縄のかけかたにも遠慮などいらないので緊縛感も意のままである。もちろんマゾヒストである被虐者は、縄をかけられるにも肉体的に苦痛がともなわないと満足しないだろうし、シャッターを切るまえに特別交渉につながる行為があってのこてだから、いきおい手足の表情にもしぜんその感情があらわれて、絵の構成や雰囲気に、おのずから真迫感のあるものが記録されることになる。

いまここにそのような写真を紹介することのできないのを残念に思うが、手や足の指の表情にまで「責められる女」特有の色気が見られ、縄目のあいだに盛りあがる肉の弾力には異様な妖気がただよって、ただならぬ切迫感がうかがえるものである。

筆者は最近、何人かのモデルをつかって撮影したが、どれも満足したものが記録されなかった。どうにも、かつてのような情感をとらえることができなかった。

そのうち、あるモデル・プロから呼んだFというモデルが、撮影を終えて帰ったあとで撮影用につかった衣裳や下着類を片付けていると、ガードルの一部に女の情感をとどめた汚点が歴然とのこっているのを発見した。

男が多くサディズムの傾向を本能的にもっているのと同じように、女の多くがマゾヒズムのそれをもっているのはいうまでもない。初めは「縛り」など経験がないからと、キョトンと眼をまるくして仕方なく手をうしろにまわしていたモデルでも、いくどか縛ったり解いたりしているうちに、いつしかそういう感情に誘いこまれていくものである。が、このモデルのように、こんなにハッキリ生理的にそれを見せてくれたのは、特別交渉などもたないプロ・モデルとしてはまず稀有のことといっていいだろう。

そこで筆者は、もういちどこのモデルを呼んで、まずさりげなく何ポーズかシャッターを切ったあとガードルひとつにして、さらに強く縄をかけなおし、セックス感情をさそうポーズをつけて何枚か撮った。彼女はそのポーズに無理があればあるほど、しだいに顔を紅潮させて、瞳になんともいえない色気のあるうるおいを見せてくるのだった。

筆者はその機を逸せず「こんどは全裸でいこう」といって、縄をかけたままの彼女からガードルを脱がせようと手をかけた。が、そのときの、このモデルFの困惑しきった瞳のうごき、消えも入りない、羞恥と秘密をかくそうとする必死の表情が一瞬ごっちゃになって、筆者に、かって経験したことのない昂奮をかきたたせたのである。

責められる女の羞恥心

友人のYは、サディストとしては比較的ノーマルに昇華させてその愛人（二号さん）との性生活をエンジョイしているし、彼は週に一度の愛人との逢う瀬には、あらかじめ前の週にたてておいたプランを実行して、いつも愛人に新らしい情熱と刺戟をあたえているので八年間にわたる愛交も「この頃ようやく白熱の度をたかめるようになった」といってい

る。Yは、女に羞恥心がなくなったらサディスティックな夢は半減するし、アブノーマルな破綻を早めることになるだろうといっているが、このYの言葉をかりるまでもなく、責めの世界では「女の羞恥心」がきわめて重要なポイントになっている。

つい最近の話であるが、筆者はちょっと頭のいい夜の淑女に行きあったことがある。新宿駅附近で凄く垢抜けたOL風の美女に呼びとめられ、好奇心半分に揶揄ってみると、とくべつ面白い遊びをさせるからというので、どんな遊びをさせるかと訊ねると、それはホテルへご一緒してから、と艶然たるしぐさで誘うのである。

そこで、彼女にしたがって、ホテルへゆき、女の望む額を渡すと、このいずれかを買ってくれといってハンド・バックから錠剤の入った小瓶と赤い扱帯を取りだした。つまり、この二つのうち一つ買ってくれれば面白い遊びをしてみせるというのだ。

いうまでもなく錠剤は睡眠薬（どうせ中味はいい加減なものだろう）で、扱帯は、縛らせて自由になるというのだが、これでさらに別に幾らかの金をフン奪ろうという魂胆であるとわかっていても、この頃の猟奇趣味を逐う漁色漢にとってはちょっと食指のうごく趣向であろう。

それは本題から外れる話だからどうでもいいとして、筆者は彼女のいう額でその赤い扱帯を買ってそれで彼女をうしろ手に縛りあげたが、卒然として興味を失ってしまったのである。というのは、どうせ商売の策として考えついたことではあろうが、ただ「縛らせた」というだけでそこに一片の色気も見られなければ雰囲も感じられない。

最も肝心な羞恥心というものがまるでなく淡々としてきわめて味気ない風情である。彼女に多少でもその傾向があってのことだったら、この赤い扱帯はたちまち羽が生えて何本だって売れることだろうし、彼女は瞬くうちに財をなすことになるだろうと、筆者は、彼女と別れる間際にそういって笑ったものである。

サディストの夢

責めの構想について、サディストは嶄新奇抜な夢を最限なく繰りひろげるものである。筆者の知る範囲で、奇抜と思える二、三の実態をお伝えしてみよう。

Kは某省の事務官という歴とした肩書をもつ人物だが、その私生活ではきわめて明朗な社交性に富んだリベラリストである。彼は三十一歳の独身青年でアパート住まいだが、そのアジトには彼と関係のある女性以外は、何人といえども絶対に近ずけたことがない。

谷中の天王寺近くにあるそのアパートは、いまにもくち倒れんばかりの古色蒼然たる建物であるが、Kの部屋へ一歩足を踏みいれると、外部の風景とはおよそ似つかわしくない意外な感じに誰しも吃驚することだろう。

まず眼にはいるのは真紅一色の分厚い緞帳である。これは外部との音響を遮断するための防音装置であり、その他、天井といわず壁にいたるまで防音装置がほどこしてあるので、かなり大声をたてても絶対に外部に漏れるようなことはない、とKはいっている。

Kがなぜこんな薄汚いところを根城にえらんだかといえば、このアパートの住人は殆んどが勤め人で、しかもその多くが中年者夫婦なので彼等は生活に疲れ果てていて、他人の生活などを干渉する気力がないからだというのだ。

その赤い緞帳のKの部屋には隅に古風な、しかもそれは非常に豪華なダブル・ベッドがこの部屋の半分も占領している。が、よく見るとこのベッドの四本の脚には鎖がぶら下っていて、その先に鉄の輪が取りつけてある。頭のほうにも足のほうにも、鉄の輪や麻縄が

垂れ下っているし、さらにベッドの中程には胸や腰を緊めつけるのに都合のいいように頑丈なベルトが二本取りつけてある。

Kに訊くと、このベッドはふだんソファのかわりにしているので、女がどこに坐っていても位置を替えずに縛りあげることができるという。

Kが最近このベッドで責めた銀座のホステスで、二日間も縛らせたままKのあらゆる加虐に陶酔した女があったというが、彼女は食事も用便もそのままとらせ、ほとんど半睡の状態でKに加虐を強いたといっている。

Rは丸の内の某商事会社の代表者で、彼はその持てる物質にものをいわせて、みずから「耽美荘」と呼ぶ家を新築してそこへ若い女性を片っ端しから連れこんでは、人も羨む加虐三昧に明けくれているという。

筆者はRとは友交関係もまだ日が浅く、この頃ある事情から急速に親交を深めたものであるが、はからずも今日、この原稿にペンを走らせいると、突然、Rから面白いプランがあるから直ぐきてくれという電話をうけとったのである。

前にもいちど訪ねたことのある「耽美荘」なる家を、筆者は電話をうけとってから一時間後に訪ねた。その部屋の模様は前に見たことがあるのでよく知っていたが、今日はガラリと様子が変わって、ひどく陰気な空気が重く垂れこめていた。それでもピンク色のライトが艶めかしく灯り、サディスティックなドラマの幕開きにふさわしい雰囲気をつくっていた。

二十畳も敷けるかと思われるこの部屋の中央に、ポツンとひとつ、およそグロテスクな格好をした頑丈な椅子が置かれてあるきりで、前に見たいろいろの調度は全部片づけられてあった。が、筆者を出迎えてくれたRの話で椅子ひとつというこの簡単な調度の意味をうけとることができた。

まず、この頑丈なグロテスクな椅子に女を縛りつけるのだが、その椅子は前方が深くU字型に抉り取ってあって、女の足はそれに添って左右に大きくひらかれたまま固定し、さらにそのまま理髪店の椅子のように後方へ例れこむ仕掛けになっている。そこへ、書生に曳かれて狼ほどもあるシェパードがあらわれる。左右に大きく開かれた女の股間に、Rの手からミルクがすこしずつ落とされる。やがて女の表情にどんな変化が起こってくるか、さすがに筆者も固唾をのむ思いでこのグロテスクの椅子を見守ったのである。

Rは狼ほどもあるシェパードを飼っているが、彼はミルク罐の口を切りながら、これからのプログラムをまだ女に打ちあけていないのだが、こいつを知ったら、初めのうちはちょっと抵抗するかも知れないよ、といって、やがて幕を開けようとする人生最高のこのドラマの筋書にこころはずませてか、脂肪ぎった顔をつねになく紅潮させていた。

それからものの五分とたたないうちに、いったん出ていったRは、上背のある上品な二十五、六歳の洋装美人を伴ってこの部屋に入ってきた。

書生が、シェパードの鎖を解いているらしい音が幽かに聞こえた。

模倣サディスト

たまたま或る会合の席で、嗜虐の話題が中心になったことがある。一応は社会的にも健全な地位にある紳士という名のお歴々だったので、彼等がこんな話題に興味をもっているということに筆者はまず奇異な感じをいだいたのであるが、話が酣になるにつれて、彼等はどうやら自分ではいっぱしのサディストを意識しているらしいので、これにはすくなからず驚かされたのである。

彼等は例外なく二号や三号くらいは囲って漁色三昧の生活に明け暮れている人たちで、

いい合わせたように、
「色事も刺戟がないと退屈するので、この頃は女を虐める遊びを始めたよ」というのだ。
そして、
「どうせ物質で解決できる女なんだからすこしくらい傷つけたってかまわない、女なんてどうせ男の遊び道具なんだから、鞭とかベルトで思いきりひっぱたいて、めめず腫れくらいつけたほうが実感が出て面白い」
　というようなことを話していた。とうてい今日の時代に適応する常識ではないし、こんな話を真面目にきくほうがどうかしていると思われるだろうが、こんなとき下手に眉でも顰めようものなら、
「そんな微温的な感覚では、とうていサディスティックな陶酔など味わえるものでない」
と、いっぺんに軽蔑されてしまいそうな空気である。だからみな肩をそびやかして、自己のサディストぶりを誇示せざるを得なくなる。
そこで、いきおいのおもむくまま各自尾鰭をつけて自己の体験談を吹聴する。一人が喋るともう一人が前の話に負けまいとして、さらに凄惨目をおおわしむる（?）話をする、といった按配で、夏の夜の怪談噺ならぬエログロ談義はいつ果てるともないほどである。
　いずれも誇張と自己陶酔に粉飾された無責任な放談であるから、もちろんほんとうに耳をかたむける興味などおこらなかったが、筆者は彼等の話をきいているうちに、フトこんなことに思いいたったのである。
　女遊びに憑かれた、金と暇のある輩のあいだに、アクのつよい遊びの「型」として女を虐める遊戯が流行り出してきた、それは、羞恥と節操に麻痺した恐るべき露出症状で、ほんとうに彼等がいう「遊び」以外になんの内容ももたない、いわゆる変 態的四畳半趣味（?）といったところではないだろうかと—。
　男が女を虐めて昂奮し歓ぶ心理を、今日の常識では誰も「変態」と嘲笑うものはいないだろうが、このように単に遊びの具として、女を虐め、サディストの模倣に肩をそびやかす傾向に対して、筆者は何か慄然とするものをおぼえてしかたがない。
　健全であるべきはずの男女のセックスが、その満足を助長するため、殴ったり殴られたりしてそれが最高の刺戟でもあるかのように考え、まして物質で解決できる女だからといって無謀な暴力をふるうなどというのは、寧ろ滑稽千万な話である。
　想像サディズムというのがあって、女の迫害される絵や写真を見てエレクトし、それで満足を得ているものがあるという。いわゆる非実行派で、実生活においては女にきわめて無表情であるが、想像の世界ではあらゆる残虐をほしいままにする、彼はそれだけでエレクトレ満足するのである。実行派の連中にいわせると、それはザディストではなくオナニストだと軽蔑するが、筆者は模倣サディストなどより寧ろ切実なものを感じるのである。
　模倣サディストのサンプルになるような話がある。自らサディストをもって任ずる或る男が、斯界の大先単であるS先生にたのんでマゾヒストのモデルを紹介してもらった。彼のカメラ技術は素人離れがしていて、それまでにS先生の指導で責めポーズの写真を何千枚となく撮しているので、さっそくモデルの女性を縛り、責めポーズを何十枚か撮した。
　その日はそれでモデル女を帰したが、それから幾日か経ってまた彼女を呼んで幾ポーズか撮した。そんなふうに約一千くらい、めんめんと同じことを繰りかえしていたが、彼はその間、とうとう女の　に指一本触れなかったという。
　筆者はこの話を、この頃知りあったそのモデルから聞かされたのであるが、彼女は初めS先生からその男を紹介されたとき、
「写真を撮ったり、実行したりするんだが、すこしくらい痛い思いや羞ずかしい思いをす

るかもしれないけれど、まあ心得ておいてもらいたい」

と念を押されたという。だから彼女は、

「一年間もそうして写真モデルとしてつきあってしまったけれど、それまでにどれくらいあらあらしい男の暴力を待ちのぞんだかわからなかったのに、あのひとは縄をかけるのにも『痛くないかい?』といくども念をおすくらいで、あたしはいつも満ち足りない気持ちで帰ってくるよりほかはなかった」と嘆いていた。

彼女は自分でもいっているとおり、どちらかといえば、まあ醜婦に属するほうだが、それでも「女は殴られ、いたぶられるときがいちばん美しいのではないでしょうか、あたしはそんな自分に思わず恍惚としてしまうくらい美しいと思うんです」といっていた。

それにしても、一年間も同じ女に接していながら、こんな簡単な願望さえかなえてやれなかった男が、いっぱしサディストのつもりでいるのだから恐れ入る。

マゾヒストと入れ墨

入れ墨のことを「がまん」ともいうとおり彫りものにはかなりの苦痛がともなうものだが、責めの心理では自虐に共通し、入れ墨のある者はマゾヒストともいえるだろう。

この入れ墨のことで、突然、ある未知の女性から相談をうけたことがある。入れ墨は関東が本場だから筆者にいい彫り物師を紹介して欲しいというのであった。

筆者は最初、この女性が鉄火肌の莫蓮女か、でなくともどうせ水商売の女くらいに思っていい加減な返事をしておいた。するとすぐ返事の手紙がきて、急に自分のほうで彫ることにしたから、何か奇抜な図柄を考えて欲しいというのである。

入れ墨の箇所は下腹部のそれも陰部のすぐうえに十二、三糎四方くらいの大きさに入れたいというので、私はこの女性が莫蓮女や玄人筋の女ではないように思え、ちょっと好奇心をおぼえた。というのは、入れ墨の位置が下腹部で十二、三糎四方くらいの大きさなら、入浴のときなどでも手拭をちょっと当てただけで他人に気づかれないですむ、そんな心遣いまで想像されたからである。

そこで相談をうけた図柄も、できるだけ穏当な女らしいものを選んだほうが無難だと思ったので、月並ながら牡丹とか桜の花を主とした構図を二、三枚描いておくった。そのとき、「入れ墨は一時の感情にまかせて彫るものではない、いちど入れてしまった墨は永久に消えないのだから、くれぐれも本格的な彫り物師によく相談して計画的にやらなければいけない、間違ってもあとで後悔するような、いい加減な素人彫はやらないほうがいい」といったことを一言つけくわえておいた。

一週間くらい経って、筆者はまたこの女性から手紙をもらったが、果たした彼女は歴とした堅気の職業婦人であって、筆者の手紙を見て自分のほうで入れ墨をすることを急に中止したから、やはり東京の本格的な彫り物師を紹介して欲しいといい、そのあとで驚くべき身の上をこまごまと書き綴ってあった。

彼女はかなり昂進したマゾヒストで、ずっと前から中年の未亡人と同性愛に陥ち「嗜虐の交渉をつづけている」というのである。その未亡人がサディストであることはもちろんであるが、その交渉の顛末は遺憾ながらここでは披露できないほど凄絶なものである。

彼女は下腹部愛執の性癖があって、少女時代から自分の部屋にこもってひとり鏡に自分の下腹部をうつして眺めることに異常な昂奮をおぼえるというのである。それがいつしかマゾヒズムの感情が芽生えるにしたがって、彼女は自分で自分を虐めたい慾望にかられるまま、自分の最も愛執する下腹部に入れ墨の苦痛と自虐の陶酔を味わいたいと思うように

なった。
　これが、前記の未亡人と交渉をかさねるようになると、いよいよその願望が強烈になって、そこで筆者にその相談をしてきたというわけである。
　ところが、彼女の入れ墨願望を知った未亡人は、彫り物師なら自分も知っているから、いっそのこと自分の眼の前で入れたらいいだろうといって、その翌日、未亡人は彫り物師だという若い男のところへ彼女を引っぱって行った。そこで話がきまると、彼女はうしろ手に縛られたうえ柱にくくりつけられて蠟燭の火で陰毛を焼かれた。そしていよいよ墨を入れる段取りになったのであるが、それがなんと、彼女のまるで予期しなかった骸骨の海賊マークだったのである。しかもその彫り物師というのが、専門家ではなく、針のつかい方などもひどく乱暴なので彼女はどうにも我慢ができなくなって、その日は骸骨のぶっちがいの部分を五糎ばかり彫っただけで中止してしまったのである。
　そしてその翌日、彼女は筆者の手紙を見て急にその骸骨の彫り物に嫌悪を感じ、次の約束の日にそれを拒否したので未亡人とその若い男から言語に絶する私刑をうけた。そのため彼女は一週間ばかり寝込んでしまったが、寝返りさえできないその疼痛のうちにもマゾの血は鬱勃として抑えようもなく、彼女は自分で自分の体を縛って畳の敷き目に立てた線香の火に身を寄せ、下腹部に灸をすえて自己苛責の愉悦を味わっているというのである。
　さらに最近の手紙では、「あの私刑以来、その未亡人との交渉を断っているが、いまの自分には未亡人を失うことはどうにも堪られない」といっており、「これからも時折逢ってみたいと思うが、どうであろうか」という質問であった。
　マゾヒストには、腹切り願望というのがある。白虎隊とか浅野内匠頭などの切腹の絵を見て昂奮したり、鏡の前で腹切りの真似をしてアクメに達する者がある。これが昂じてくると、ほんとうに自分の腹に刃物を突きたてるようになるというが筆者は彼女にこんな危険を直感したので、彼女とその未亡人の交渉について下手なことはいえないと思った。
　これは、骸骨の彫り物などには代えられない、彼女の美しい下腹部に生涯ぬぐい去ることのできない汚染をとどめようとも、いまのところ彼女をすくうみちは、未亡人との交渉をつけるよりほかはないと思ったのである。

責め道具としての木馬

　木馬責めは公刑としておこなわれたものではないらしく、筆者はこの計画を思いついて手もとにある文献や絵画をしらべてみたが、木馬の形態や寸法についてこれという規準を記録したものが見当らなかった。
　嘉永年間に刊行された朝川　著述の「善庵随筆や「徒然草諸抄大成」に木馬責めのことが出ているが、代官や名主が年貢を怠った百姓を拷問したときに私刑の責め道具としてつかったもので、公刑の責め道具ではなかったようだ。
　外国のものにも木馬責めの例が多く見られるが、まずサド公爵の三角木馬などは、手頃の木片で組みたてた、きわめて原始的なものだし、その他のものも、丸太を三角形に削ったものとかサド公爵の木馬にすこし工夫を凝らした程度の、いずれも首も尻尾もない「木馬」という体裁には遙かに遠いものばかりである。
　いずれにしても、木馬に跨がせられた被虐者（女）の足が床から五、六十糎くらいは離れていなければならない。
　これは、被虐者の足首に重石とか分銅を結びつけて、三角形に屹立した木馬の背から被虐者が飛びおりないように下半身の自由を奪っておくためで、同時に、この重石なり分銅

は被虐者の体に安定をあたえる役目をするので、そのまま木馬の上の被虐者に鞭打ちやり責めができるわけである。

この場合、木馬のうえの被虐者は痛さと、木馬から転げ落ちまいと腰を左右によじっての安定を保とうと身悶えるので、その煽情的な姿態に加虐者はサディスティックな悦びを二重に満喫することになる。

大体こんなことが想像されるので、筆者は、およその形態と寸法を考えてこの責め道具をつくってみた。首も尻尾もない、まるでハードルの台のようなもので、白木のままでは責め道具としての雰囲気に乏しいので、薄墨色の塗装をほどこすことにした。

「あら、なんですの、これ？ハードルの台にしては変だし……」

案の定、寝室の隅に置いたこの異様な物体を見て、妻のK子が訝しげに小首をかしげていたが、やがて捜るような視線を筆者のほうへうつした。

大胆にカットしたブラウスの胸から乳房の谷間がチラリと覗いて、それがひどく官能的である。妻は、ブラウスの下で大きく揺れる隆起のあたりをおさえるようにして、ククと笑いをころしながら、

「わかったわ。それ、三角木馬っていうんでしょう。でも、おかしいわ、首も尻尾もないお馬なんて。ほっほっほほ」

いつもなら、新らしい責めをおねだりして強い刺戟をもとめる妻なのだが、なぜか、きょうはこの新らしい計画に同調の色を見せないで、ただ全身をゆすって笑いころげるばかりなのだ。

「何がそんなに可笑しいんだい。首も尻尾もない木馬がどんなに素晴らしい乗心地か、笑うんだったら、その木馬の上で存分に笑ってごらん」

筆者は素早く扉に鍵を下ろすと、ベッドの上で笑いつづけている妻を尻目に木馬を部屋の中央に引っ張り出した。

「さあこっちへきてごらん」

筆者は用意の細引きを取り出すと、むっちりとこの頃いちだんと肉付きを増してきた妻の手首をつかんだ。掌にちょっと抵抗を感じたけれど、その手首は直ぐうしろ手に高々と上がって、細引きは容赦なくむっちりとした肉に食いこんでゆく。

スカートのホックを外し、ブラウスを脱がせると、ナイロンのブラジャーから透けて見える乳房が薄紅色に紅潮している。

「早く乗るんだ、その椅子に足をかけて」

「痛いわ。こんなに尖ってるんだもの……」

鋸の歯のように屹立した木馬の背を見て、妻はちょっと躊躇っていたが、それでもテレかくしに微笑を洩らすと、長い足をそっとあげて木馬の背に跨がった。が、ちょっと腰を下ろすと、

「痛いわァ」

と顔をしかめて、腰を上げてしまった。

「なんだい、K子らしくもない。さあ、痛いのは瞬間、そのまま思いきって腰を下ろしてしまえば、乗り心地は満点だよ」

こんなふうに、妻を三角木馬に乗せてその足首にアイロンを一個ずつ結びつけたのだったが、実のところこれは失敗だった。

ちょっと考えると構図的にも雰囲気がありそうだけど、彼女は木馬の上にものの三分間とは乗っていられないのだ。屹立した木馬の背で苦痛をこらえる彼女の表情は、確かにサディスティックな眼を愉しませてくれるものがあるが、肝心の彼女のほうが肉体的に辛抱できないのだから、この情景をながく満喫することは無理だった。

責め道具自体が被虐者の肉体を傷つけるようでは、公刑の責め道具ならいざしらず、女の体からマゾティックな悦びを抽き出すためのアット・ホームのプレイはとうていできるものではない。

かつて遊園地のメリー・ゴーランドで、若い母親が子供と木馬に乗って嬉々としていた姿を、筆者はいまふと思いうかべたが、この若い母親がちょっと羞みながら、遊動円木のように揺れる木馬の背で、おぼつかなく安定をたもとうと尻を微妙にくねらせる姿は、なんとなく色気のある図だった。

筆者は、もういちど木馬責めをやり直さなければならないが、そのときは寧ろ脚の下に橇のついた、ローリング木馬をつかってみようと考えている。高く低く、前と後が交互に上下するだけの単純な運動だが、それでも女はうしろ手に縛られているのだから、おぼつかなく　で重心をとろうとする　好は、あんがい見る者の眼を愉しませてくれるかも知れない。

いやそれよりも、木馬のローリング運動で女は生理的に感情を昂ぶらせることだろう。さらに、それに　り責めを併用すれば、この木馬責めはあんがい変化に富んでプレイではないだろうか。

滑車吊りの醍醐味

吊り責めといえば、責めのケースでは何か凄惨なものが連想されて、まるで責めの最高度であるかのようと考えている人もいるらしい。芝居などでも番町皿屋敷とか高尾太夫などの吊り責めや吊るし斬りが構図的にも迫力があるので、そのままの姿がひとつの「形」になって印象づけられているからだろう。

けれども、筆者は吊り責めに対してはいささかの魅力も感じていない。構図的にも単純でただ　を立てたようなものだし、第一、色気に乏しいのが決定的に筆者の感覚に合わない。

筆者は、滑車をつかって「半吊り」をこころみたことがある。うしろ手に縛った女のが手繰り寄せるロープで五糎、六糎とあがってゆき、やがて爪先き立った足が辛うじて床に触れるばかりになると、女の足はしだいに空を蹴るようになってゆく。もう五、六糎ロープを手繰れば、女の体は完全に宙吊りになる。いや、そのままちょっとでも動けば、彼女の爪先きはすうッと床から離れてしまう。女は自身の体重を爪先きに托して体の重心をささえようと焦せるのだが、その姿勢はものの一分間とはつづけられない。高手小手にいましめられたロープが容赦なく肉に喰い入るので彼女はその痛さで思わず体を縮めるのだが、たちまち重心が崩れてよろめき、爪先きが床を離れるとそのまま前に後に、あるいは右に左に振子運動を開始するのである。

この滑車吊りで筆者の最も興味を感じたことは、被虐者（女）の爪先きが辛うじて床に触れるということ、ちょっとでも体を動かせば爪先きが床から離れ、たちまち重心が崩れてロープで　が緊めあげられてしまう、ということだった。

これが完全に宙吊りになると、前記の三角木馬と同じように一歩間違えば被虐者の体を傷つけることになり、いたずらに苦痛をあたえるだけで相手から被虐の悦びを抽き出す感覚を抹殺してしまう。責めには一方的な感情は危険だから、あくまで被虐者の感覚を考慮しながら行うべきだろう。

ここで、筆者の貧しい実験から得た吊り責めの要点をすこしメモしてみよう。

まず女を縛る場合、絶対に乳房の上から縄をかけないこと、うしろ手に縛った縄と吊り縄とは必ず別のものをつかうこと、この二つは他の責めの場合いもそうだが、殊に吊り責めの場合は絶対に注意しなければならない。乳房の上から縄をかけたまま吊るすと、女は呼吸困難に陥り絶息することすらある。またうしろ手に縛った縄を「吊り縄」に関連させると、それへ体重がかかって脱臼したり骨折したりする危険があるから、吊り縄は絶対に別の縄をつかうことが必要である。

つぎに「腰縄」をかけ、さらに腹部に晒布

を幾重にも巻いて、その上から縄をかけ、別に用意した吊り縄で吊るすこと。もっとも、半吊りの場合はこの必要がないので、筆者は前記のように長い麻縄で高手小手に縛って吊るしてみたのである。

操りの感興

操り責めには暴虐らしいものが加わらないので、厳密な意味では「責め」の部類にはいらないかもしれないが、相手の体に傷をつけないことなどから、あんがい広く採用されている責めの「型」ではないだろうか。

さらに、操り責めは被虐者が女であるということが特徴とされている。というのは、男とくらべて女は痛覚には鈍感だが「操り」にはひどく敏感で、殊に情事の経験をもつ女性には堪えがたいとまでいわれているからだ。

心理的にも肉体的にも微妙な組織をもつ女の　は、個々の感受性にも相違があるのでり責めにはきわめて奥深い情趣を内包しているといえよう。単純に「操る」という動作だけではなく、そこに技術的な操作を追求していくと　きることのない感興を呼ぶことができる。

筆者はかつて木馬責めや吊り責めをこころみたことがあるが、いずれの場合でも「操り」を併用しなかったことはない。女は痛覚に鈍感なので責め道具をもちいた責めには間もなく麻痺してしまって、だんだんその効果を減じていくが、「操り」を併用すると同じ責め道具の場合でもいろいろ変化に富んだプレイをこころみることができるものである。

「操り」の補助具として用いられるものは、孫の手、ブラシ、羽箒、ヘチマ、海綿、スポンジ、かんぜ縒りなど、どこにもあるもので直ぐ間に合うので、連戦即決の責めとして臨機に行えるわけである。このうちブラシや羽箒はたいていの人が用いるが、ヘチマやスポンジは風呂場での場合には殊に効果的である。石鹸の抱だらけにした体を、部分的にごく軽く静かにこするわけだが、この場合うしろ手に、手首を濡れ手拭で二巻きにしておけば容易に解けるようなことはない。

さらに、あんがい効果的なのはかんぜんりである。よく「前戯として用いられる」といわれるから、操りの部位がどこであるかを、いまさら説明するまでもないだろう。

つい最近のことだが、或る女学校のテニスコートの傍を通りかかったとき、図らずも筆者は奇妙な情景を同撃して思わず足をとめた。小麦色に日焼けした健康そうな女生徒たちが大勢、選手控室の傍でキャッキャッと嬌声をあげながら縺れあっているのだ。ふと覗いてみると、一人の女生徒を大勢の仲間が抑えつけている。

「いや、いやよ、勘忍して……」

妙に圧しころしたような喚き声がその抑えつけられている女生徒の唇から漏れたので、筆者は好奇心をそそられるまま忍び寄るようにそっと近づいてゆき、傍の樹木の蔭に身をひそめて彼女らの動静を見守っていた。一人の腋下や下腹部のあたりを操っているのだ。まぎれもなく私刑である。筆者はこの情景を眼のあたりにして、すくなからず昂奮をおぼえた。

誰かの、

「しっかり唇を抑えてなきゃ駄目よ」

という声が聞こえたので、筆者は思わず体を縮めて固唾を嚥んだ。

唇を抑えられた少女は、誰かの掌の下で、「う、う、う」と呻きながら体を海老のようにまるめ、あるいは反らせて身悶えた。彼女は真赤になって手足を抑えつける仲間を挨ねのけようと必死にもがきつづけるのだが、仲間の操りはねちねちと執拗に飽くことを知らないので、この少女はとうとう気を失ってぐったりとしてしまった。そればかりか、彼女は気を失う瞬間、自分では意識しない生理的

な不始末をしてしまったのである。

激しい「操り」にあうと女は気を失うという話をよく耳にするが、このように放尿までする生理的反応を目撃して、筆者はいまさらのように「操り」というものが、女にとっては何にも増した責め苦であることを教えられたのである。

臀部打ちの快感

外国の艶笑文学には必ず「鞭打ち」の場面が出てくるが、この対照は殆んど女の臀部打ちである。これは前記「操り責め」の場合と同じ、女の性的アピールを狙った責めの基本スタイルともいえるだろう。

女の臀部を打つということはサディズムの端的なあらわれで、いまなお地方の農村などに見られる尻打ちの行事は、いうまでもなくこの本能から出たものである。円満な夫婦でも、何気なく細君のヒップをポンと打つ情景をよく見かけるが、これなども同じことがいえるだろう。

心理学者のエリスは「鞭はペニスの象徴であり、鞭打ちを好む者にはインポ的神経症が多い」といっているが、戦争で機能を失った男が細君のヒップを打つことによって性的満足を得ているという例がある。このひどいのになると女のヒップを打つことによってコイツスよりも昂奮し、アクメに達する男があるといわれている。

古典落語のひとつに、こんな話がある。年の暮も迫ったが貧乏で餅のつけない夫婦が、近所に体裁がわるいからと女房の尻を打って餅つきの音をきかせようと考え、亭主が掌でペッタン、ペッタンと女房の尻を叩いているうちに昂奮してくるというのだが、この落語のサゲがふるっている。

亭主にさんざん叩かれるので女房はとうとう我慢ができなくなって「お前さん、あといく臼あるんだい？」と泣き声で訊くのに、亭主が「あと一臼だ」というと、女房が「そんなら、それはおこわにしましょうよ」というのだ。さすがの女房もとうとう音を上げて、最後は「おこわにしましょう」と逃げを打っているわけだが、それにしても女房の豊満な肢体が彷彿として、この夫婦の取組はエリスのいうインポ神経症とはだいぶ違っているようだ。

筆者の知る話に面白い例がある。女に手の早い男が、傭う女中に片っ端しから手をつけてしまう癖があるので、嫉妬ぶかい細君が非常に顔の醜い女中を傭った。その男はこの醜い女中が不満なので、どうにかして追い出そうと考え、或る日、細君の不在中に女中のちょっとした失策を口実にイヤというほど豊満なヒップを三つ四つ殴った。

ところが、この女中は余り醜いので、たとえそれが殴られたにせよ、こうして男から肉体的接触をうけたことがなかったので、初めて女としての昂奮をおぼえ、以来、わざと失策にことよせ主人からヒップを叩かれることに異常な悦びを感じるようになった。こうなると逆効果で、この色好みの男は、女中がヒップを叩かれて身悶える表情にアクメのそれを感じて、とうとう手を出してしまったというのである。

このように、女には臀部を打たれるとむしろ快感をおぼえるという異常な神経があるといわれている。

外国の古い文献によると、尼僧院などで懲罰のため臀部打ちがさかんに行われたようだが、かえって逆効果を招くというのでこれを禁じたという。極端な例になると、ヒップに鞭を当てられただけでアクメに達する女もあるといわれている。

結婚の嗜虐

地方へ行くといまでも嗜虐的な性戯を織りこんだ行事や奇習がのこっているが、各地の

農村に今日なお行われている「尻打ち」などの行事もその代表的なもののひとつではないだろうか。このあいだ筆者のところへ、大阪の堺市にいる未知の人からその土地で昔おこなわれたという結婚の風習を知らせてきた。

それは、徳川中期頃の上流家庭のあいだで行われた「結婚初夜の心得控」とでもいったものだが、当時の漢法医の手で書かれた肉筆本で、その目的とするところは、子女をのこすため花嫁の授胎を容易にするため、まず女体の構造から解き起こして、儀式から床入りまでの行動を刻明に解説したものである。

この書の興味深いところは、さて儀式も滞りなく済んでいよいよ床入りとなると、まず花嫁は花婿の介添人によって全裸にされ、眼かくしのうえ緋鹿子の扱帯でうしろ手に縛られるというのだが、この扱帯の長さが鯨尺で五尺（一八五センチ）というから、単に手首だけでなく腕から胸にかけて縛られることが想像される。

なぜこのように縛られるかというと、これは前記の目的から初交を容易にするためつぎの理由をあげている。

まず花婿は、花嫁の体を隅々まで知る必要があること、女は裸身になれば羞恥心から必然的に掌で恥部をかくそうとしたがるものだから、それを防ぐためと、胸と腹をしっかり緊めつけておくと震えをおさえることができる。そこでこうして後手に縛り、眼かくしまでして花嫁の自由を奪って花婿の行動を容易にするというのだが、そのため花嫁はかえって苦痛なく無事に破爪が行われるといっている。

この結婚の奇習は大昔の略奪結婚に起因するものらしく、いわば一種の強姦結婚と見てさしつかえないだろう。しかも花嫁を縛るのに、花婿の母親もしくはその近親の女性が立合うというのだから、これはあきらかに嫁虐めともいえるだろう。

このように、昔から見られる結婚の風習のなかには、嗜虐的な性行動を深く根を下ろしているということを見逃すことができない。現代行われている見合い結婚の風習のなかにも、かたちこそ違え歴然とのこっているといえるだろう。

夫婦縄肌

楠山守彦氏は現在、染色工場を経営する人で四十二歳、妻の幾野さんは二十三歳で、二人のあいだには今年の春生まれたばかりの可愛い男の子がいる。この夫婦の年令の相違からも想像されるように、幾野さんは二度目に迎えた後妻で、楠山氏は先妻を喪って五年ばかりずっと独身生活をつづけてきたが、人のすすめで二年前に幾野さんと再婚したのである。楠山氏は、最初のときもそうだったが、二度目の場合もやはり見合い結婚だった。

ところが、年令的にいっても楠山氏の性生活は経験も深く、女性に対する見識や交渉態度も円熟しているので、現在の幾野さんと結婚して以来、先妻の場合と違って単純な夫婦生活に飽きたらなくなってくると同時に、自分では意識しない暴虐的な感情を、新妻の幾野さんに向けるようになった。

もっとも、この感情はすでに幾野さんを迎えた初夜に芽生えたらしく、花嫁姿もういういしい幾野さんに接した瞬間、楠山氏はかつて経験したことのない衝動をおぼえた、といっている。

さいわい先妻とのあいだに子供がなかったので、暫くのあいだは駘蕩たる新婚気分にまぎれて、忘れるともなくそうした感情もおぼえず過していたが、そろそろ単調な夫婦生活が鼻についてくると、楠山氏は鬱勃とする加虐の衝動をどうしてもおさえることができなくなって、ついに或る夜、夫婦行為のさなかに幾野さんを寝巻の紐でうしろ手に縛りあげてしまった。もちろん夫婦行為も常とはちが

っていくぶん暴虐的と思われるあらあらしさのあったことは確かだが、しかしその程度のことなら、すこし強い刺戟を欲する夫婦のあいだになら世間にはザラにあることだ。

ところが、箱入娘として育った内気の幾野さんにはちょっと衝撃的だったのだろう、その翌朝、楠山氏がまだ睡っているあいだに倉皇として実家へ逃げ帰ってしまったのである。楠山氏はそれを知って、悪夢から醒めた思いで幾野さんを直ぐ実家へ迎えに行ったのだが、妻が自分の行為を実家の母に話してはいないかとひどく気を揉んだそうだ。が、さいわい幾野さんは、羞ずかしくて何も話した模様がなかったのでホッとした。けれども、自分の性癖を誤解され、そのため最愛の妻と離婚するようなことになったらどうしようかと、一時はずいぶん煩悶したのも、当然なことだったろう。

その日、遅くなって幾野さんを伴って帰宅した楠山氏は、さすがにおとなしく寝床にはいったが、傍であどけなく睡っている新妻の寝顔を見ると、ふたたび心中に湧き起こる加虐の情念をおさえるのにどうにも苦しく、とうとう夜の白む頃まで一睡もしなかったという。

その翌日、楠山氏は思いあまって筆者のところへ訪ねてきた。どうしたら妻を被虐の感情へ誘導できるか、それとも幾野さんはそうした感情をもたない女なのだろうか、とその善処方を筆者に相談するのだった。

楠山氏のこの加虐情念はきかめて顕微で、楠山氏の年齢から考えれば、むしろ単調な性生活に対して一種の薬味のようなもので、この程度なら健康に消化させておこなえば、決して夫婦生活に破綻を招くようなことはまずないと見るべきだろう。

ただ問題なのは、幾野さんとの年齢差である。ここにギャップがあるのだから、楠山氏のリードいかんによっては若い幾野さんといえども決して誘導できないことはないはずである。気長に、じっくりと、花のほころびるのを待つ気持で、ひとつひとつそういう雰囲気にもちこんでいくことが大切、一気可成に自分本位にもっていこうとしたらこれは失敗する、あくまで女性心理の微妙をキャッチしていくことが心須条件である。

筆者は、楠山氏にだいたいこんなことを説明して、楠山氏が初夜の床で幾野さんを擁したときサディスティックな衝動にかられたことを筆者はこう解釈したのである。

見ず識らずの男女が、見合い結婚という因襲による結びつきで、その夜のちぎりを境に生涯をゆだねることになるのだが、これは考えようによっては、女性にとって堪えがたい不安であり屈辱であるかもしれない。

ところがその逆に、男のほうでは加虐的快感さえおぼえるもので、まさしく暴力を加えずして女を責め苛むのと同じことではないだろうか。いや、暴力といっても過言ではないかもしれない。これに対して、羞恥と恐怖、そして肉体的苦痛さえあたえられる女性は、一片の愛情さえ感じていない男のまえに結婚という約束ごとだけで自分を投げ出して身をまかせるのだから、ずいぶん割の合わない話だといわざるを得ない。

ところが、よくしたもので、ここに女にとってひとつのすくいがある。それは、女の多くが本質的にマゾヒストであり、男の加虐に順応していける素質を、心理的にも肉体的にも持ち合わせていることである。もっとも、まれには男女共その逆の、いわゆる男性マゾ、女性サドの異例はあるが、それはそれで、またその相手を選べば問題はないだろう。

読者投稿

SMテレホーン通信(2)

毛利　敬

山「モシモシ一週間の御無沙汰と云うとこですね、御元気ですか」

受話器から聞きなれた山村君の、はりのある元気な声が聞こえてくる。

私「やーあーどうも、もうそんなになるのかね」

山「えゝ、丁度、仙台のほうへ五日ばかり出張で行ってました。今日の夕方、帰って来たんです」

私「そうか、もう一週間たつんですね。この間の通信は良かった。山村君の奥さんは私の家内より若いせいか甘い良い声ですね」

山「いやー若いと云っても、もう三十ですよ」

私「初めは大分苦しそうで、だんだん良くなって行くのが声の変化で、よくわかるよ」

山「そうでしたか。今夜は、出張帰りで、ハッスルする心算ですが、今週は、毛利さんの番に当るから、ぜひ今夜、聞かせてほしいと良子が云うもので」

私「はい。今、私は風呂から出たところで、家内が入ったばかりなので、そう—三十分位い後になりますよ」

山「そうですか。こちらも、良子が風呂に入っています。これから私も入るので、三十分なら丁度よいです」

私「そうそう」

山「はい」

私「聞いてみようと、思ってたんだ」

山「なにをですか」

私「四月、いや三月頃かな、ほら——二枚の板で両方の乳房を挟んで、ネジで締めつけているんですよ、と云ってたでしょう」

山「あゝ、あれね」

私「早速、私も作ってみたがどうも、うまくなくて駄目だった」

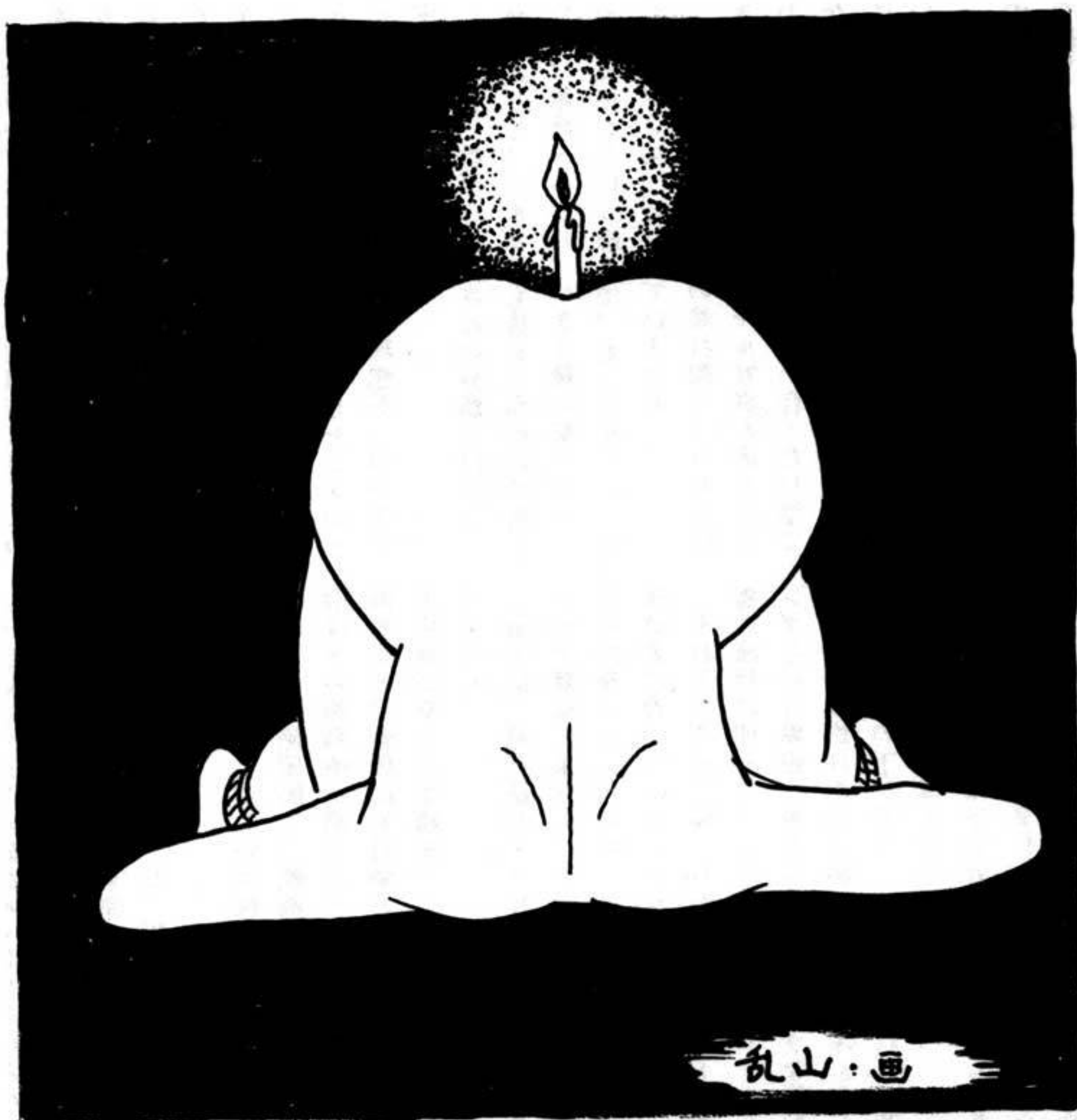
山「えーどうして。大きさは、どの位いにしたんですか毛利さん」

私「えーと、巾が四センチで、長サが五〇センチ、厚みが一センチで作ったんだけど」

山「丁度、いゝですよ」

私「それが、乳房の半分位い先の方しか、挾めなくて、締めつけると、つるり、と抜けてしまうのでね」
山「そうですかねえー何時か写真を拝見しましたが、奥さんはデカパイではないけど、小さい方でもないですよ」
私「えゝ、いろいろやってみたけど、出尻り、鳩胸で、乳房はあっても、真中の胸が、そうね、みぞをちが、高いので挾めないので、板を半分の長さに切って、仕様がないから、左右、別々にして、ボルトも四本つかって蝶ネジで締めるように作り直したが、左右別々では迫力がなくてね」
山「そうですか」
私「それで乳首の上に、ローソクを、セロテープで、立てゝみたがなんとなく、しまらないので、舌を割箸で挾んで鼻をクリップで挾んだから、少しは、見られるさまになったよ」
山「そうですか。今度、写真をみせて下さい」
私「いや、撮らなかったので」
山「それでは、今夜、そのスタイルで撮ったら、どうです」
私「そうしようかね。口が利けない時の声は、また格別ですよ」
山「バッチリ聞かせて下さい」
私「ところで今月の雑誌は読んだかね」

山「えゝ、いくつか読んだのですが、読者の投稿と会員の通信が多くて、面白いですね」
私「毎度、考えるのだが、各誌の通信欄ね、男の名前で便りをくれとか、妻にはわからないようにとか、勝手な事を云うものだね」
山「そうですね。妻はSMは嫌いだなんて、はじめから大好きなんて、ざらに居ませんよね。いやがるのを、誠意をもって少しづつ調教して行く、これが、Sにはたまらなく良いのですが……」
私「そうだね。私共も、現在になるまで、大分苦労したものね」
山「そう云う女を、私に任せれば、亭主殿に変って、十分調教して上げます」
私「しかし、そのような亭主殿は、M女を求めているが、本当はSではなく、SMプレイの真似で、変ったスタイルのSEXプレイを望んでいるのかもね」
山「それは、云えます。それに、各誌の小説も皆んな同じ様なパターンで、中には、現実に有り得ない絵空事ばかり書いてあるのもありますね」
私「だいたい、日本人は判官びいき—と云ってこれでもかこれでもかとSにやられて、じっと忍の一字の弱者Mが、最後に、悪役Sをやっつける様な話が一般には多いが、SM小説にも、中にはあるけれど、やられぱなしで、縛って、乳もんで、パイプと浣腸とアナルSEXと云ふものばかりで読む気をそがれるね」
山「そうなんですよ」
私「奇クに、時代物が載ってましたね」
山「えゝ」
私「浣腸はないでしょうね、時代物には」
山「わかりませんよ、昔は、エネマやガラス製のは無かったから、竹筒などで出てくるかもね、はゝ……」
私「まさか、そこまではね」
山「近いうち一杯やりながら、ゆっくり話しましょう」
私「そう、土曜日の夜にでも電話しますよ」
山「そろそろ風呂へ入りますから……十時半

に電話します。如何ですか」
私「丁度良いでしょう、では後程ね」
　と云って受話器を置いた。我が夫婦もＳＭスワップでも試みるかな、当方老年夫婦……スワップ及び3P望む、なんて通信欄に出すかな。読者の中に希望者がいるかな、皆んな、何才迄とか、若い女ばかりねらっている人が多いからな……と考えていると、妻が、バスタオルを腰に巻いて、風呂から出て来た。
私「おい、今夜は、山村君に通信だよ。それからね、私と、もう一人誰か男が居て、ＳＭプレイをはじめてね、その男がどうしても我慢が出来なくて、ＳＥＸをさしてくれ、と云ったらどうするかね」
　妻は少し考えてから、
妻「貴男次第ですよ」
　と云った。
私「お前の上下の口を、つかう場合ね、私が、上が良いか、下が良いか、どっちだね」
妻「そんな事、わかんないわよ――」
　と云いながら、ケントに火をつけて、私に、煙を吹きつけて、ほゝえんだ。
「さあーて」と、云いながら立ち上って、私は、乳挟みの板を取りに次の間へ行くのであった。

ふんどし締めてコンニチワ！

出雲肌香

——あなた生きてたの!!——奇クの復刊に胸が高鳴りました。しかし、二号、三号と進むにつれて、失望が深まりました。SMなら、もっと鮮烈な写真を満載した本が、いくらでも出ています。

女ふんどしの記事と、若い女性の腋毛の写真こそが、奇クの目玉でしたのに、復刊誌には、これらが一枚もありません。

どうせダメだ、とアテにもせずに目を通した復刊第六号には、女ふんどしの記事が二つも載っていて、編集者の良識は健在だったことを知りました。それに、池田文子、松原三千代、若柳キヨ（ミ）コ、清水（鈴木）めり子、小倉いくよさん、その他大先輩のお姉様方をさしおいて、亀山順子さんと私が選ばれたことは、光栄の至りです。あの頃二〇才だった私も、はや三六才、キリリと締めつづけたふんどしには変わりありませんが、「可愛いでしょう」と誇れる時代は永久に過ぎ去ってしまいました。

世の中の方は、資生堂の前田美波里さんの陽灼け写真を皮切りに、一九七九年以降は、カネボウが、夏目雅子、服部マコ、浅野ゆう子さんと、もっこふんどし型のビキニを締めた黒いお尻を日本じゅうのショー・ウィンドーにチン列、航空会社もマックロネシヤ人のユキ・マッケンティー、タキシード・ボディの尾関由紀子さん等々にふんどしセンスのビキニを締めさせ、私たちの理想が一歩一歩と実現しつつあります。

しかし、松原三千代さんの分類で行けば三角ふんどし、つまり前も後も三角形の段階までで、水泳ふんどし、つまり後が縦一本で、お尻丸出しという線まで、もう一歩という所ですがフン切りがついていません。

夏小町さんが、遠くの波打際で、うしろ向きに立っているコマーシャル写真の赤ビキニの尻布が、円周の内側が向かい合ったU型でなく、円周の外側が向き合ったXの上半分型になっていますが、食い込みふんどしを目指しての第一歩のつもりなら楽しみです。

映画の世界では、大奥物のゆるふん、潤ますみさんのピンクのダブダブ越中などの時代を経て、堀めぐみ、三井マリアの東京ふんどし芸者（一九七五）、安西エリのふんどし祭り（一九八一）、渡辺良子の食い込み海女（一九八二）と、本数は少いが、ジメジメしない本格ふんどし物が上映されるようになり、水泳ふんどしの方では東京エマニエル夫人の脇役の冬木なか（？）が、陽灼けの若肌と共に見事でした。

しかし、若く美しい女性の漆黒の腋毛は、今のところ絶望的で、映画界では二条朱実、南ゆきの両御所が消え去った後は、霧川マリ・浜恵子と、義理にも可憐とは言えない骨太の大年増が辛うじて頑張って居られる程度に過ぎません。

腋毛は、週刊誌のグラビヤや、ビニ本にさえ殆ど登場しません。マンガ界では杉浦幸雄さんが良いセンスを持って居られましたが、後継者は育っていないようです。

それどころか、脇ぐりが深いワンピース水着の流行に伴って、もう一方の毛のトリーミングという卑屈な風習さえ広がりそうな気配です。陽に灼けた美保純さんの水泳ふんどし姿、あの腋の下が房々して居さえすれば、若い頃の私の自画像を見る思いです。

さて、私たちは予言者でも評論家でもありません。世の人が気付いていない、かくれた美を引き出す芸術家であり、共鳴する可能性がある人々の胸の鐘を叩いてまわるアジテー

ターです。
女ふんどしについては、私もパイオニヤの一人を自負していますが、昔はあるのが当り前だった若い女性の腋毛自殺へのなげきの心を呼びさまして下さったのは、本誌の鈴木ゆり子さんの文章でした。
百文（？）は一見に如かずと申します。私は、もう年ですので、どなたかピチピチした可愛いブリッ子ちゃんが、茶色いお尻にクーッとふんどしを締め上げ、これ見よがしの黒い腋毛でグラビヤを飾っていただけません？

女斗美幻想

真夏の夜の夢

頸巻好男

蒸し暑い真夏の、或る夜のことだった。

冷房もない閉め切った部屋の中で、二人の女が派手な取っ組み合いをやっていた。

一人は、色白で、切れ長の眼をした面長の、すらりと背の高い女で、もう一方は、色の浅黒い、お下がり目をした丸顔の、太った背の低い女だった。

どうやら、太って力の強い女が優勢らしく背の高い女の首を捲いて、さきほどから頻りに首投げで攻めたてていた。

背の高い女は、長身を折り曲げるようにして、太った女の腰に必死に喰い下がっているが、強烈なヘッド・ロックをかけられて相当に苦しそうだった。

肥満女性の丸太ン棒のような太い腕の間から、長身女性のピンク色に上気した苦しそうな顔が覗いている。

相手より十センチ以上も上背に優りながら、こうした組み方は、背の高い方がかえって苦しいのだ。

肥満女性は自信満々、右から二度、三度と強引な首投げを連発しながら、しゃにむに攻めたてる。

長身女性は、危うく投げられそうになりながらも、懸命に腰を落とし、足を踏んばって必死に耐えた。

何もしないでジッとしていてさえ汗が吹き出てくるのに、取っ組み合っているからたまらない。二人共、すでに全身汗みどろだ。

それも、攻めている肥満女性よりも、苦戦している長身女性の方がよけいに汗をかいており、肥満女性に捲かれている首筋は汗でベトベトになっていた。

背の高い女は、足の裏にもかなり汗をかいているらしく、相手の首投げを耐える度に、その大きな足の裏が畳にペタペタと変な音をたてている。長身女性は、色白の軀に似ず、ひどい脂足なのである。

背が高いだけに、足のサイズもかなり大きかったが、痩せているため横幅は狭く、外人女のような細長い足をしていた。足指も長くてスマートだが、相撲などの格斗技をするには、何となく弱々しい感じの足だった。

それに比べて、肥満女性の足は、サイズこそ小さいが、横幅は広く、足指も太く短かくて、なかなか力強い感じの足だった。

二人の足を見比べただけで、相撲は太った女の方が遙かに強いのが頷ける。

勢いに乗じた肥満女性は、一気に勝負をつけるべく、太い右腕の中に長身女性の首を充分抱え込み、太い右脚を彼女の長い左脚に絡ませながら、腰を捻って、〝えい〟とばかり、強引きわまる首投げを放った。

長身女性は、必死に腰を落として耐えようとしたが及ばず、長身を宙に大きく一回転させ、〝ぎゃあーッ〟という悲鳴諸共、ドッとばかり床の上に投げ倒されてしまった。

肥満女性も勢い余って、右腋深かく長身女性の首を捲いたまま、彼女の上にどっと折り重なって倒れ組み敷いた。

〝うーン〟、乳房でも強打したのか、長身女性は呻き声を上げ、思わず気が遠くなりかけた。

長身女性を強引な首投げで倒した肥満女性は、体重に物云わせて、すかさず首固めで抑え込みに入った。何しろ相手より二〇キロ近くも体重に優っており、演技では肥満女性の方が断然有利なのである。

長身女性は、長い脚をバタつかせて必死に跳ね返そうとするが、相手はまるで沢庵石のように重くて、ビクとも動かない。

乳房を圧迫された上に、首を締められる苦

しさといったらなかった。いまにも息が止まりそうだった。
長身女性は苦しさのあまり、色白の顔を真赤にして、目をつり上げ、唇を歪め苦悶の表情を浮かべながら、長い脚をバタつかせて激しく身悶える。
長身女性の細長い足の裏は、深く抉れた真っ白な土踏まず以外は、汗と脂で赤黒くベットリと汚れ、脂足特有の蒸れたような臭い匂いをプンプン発散させており、首固めで抑え込まれているその苦しさを如実に物語っているかのようだった。
肥満女性は、最後の止めを刺すべく、長身女性の胸に全体重をのしかけながら、太い右腕で彼女の首を力まかせに締め上げた。
〝う、ううッ〟、長身女性はたまらず、凄ましい呻き声を上げながら、狂ったように長身をのた打たせ、必死に左手で肥満女性の尻を叩いてギブ・アップを訴えた。
首固め！　肥満女性の一方的なフォール勝ちである。
勝ち誇ったように、胸を反らせて立ち上がる肥満女性。ようやく身を起こしたものの、床に両手をついて辛うじて上半身を支え、長い脚をグッタリと床の上に投げ出し、まだ咳込みながら苦しそうに肩で息をしている長身女性。ほっそりした汗ばんだ首筋に、後れ毛がベッタリと纒りついているのが痛々しい。
彼女が相手よりも遙かに大柄なだけに、無惨に敗れた姿がなおさら印象的だった。
（了）

SM追想

関　逢夫

復刊第四号——順調に刊行されまづは大慶至極である。ぼくの蔵書の中で、奇譚クラブが少くなったのは、廃刊の帰結として当然のことで、古い奇ク誌が氾濫するマンネ・リズムのSM誌の中で、稀少価値を発揮するわけだが、いまそのような価値ある奇ク誌は、整理を重ねた結果二冊程しかなかった。それが復刊以来もう四号を数えて、新鮮な奇クが四冊増えたことは感慨深い。

六号月で興味をひかられた読物は、町陽一氏の〝SM半世紀〟である。

想えばぼくのSM遍歴も、すでに半世紀の星霜を経ている。歳月の流れの早さを想う感傷もあるが、永い歳月、ひたすらSM的性癖を抱いて倒錯の幻想的な魅力にひたむきな情熱を傾地して来た自分を省りみる。

いまでこそ——とあえていうが、ぼくがSM的な興味に目覚めた時代に「SM」なぞという、聞えのいゝ名詞はなかったのである。いうならば、SMの分野は「変態性欲」であった。

心中に蠢動する女体緊縛の切々たる願望を、沸々と、たぎらせつゝも、公然とそれを公表することも、語ることも憚られたいわゆる団鬼六氏のいう、隠花植物的な性癖であった。

SM的関心を、先天的、後天的と詮索する趣味は、ぼくにはないが、そ・の・気になったのは、町氏と同じ小学六年生の頃である。はからずも、同級生の少女を縛ったのも、矢張り六年生の時であった。

勿論、情景は異なるが、ぼくの場合、少女を縛った刹那の目くらめくような感動と昂奮をいまも忘れずにいる。

野原が剣戟ごっこで夢中になっている弟を呼びに来た少女を、遊びの仲間に誘って、後手に縛ったが、草の匂いと汗ばんだ髪の香りが強烈だった。胸のほのかなふくらみの感触は、神秘なものゝ如く、ぼくの小さな胸をときめかせた。

後年、熟れた全裸の女体を思うがまゝに、あられもない姿態に縛ってるときも、遠い半世紀の過去となった、その日の想いがフト胸中に去来することがある。生涯忘却することがない想い出である。

プレイは現実的であるが、心境はぼくの場合いつも幻想的である。それはプレイをセックスの前戯として、より本番への昂揚を刺激する手段とするからであろう。

緊縛された女体に陶酔する心情は、SMマニアに共通する耽美な感銘であるが、ぼくは、それによってすさまじい程の欲情を覚えるのである。然も、プレイに演技を加えることで、さらに頂点を極める。ぼくはプレイはあくまでプレイであって、責めは実践的なものではない。要するに〝形〟であればいゝのである。

鞭を揮って肌を傷つけ、血を見るほど痛めつけて女の絶叫をきかねば満足感が得られないというのは、完　な変態者に思えてならない。小道具を使用して打合せ通りの演技を、男と女が忠実に行うプレイ、それが遊びの中に得られるSMプレイの真随とするのは、ぼくの独善的なSM解釈だろうか。

悪親分が年増の豊満な女を土蔵で、思う存分に責めいたぶり、最后には、女を抱いて果てる——これがプレイのいつものパターンだが、年増と想定するのは、ぼくが若くはないし青い果実の匂いがする女よりも、男を知りつくした熟れた女の方が幻想的には、責められる女として適役だと思うのである。

その意味で、責め場をいつも土蔵と設定するのだが、理由として一つ、商業高校にいた

頃、サンデー毎日に掲載された、子母沢寛の〝天狗の安〟の印象が強く残映を曳いている。本誌に特別寄稿の「淫縄狐火街道」の作者美濃村晃氏との文通でもぼくは土蔵マニア？の執着を、書き綴ったけれど、美濃村晃氏も土蔵に大変な興味を持っていられるようだ。果せるかな「淫縄……」にお紺が土蔵で淫らないたぶり責めに身悶える件が描かれている。我意を得たりというところである。今後の氏の麗筆に期待するや大である。

媚薬のことを描いた、兵隊小説を読んだ。戦争の最中に、南方で精力剤になる薬草を、命がけで探し求める男のことである。

興味をひかれたのは、女に服用させると、女が催淫して、男根をまさぐる黄色い粉末の薬のことだったが、ぼくは女が飲むと、やたら縛られたくなる薬草がないものか、と空想を飛躍させるのだが、もしそんな媚薬があればこっそり飲ませて縛りたい女を、あれもこれもと想像して悦に入った。

前述のように、ぼくはSMプレイを前戯と心得ているから、セックス抜きのSMプレイというのは、理解しがたい。

読者投稿に、良識あるプレイを呼びかけるのが見うけられるが、果して誌上で合意した男女がプレイだけの行為で終るものか、と、不思議に思えてならない。そんな疑問を持つのは、本当のSMプレイの意味も真髄も知らぬ者の云草だ、と云われれば反論する自信はないが、やはり不可解である。

〝読者誌上デート〟に発表される限りは、なるほど縛りのプレイだけらしい。しかし、この場合は、編集部の取材のため、第三者が同行して撮影もしている。意気投合のお二人であっても、まさかに本番まで披露するわけにはいかぬだろうから納得もできる。

だが……である。二人だけの部屋で他人の視線を意に介せぬ場所で、全裸の緊縛女体…それもあられもない媚めかしい姿を眺めては、男たるもの、思わず怒張せずにはいられまい。としたら、その息子を如何になだめすかすか、ぼくが最も関心を抱くところである。縛られた女の方も、羞恥の限りをつくす姿にされるのを承知の上からは、嫌いな男には、許すまいとなるはずである。どうもこゝのところが、納得いかぬのである。ぐっと耐えて、プレイだけで我慢し、最后の一線に踏みとゞまることのできる男は、余程、意志堅固な見上げた男であらねばならぬ。

媚薬の話にもどる。ぼくらの戦友会は毎年六月十一日建国記念の日が恒例である。

初老の境に至りとみに衰えの悲哀を感じる連中が薬専を卒業、薬剤士の資格を持ち、薬局を営む男に強精剤の特効を尋ねるが、〝そんな薬があるわけがない、事実、効果のある薬を発見すれば億万長者になれる〟というのがその男の答えである。

ぼくはその会話を憫笑を浮べてきく。媚薬なんて気分の問題、そんなもの、効能をあてにするより、SM誌でも読んで、SMプレイに没頭してみろ、不肖の伜も新天地に瞠目して、潑と元気をとりもどす——ぼくの持論である。

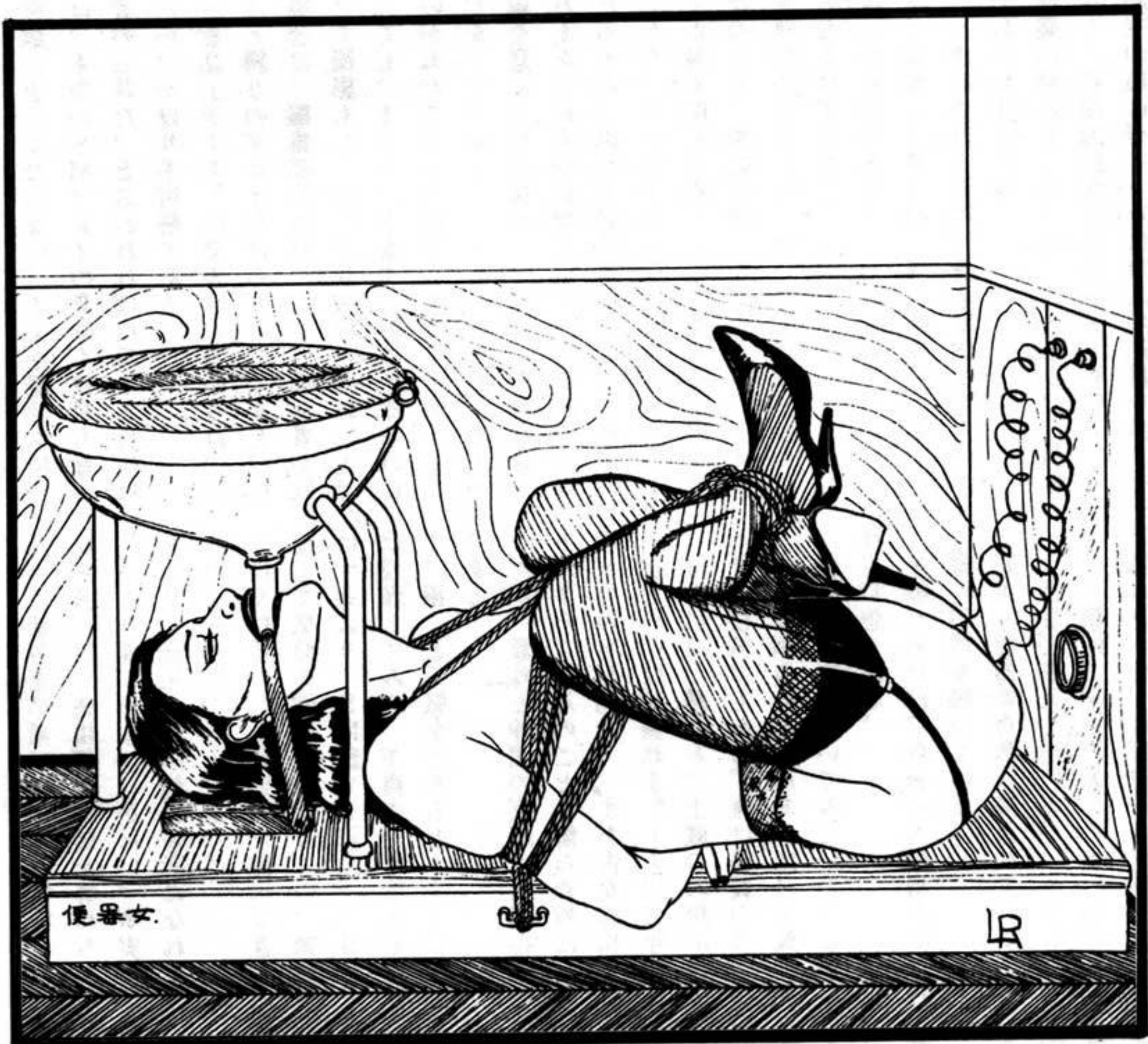
だが、意外と仲間の反応は無関心である。SMすら、なんのことか解らぬ奴に、もう説明するのも面倒で、〝まあ古女房相手に年に一度ぐらいは頑張れよ〟——で毎年幕になる。

ぼくには、縛りと、土蔵の幻想が媚薬でもあり強精剤でもある。俺は異質の人間なのか。ぼくに創作的才能があれば、土蔵シリーズの責め小説でも書いてみたいが、しかし、これも幻想である。

余暇があれば、自分一人の情念にとらわれ、土蔵の幻想を描いている。

恥毛と性器を丹念に描入れていると、いよいよ情念が燃える思いだが、こうした絵が段ボール箱に、途中で筆を折ったものやら、描き損ねたもの、恥部ばかり毛筆で描いて、他

は鉛筆で目鼻も入れないもの、和紙、画用紙……いつの間か一っぱいになった。これから暇があらば、一枚づつある程度見られるものに完成して、投稿したい、なぞと変な意欲にそゝられるのも、貴誌の復刊に、忘れかけていたSM的情念をかきたてられたのかも知れない。

私のSM人生の最后の愛読誌となるやも知れぬ、復刊奇譚クラブの永遠の繁栄と成功を熱禱します。

レスポスの園 5

結城紀子

青山の私立女子中学での生活も二年を過ぎようとしていた頃、私の身の上に大きな変化が起こりました。

母が、私の小学校時代の家庭教師だった淳子先生と駆け落ちしてしまったのです。もちろん、母の失踪が「駆け落ち」だと知ったのは、しばらく後のことでしたが。そのショッキングな事件に追い打ちをかけるように、私は母の秘密を父から知らされました。それは、私の母が、実は、義理の母――つまり、父の後妻であったという事実です。

「お前が生まれてすぐに、玲子――つまりお前の本当のお母さんは亡くなったんだよ。お前を産んだ時、子宮底部裂傷による出血ショックという思いがけない事故でね。今のお母さんは、それから一年ほどして私のところへ来たんだ。だからお前が今のお母さんを本当のお母さんだと思っていたんだよ。私達も極力、死んだお母さんのことは伏せておいたし、墓参りやお位牌も、お前には隠していたんだよ。そのうちに弟の治朗も生まれたし。でもお前のことも充分に可愛がってくれていた筈なんだ。私にとっても、子供達にとってもいいお母さんだったんだがな。幸福な家庭や可愛い子供を捨ててまで走ってしまう魔力があるんだね。女同志の愛には――。」

父のこの告白から、実に様々な感懐を得たわけですが、それが日を追うに従って、深く私の内へ刺し込んでくる無数の刺になっていったのです。

まず、女って悲しいなという思い。子供を産む、ひいては妊娠するっていうことは恐しいことなんだという気持ちです。私を産むことで子宮底部裂傷を起こし他界した実母のことを思うと、自分の産んだ子を一度も抱けずに死んでいった女の悲しさもさることながら、子供を産むこと自体への恐怖感が私の幼ない胸に渦巻きました。

次に、男って冷たい生き物なんだという思いです。別に父を責める気にはなりませんでしたが、男という生き物一般が、何故か身勝手な存在に思えてしかたありませんでした。

それから、義母のことです。それまで実の母と信じて疑わなかった人が、私と血のつながりの無い人だと判ったあと、私の小学校時代の記憶が、又、別の意味を持ちはじめていたのです。淳子先生と母との戯れを覗き見た記憶は、それまでは、強いて思い出さないように努めていたのですが、義母だと知ったとは、妙に生々しい思い出になって蘇ってくるのです。それほどの嫌悪感もなく、いや、むしろ、熱っぽい身体の疼きを伴って。父の言った「女同志の愛の魔力」という意味も、次第に判り始め、どうやら義母と淳子先生は、女学校で言う「エス」――つまりレスビアンなのだ、そのための駆け落ちだったのだということが、おぼろげながら判ってきました。

この中学二年生の時の事件が、後の私の人生にどう作用したのか、それは心理学の先生に分析してもらえばいいことですが、数年後に母が戻ってくる迄、父子三人の生活が続きました。そして、私のエス初体験も、母のいない家で、中学三年生の時に起こりました。

奇ク「友の家」紹介

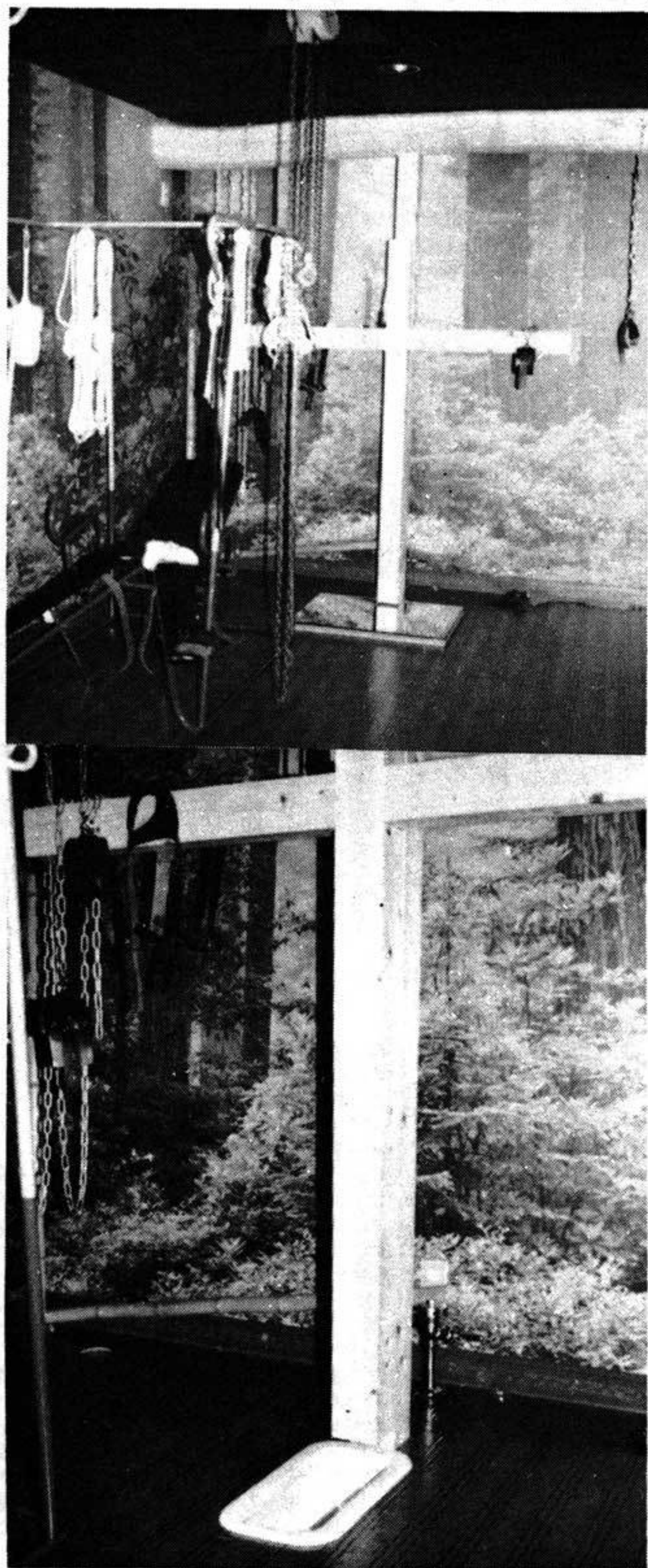
本誌愛読者のご好意により奇ク「友の家」が誕生しました。場所は、国電・総武線「本八幡」駅より、クルマで一〇分。高塚交差点近くです。

提供者のT氏が、ご自分の専用プレイ室として作られたもので、プレイに必要なものはすべて揃っており、完全防音の一軒家なので、存分にプレイが楽しめます。

費用は、使用料として五千円、宿泊は五千円増となります。

使用希望者は、編集部までお問い合わせください。

※一般客は使用できません。

女人切腹

伝記・吉村礼津自刃

巴鳥訓右

礼津は武蔵国吉村嘉六の娘。幼少で母を失い、奥方に仕え小太刀の名手であった。嘉六が側用人渡辺茂太夫によって君側から退けられ、憤死するに至ったので、礼津は父の仇でもあり君側の奸でもある茂太夫を斬った。すぐ斬奸状を目付へ届け謹慎、沙汰をまつうち、臣を斬られた主君の憤りは烈しく、斬首と一旦は決したが、奥方に仕えた身でもあるので、侍の方式に切腹を仰せつかった。

武士でも切腹とは名ばかりで、腹切刀を執るときに介錯するというのが多い元禄のころ、女としては稀有の切腹を、下屋敷で賜わることになったのである。

当日切腹の座に直った礼津は、名誉ある切腹の刑を謝し、合図するまで介錯をまつように頼んでから、いさぎよく双肌ぬいで腹切刀をとり上げた。折しも、ようやく斬奸状に目を通した主君から、切腹差止めの命がもたらされた。

礼津は一旦肌を納めて救急の恩命を謝したのち、茂太夫遺族の心中を思い、また一旦切腹を命じてすぐ変えたのでは家中の思召も如何かと、理由を述べてあくまで切腹を賜わるよう願いを述べた。

使者はまた往復したのち礼津の願いをきき届け、妹分として葬る旨の君命を伝えたので礼津は欣然と、あらためて双肌ぬぎ、腹真一文字にかき切って、みごとな最期をとげた。

その吉村礼津への思いをこめた短歌と、切腹についてのエッセイを、紹介しよう。礼津の礼と礼子の礼とが同じであることも、礼子を礼津への憧憬と自己同一化へ導いたのかも知れないからである。

(1) 礼津女哀詞 (旧カナ)

——切腹本願に寄せて

礼津女あはれ　おのが心のひとすぢに
白く極まりて　腹切らむとす

礼津女あはれ　たまきわるとき想ひしは
おのが腹切る　さま清かれと

礼津女あはれ　われとわが腹うつくしく
切りて果てむを　本願とせり

礼津女あはれ　裸身の腹を切りゆくに
双の乳房の　わななけるかも

礼津女あはれ　おのが心の清きこと
あらはさむとて　腹切りにけり

礼津女あはれ　おのが心のひとすぢに
赤き血もて　腹ぬりにけり

礼津女あはれ　ひたすら清く果てむとて
せつにねがひて　深腹切りぬ

礼津女あはれ　せつなる心きわまりて
切りし腹より　わた出づるかも

(2) 花のいのち

切腹をするときには、ただただ心を澄まして、桜の花の散る風情を想いつつ、われとわが腹かき切るべきものと存じます。

心しずかに正座して、白衣の双肌をぬぎ、右手に腹切刀を執ったときには、もはや心のなかに、恨み、苦しみはもとより、すべての煩悩を去っていなければなりませぬ。

さすれば流れ逝いて帰らぬ水の心のごとく、おのれの生命を、大きな自然の明滅する流れと観じ、更にはおのれの生も死も、その流れに白く波うつさざなみの一つの律動と観じて行けば、あとは古来の作法にしたがい、おのずからみごとに切腹し得るものではございますまいか。

桜の花の、あのほのかにくれないを刷いた花びらが、風に吹かれて　を今まさに離れようとしている――　それと同じ生命のふるえを、今は裸身となったおのれの、これよりみずから切り割くべき腹を、右手に腹切刀を握りしめ、左手におしなでているとき、てのひらに感じることでございましょう。

臍の下どおり一寸ばかりの右脇腹に腹切刀を突き立てるときは、風のさそうままに花びらの枝を離れること。

われと刃を右へ切りまわすときの裸身のふるえは、陽の光りに光りつつ花びらの空を舞い流れること。

右脇腹まで充分に真一文字にかき切って、あふれ出るおのがはらわたを左手もておさえるときは、花びらが水に地に触れること。花びらとしてはじめて、その花びらを空のほかの物質に触れること。

それぞれの情念を一つと化して、心ゆくまで腹かき切るべきでございましょう。

あえておのれの心情を生きようとして、死を決するにあたり、われとわが腹を苦痛にたえてかき切り果てるのは、生からの、本来みにくくおそろしい死への変容の相を、美しくすぐれたもの、刹那とは云え、光華をきらめかせるものとして発顕させたいという、唯一無二の心情にほかなりますまい。

醜を美に、惨を烈に転化し得るかどうか、これこそ、切腹するものの、切腹する心によって定まるものでございましょう。

さればこそ古来日本においては、小説に切腹の描写が、また演劇には腹切場が、数多く設定されて来た理由と存じます。

(3)　日　輪

あえて切腹をえらぶ人の情念を、一行の文章のなかにこめようとすれば、それは三島由紀夫の「奔馬」にあります。

日の出の断崖の上で、日輪を拝しながら……かがやく海を見下しながら……けだかい桜の根方で切腹すること

そしてこの小説の最後の一行には

正に刀を腹につき立てた瞬間、日輪は瞼の裏に赫　と昇った。

とも書かれております。もっとも彼自身は、桜の根方で日輪を拝して切腹したのではありませんが、切腹の瞬間、やはり彼の瞼の裏には、日輪が赫　とかがやいていたかも知れません。

つまり切腹は、生命のかがやきの極限を実現するための死であり、そのとき死は生命の喪失ではなく、むしろ生命をいろどる、人生の一部としてあらわれます。

生と死の統合、悠久の生存感、自己一個の生命が、より大きな生命に転化する契機、かるべき死が、花火さながらほとばしる生命のなかに融解してゆくものとして、切腹という死の形式の内面性がある、と云えましょうか。

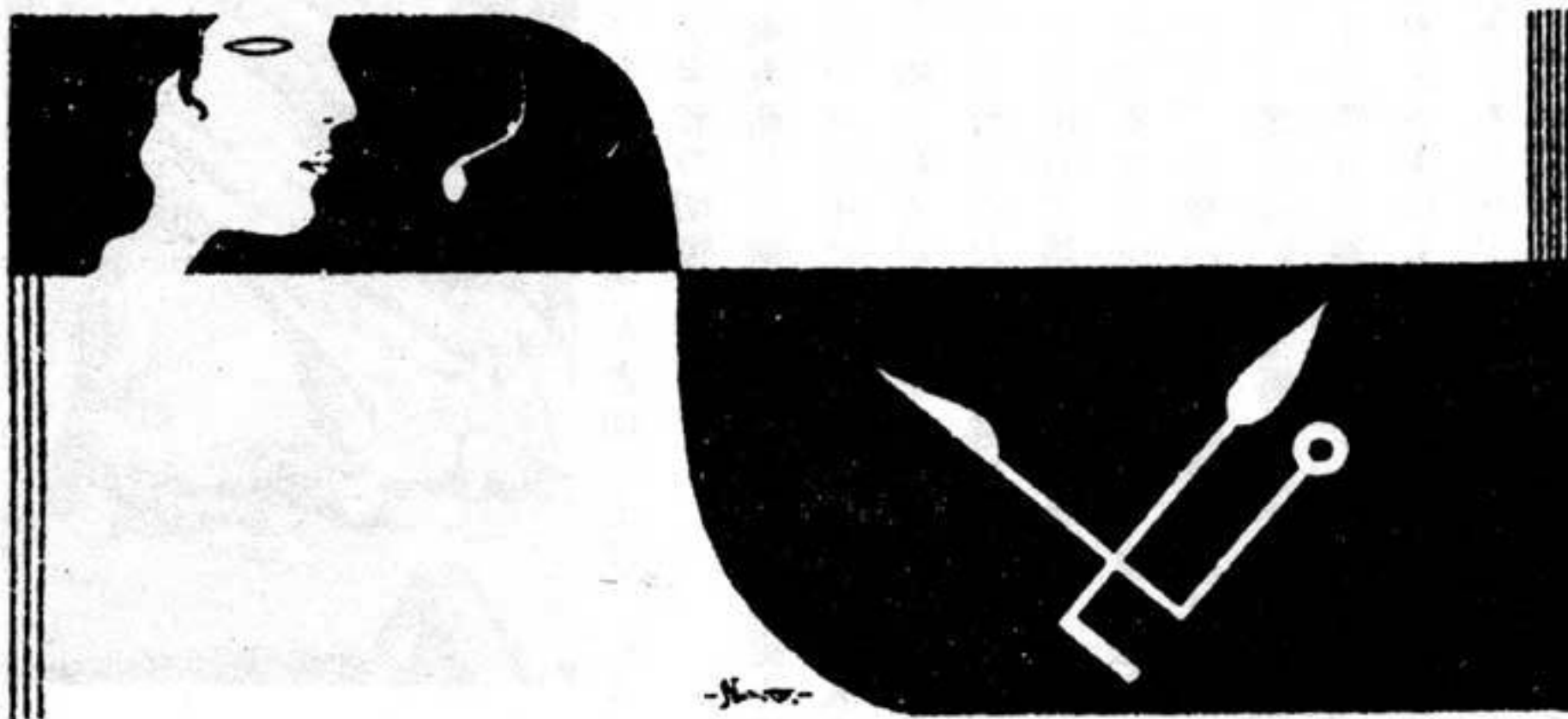
そういう意味で、切腹こそは、実は人間の一回限りの、心情の象徴的な演技でもあります。

切腹にともなう死の恐怖、激烈な肉体の苦痛、それらに耐え、それらと戦って、なお厳格な作法をもって自己を律し、自己の精神を凛然と、かがやかしく確立してゆかねばなりません。

それは他の手による死刑にも、一瞬にして致命にいたる自殺にもない、極限状態における人間の心情とその美しさを立記しようとす

る、象徴的な行為なのでございます。
それは瞼の裏に日輪をかがやかしめるだけの信念があってはじめて、可能なのでございます。
しかし切腹は女性にこそふさわしいものと思います。なぜなら、一つには、みずから生命を断ってはじめて、生命の美しさを見る、という意味でやはり受身のわざでございましょう。
おのれを外界にぶつけることなく、おのれの内面においておのれをいけにえとすることにより、はじめて生命の美しさを象徴するということは、女性の本質的なものにつながるわざでございます。
二つには、腹部、特に臍下は女性の生命感の実在するところであり、そこをわれとわが手でかき切ることは、形而下的にはおのれの生命をみずからとり出す、という行為の象徴であり、苦痛が生命感と混交するものがあろうと思います。
南総里見八犬伝の伏姫が、われと腹真一文字にかき切ったとき、放散した八つの珠玉こそ、伏姫の生命の放散でなくてなんでしょうか。そう考えれば切腹という行為に、潜在的な関心をもつ女性は決して少くないと云えましょう。

もし私——礼子が、切腹しなければならないとしたら、次のような姿を想像します。
まず白装束か喪服の双肌をぬぎ、充分に着衣を押し下げます。そして臍下一寸か臍(ほぞ)にかかるくらいの高さで、左脇一杯から右脇一杯まで、出来るだけ大きく腹をかき切ります。
深さは三寸、つまり腹真一文字にかき切り終わってまもなく、自然にはらわたがあふれ出るように——。もし出て来なければ、左手ではらわたを引き出したいと思います。これがまことの切腹と信ずるからなのです。
それから臍(ほぞ)に刃を五寸くらい突き刺し、更に切り下げて、腹部動脈に達するような致命傷をみずから与えます。
しかも死後の顔には、いささか微笑をうかべていたいと願います。
また十文字に腹かき切って俯伏した私を、
「礼子、みごと、立派」
と愛する人に抱き起してもらえたら、どんなにか幸わせだろうと思うのでございます。

切腹考証

異型の切腹

三富浩生

切腹は基本的には、一文字・十文字とよく挙げられるのがまず二種に限られているが、その他にバリエーションのようなものがある。

たとえば合戦記・軍記には見えないが、井原西鶴の武道伝来記によると、

妥女、左京が最後、銘々に腹二文字に引き捨て、其後の差し向い、剣を互に貫き、とあり、臍上ひとすじ臍下ひとすじ、あるいは臍下ふたすじ、横にかき切ったものと見える。

浅吉一乱記なる文書には大石主族の切腹を述べて次のように記している。

左の肋骨まで臍の下一文字に搔切る。（中略）また胸の下左の骨ぎわより右の骨ぎわまで引付け（中略）腹も二文字に切目大きく手ぎわに　たる由

三文字となると武市半平太がある。土佐勤王党の領袖で志成らず刑死に当り、事前に語ったとおり、禁獄衰弱の身をもってよく、エイエイエイと声をかけながら、左から右へ三度腹を三の字に腹を切った。同じ三文字でも稲妻形に左乳下から斜め右下へ切り下げ、刃を転じて左へ斜めに切り下げる。臍を挟んでくの字状になる。そこで再度刃を転じて下腹の中心を右へ斜めに切り下げる。乃木希典将軍の切腹が十文字とも、またこの形の三文字ともいわれている。

十文字の切腹が横に一とすじ切ってこの刀で、臍の右わきを切り下げ又は切り上げるのに対して、武田氏滅亡の際、高遠落城に際し小山田大学助は、胸より小腹まで押おろしたと云われる。十文字に切ろうとしてとげ切れなかったのかも知れないが、大平洋戦争の末期、野荒しの汚名に憤死した幸子という十八才の娘は、草刈鎌でまず臍のすぐ下を横一文字にかき切り、第二に下腹の低い位置から正中線のすぐ左を切り上げた。半ばで正中線の右がわへ切り口が交叉したが、かまわず横一文字の切り口までかき切り上げている。云わば丁字形の切腹である。

南条範夫「華麗なる割腹」は歴史小説であるが、その中に徳川家光に殉死する人人の挿話が綴られている。それぞれみごとな切腹をとげて行くのだが、圧巻は題名の由来になっている山岡主馬の腹の切りようである。主馬は阿部重次の臣で重次の初七日、法要に列したのち、白昼の墓地に仮屋を設けておこなわれた。諸肌ぬいだ主馬は左手の腹切刀を右肋骨下に突立て斜に左脇下へ切り下げた。次いで刃を右手にもちかえ左肋骨下から右脇下に引き下ろした。斜め十文字の切腹のように見えたが、主馬は更に鳩尾に刃をあて、臍の中心とする円を描いた。「お家の定紋」と主馬が叫んだ瞬間、主馬の腹の傷が割れ、はらわたがあふれた、とある。この腹の切りようを言葉にするなら華麗としか云いようがない。

鞘　和彦　凄絶画譜！

デッサン

レスビアン物語

禁男の宴（二）

八重垣　薫

レスビアンの情欲は、男女間のそれとは違って、一度や二度行えば満足するというものではない。快美の絶頂に達するということがないのだ。レスポスは底無し沼である。快感を味わえば味わうほど、更に強い快感と刺激を求める。そして遂には、沼沼の果てに身を滅ぼしてしまうのではなかろうか。

女というものは男とは逆に、アクメに達すると、肉体的な疲労は別として、ますます溌と生気を帯びてくるものなのである。

みづほと妙子とは、一時の疲れが静まるとこの刺激が、更に次の愛戯への導火線となって、更に新しく激しい情欲が湧き上ってくるのであった——。

ベッドへ腹這いになって、みづほは、細い女性用のシガーを喰わえた。すぐに、妙子が手元のライターを取って火を点ける。

「アクメ、きたの？」

みづほは、フーッと細い煙を吐き出しながら話しだした。

「ええ、とっても強いの。でも、一人でアクメになるの、恥ずかしいわ」

「ごめんネ。だって、妙子の剃刃の使い方がとても上手なんだもの」

「でも、今度は一緒よ」

「フ……、可愛いい人、まだ足りないの？」

「ウフン、いじわる」

「でも、アクメがくるときって、たまらないわネ。体がポーッとして、それから、ジーンとなるんだもの」

「あんまりやると、頭へこない？」

「私？　平気よ、ずいぶんやらなかったからネ。メンスの間、イライラしてたの。妙子、その間なにしてたの？」

「…………」

「オナニー、しちゃったんだろ？」

「だって……」

「いつやったの、悪い子。あれ、不感症になるわョ」

「…………」

「一人でやっても快い？」

「すこし、快いわ」

「今度、私にオナニーするところ見せてよ」

「いやよ、恥かしいんですもの。お姉さま、したことないの？」

「オナニーするより、妙子の体を抱いてたほ

うが気持いいもの。私はそんなことしなくてもアクメがくるのよ。だから、平気……」
「どんなことするの？」
「写真を見たいネ、妙子の汚したパンティはくと、そのままアクメに入れるわ。だから疲れない」
「やっぱりジーンてなるの？」
「そう、クライマックスよ。妙子を抱いてるみたいな気持になるの。妙子は受身だからね、刺激されなくちゃ、そうはならないでしょう？　私だって、それは最後には刺激が必要だけど……」
　話し合いながら、みづほの片手は絶えず妙子の全身を愛撫していた。
「オナニーしてあげようか？」
　ただそういっただけで、妙子の胸が大きく息づき始める。
「でも……　私……」
「まだいいの？」
「だって、濡れているから……」
「拭いてあげるわよ、アンヨ、開いて」
「妙子が……拭く……」
「恥かしがりやさん、フ……」
　ベッドの隅でケープをひろげ、その中にかくれてベットリと吐淫している秘部を妙子が拭いている間に、みづほはナイロンのブラジャーを脱いだ。パンティだけが相変らずピッタリと肉に食い入っている。
　そして、そのしなやかな姿体がパッと躍ったかと思うと、いきなり妙子の体をベッドの上へねじ伏せた。
「アアッ……」
　思わず声をあげる妙子の両肩からガウンを引きむしると、そのまま下へ伸びて、遂に妙子の秘門に触れた。

白蛇の狂乱

　二個の女体は、再び三度び、相抱いてからみ合った。
　より強い快感を求めるレスポスの女のみが持つ技法によって、更に淫蕩な渦へ誘導されていくのだ。ここまでくると、もう今までのようなどこかロマンチックな雰囲気も失せはてて、男女間の情交とほとんど変らない。いや、かえってそれ以上の淫らな情欲が辺りにむせかえるようにたちこめていた。
　真白な腕が、足がからみあい、もつれあって、それがウネウネと動いているのだ。
　妙子の両足は大きく開かれ、そこに、みづほの腰をはさんで、お互いの足が縄のように巻きつき、片足の指は、丸く引き締ったみづほの尻の割れ目に、パンテイを通って食い入っていた。
　そして、もう片方の足は膝からぐいと折れ曲って、かかとの部分で自分の秘部をぐりぐりとこね回すようにうごめいている。
　みづほは少し腰を浮かせて、妙子の両足をそうした奇妙な形に押しつけながら、ガクガクとふるえる手で四つの桃色の乳首を合致させると、背中を大きく波うたせて、こすり合わせた。
　妙子は丁度、片あぐらの格好のまま横たわった形になり、みづほの足がギュッギュッと締めつけてくるたびにゼイゼイと荒い息を吐く。
　自分の足のかかとが、ザラザラと秘部へこすりつけられると、股の付け根の筋肉が硬直したようにしびれてくるのだ。
　そして、ぽったりと可愛いい乳房はゴムまりを二ツこね合わせたようにくなくなとゆがみ、ブルンとふるえた。
　ベットリと全身にふきだした汗が、肌をすり合うたびにピチャピチャとかすかな音をたて、二人の唇からは、接吻のたびに溢れだした唾液が頬のほうまで伝ってヌラヌラと光っていた。
　二匹の白い蛇は、全身を欲情に濡らして狂乱する。

「ウウッ……」

「ハアッ……ハアッ！」

足が解けて、いくらか体が自由になった妙子は、ヒシとみづほを抱きしめて、

「く、く、苦しいわ……、ああ……、アッ、も、もう、もう……」

うわ言のように叫び続ける。その声を、快い音楽のように聞きながら、みづほはまるで男が夢中になって腰を使う時のような巧みさで、秘部を妙子のそれに押しつけ押しつけ、すり合わすのだった。

もう二人は完全に理性を失っていた。たちまち襲いかかるクライマックスの波の中に溺れて、欲情の激しさに喘ぐばかり——。

その快感は静まるばかりか、大波小波と打ち寄せ、打ち返し、ますます高まっていく。

全身がポーッと火照ってくると、みづほはやっと妙子の胸から手を離して立ちあがり、呆然と横たわっている妙子の腕を取って引き起すと、手早く汗を拭いてやりながら、

「どう、可愛いい人、興奮して？」

「ええ、もう何がなんだかわからないぐらいよ……」

妙子も、先程までのはにかみを失って、淫欲に血走った眼をみづほへ向けた。

「これからよ、天国へ行くのは。いいこと？さア……」

みづほは妙子にかわってベッドへ横になると、両の掌を拝む時のように胸の上、乳房の下あたりに組んで、その中から二本の人さし指だけをまっすぐに立てて、

「おいで、可愛いい人……」

ただれるような淫らな視線を妙子に向けるのだった。

倒錯の秘技

妙子もいまや一匹の淫獣と化していた。体にうづく快感はひくでもなく、たかまるでもなく、彼女の頭をしびれさせ、肉体を鞭うった。

無言でみづほの胸の上へ跨がると、直立している二本の指の上へ静かに腰をおろしていく。次第次第にむきだされてくる秘奥の色、ねっとりと愛液にぬれてひかる秘肉は、みづほの眼の前で息づいていた。それを食い入るように見つめながら、みづほは立てた指を動かそうとはしない。

両手で自分の乳房を握りしめた妙子の丸い尻がゆっくりと沈んでいき、遂にみづほの指先が秘門へ触れる。思いきったように妙子が腰を落すと、ズルッと半分ほどめりこんできた。ジーンと快よい温かさがしみとおる。

「ウッ……、ウウム……」

妙子が呻いて、みづほの乳房へ両手でしがみつく。みづほの二本の指をすっぽりと埋めつくした妙子の秘部が大きく割れてさらけだされた。

みづほは始めはゆっくりと、次第に早く指を動かして妙子の秘奥を愛撫する。妙子は、

「ウッ、ウウ……、ウウン……」

と唸りながら、ゴムまりのような乳房をブルブルとゆすった。

妙子は膝をつかず、足首を屈伸させて巧みに腰を使っている。輪を描くように動かしているみづほの指に調子を合わせているのだ。

やがて、更に快感が高まり、その姿勢でいることが耐えられなくなった妙子は、みづほの指を埋めたまま体を回して、みづほに背を向ける格好になった。

そして、みづほの両足へしがみついて、息づかいも荒く、激しく腰を揺り動かしてくるのだが、仰向けに寝転がって指を妙子の体へ埋めているみづほにとって、これほど興奮させる光景はほかになかった。

みづほは胸の上へ置いた指を少しづつ顔のほうへ近寄せた。それにつれて妙子の尻も移動し、やがて、みづほの指は妙子に埋められたまま顔のま上にまで引き寄せられた。

そのまま、急に指を引き抜くと、アッというまもなく妙子の秘部はみづほの顔面へおおいかぶさっていた。
「アァッ……」
妙子は不意打ちをくらって悲鳴をあげたが、下からみづほに両腿をかかえられ、自然と前へ倒れて、自分もみづほの肌間へ顔を埋める形になった。
女同士のシックス・ナイン……。だが、みづほは薄いナイロンのパンティをはいているので、妙子の望みをかなえることはできない。
妙子は過去に男とのセックスを、ただの一回だけだが経験している。しかし、みづほは生れながらのレスビアンで、男の経験はなかった。だから、妙子にしてやったような秘奥へ指を挿入する愛撫は必要ないのだ。
妙子のような男とのセックスを経験しているレスビアンは無意識に秘奥への挿入を求めるが、みづほはむしろそれを怖れていた。だからこそ、パンティを体から離さないのだ。
だが、妙子との激情に刺激されて流れ出た多量の愛液は薄いパンティを通してジトジトとにじみ出していた。妙子は夢中になって唇を押しつけ、そのねばっこい液を舐めまわした。みづほの恥丘はきれいに剃毛されてふっくらと盛りあがり、パンティの上からでもそれとわかる溝をつくっていた。それは薄皮をかぶった香ぐわしい果物のように思えて、妙子は激しく顔をこすりつけずにはいられなかった。
女同志で心ゆくまで味わう秘密の感触……妖しくも魅力的な世界に二人は飽くことを知らず、その甘い痴戯に酔い痴れていた。ベッドいっぱいに横たわり、互いの脚を枕にして弾力のある肉の塊りにギュッと爪をたてながら、息をつめて秘部へベッタリと顔を押しあて、鼻先でグリグリと肉芽を弄びながら、舌は花唇をかきわけて、えぐるようにヌルリ、ヌルリと戯れる。
「あッ、ツウーッ……」
突然、妙子が、歓喜とも苦痛ともつかぬ叫びをあげた。みづほの白い歯が、ポッチリと膨んだ肉芽を噛んでいるのだ。チクチクと針を刺すような鋭い痛みが、妙子の全身を戦慄的な興奮へ誘い込む。
ヒイヒイと息を吸い込むたびに、妙子の爪先が曲り、純白のシーツを乱した。腰から背中を鋭い快感がツーンと走って妙子の意識を麻痺させてしまう。咽喉がヒリヒリとひきつり、息もできない。もう、みづほの秘部を舐める気力も失せて、白く美しい歯をむきだし口を開いて眼を吊りあげていた。妙子は、自分の体が無限にふくらみ、空中に浮遊しているかのように感じた。
「殺してしまいたい……、妙子、私はそれほどあなたを愛してるの」
みづほは低くつぶやき、水さしの水を口一杯にふくむと、それを妙子の乾ききった咽喉へ流しこんでやる。コクリと音がして、妙子の口から大きな吐息が吐きだされた。
「いいこと、くすぐるわよ……」
みづほは眼を細めて笑い、羽毛の束を手にした。妙子がものうく首を振った。だが、それを拒んでいないのは妙子自身よく知っていた。妙子の両手、両足がいっぱいにひろげられる。
羽毛はそよそよと、ほんの少しの息使いにもそよぎながら妙子の腋の下、乳房へとたわむれかかった。フワフワとゆらぎながら脇腹から太股へ、更に右に左に肉体の急所を撫ぜまわしていく。ククッ、ククッと奇妙な音を洩らして妙子の全身が波のように揺れた。
みづほは巧みに羽毛をあやつりながら、時折、妙子の唇を吸った。そして、片方の手を妙子の首へ巻きつけ、ゆっくりと締めつけていく。死への誘惑……、それは甘美な陶酔を妙子に約束してくれているようだった。
（つづく）

特別寄稿

伝記 淫縄狐火街道 第五回

美濃村 晃

〈前号までのあらすじ〉

慶安六年八月二十日、公儀隠密井関半九郎は、隠密旅の途次ふとしたことから丹波福知山四万五千石の城主稲葉淡路守紀通の発狂自刃を知る。稲葉家城代家老の黒岩図書は藩主発狂自刃の場合は稲葉家は廃絶となることを察知して藩の御用金三万両を、由良ケ岳山中の赤洞山に埋めたのだった。その隠し金の絵図面を城代家老に預けられた狐火のお紺は、お家再興のために絵図を江戸の本家に届けに行くことになる。

山地図しらべ

富田屋の土蔵の二階で蟹縛りにされた小雪は、八助と権太の二人に、三萬両の隠し金を埋めた場所を書いた山地図を出せと責められることになった。

「おい権太ッ。おめえの得意のめ責めというのをやってみな！女を責めるにゃあれが一番きくってえことだからなァ…へへへへッ」

と、辰造が云った。辰造は、早く山地図を手に入れて褒美の金をもらいたい一心だったのだ。

「さあおめえ、小雪とか云ったな！たたまらない目に遭わねえうちに吐いちまったらどんなもんべえ……へ、へへ」

辰造は、小雪の左右に開ききった太腿の付け根をのぞきこみながらニヤニヤと淫らに笑った。

「な、なにを吐けと云うのですよッ！」

小雪は、必死に腰をひねって辰造のみだらな眼を避けながらそれでも気丈に云った。

「へへッ。わからねえ女だなァ……こっちの訊きてえのは、おめえたちが福知山から持ってきた山地図だよう」

「えッ?、や、山地図ッ?そ、そんな

ものはし、知りませぬッ！」

「へ、えへへへッ。おもしろくなってきやがったぜ。あんまり早く吐いてもらっても面白くねえんだが、こうはっきりと知りませぬッ！と強いタンカを切られると、どうしてももう少し虐めてみたくなってくるんだよなァて、へへへッ！」

「おい、おえちゃんよう。いくら知りませんとシラをきっても、おいら達にはおめえらが山地図を持ってることは判ってるんだぜ。云わねえとこうするぜ…」

権太はいきなり小雪の下腹部の毛を二、三本指にからめてピッ！と引き抜いた。

「あッ！痛いッ！」

小雪がたまらず悲鳴をあげる。

「ふ、ふふふ。痛いだろうなァ……云わないと、もっともっと痛くしてやるぞ！」

と、権太はまたも飾り毛に指をからめてくるのだった。

「へへ、こんどは四、五本一度にぬいてやるか！」

「あ、あッ！い、痛いッ、や、やめて

えーッ」
「痛えのがいやなら、早く山地図を出してしまえ!おいッ、山地図はどこにあるんだッ」
と、権太はかさにかかって責めたてる。
「あッ、あッ、いまそんなことを云われても………!」
小雪はすぐに返答ができず困っているのだった。山地図は浪路が持っているはずなのである。いまそれをこの男たちに云うと必然的に浪路が責められることになるのだ。
「やい?……云えッ山地図はどこにあるのだッ?正直に云わねえと、この部分のありったけの毛をみんなむしりとってしまってやるぜ……へ、へへッどうでえ」
権太は、小雪の股間に手を入れてたちの悪いいたずらをしながら、イヒヒヒッとわらった。
「あ、あーッ!な、なにをいたすのじゃッ!」
小雪は男の下品な指のいたぶりに耐えかねて思わず知らず武家言葉が出てしまうのだった。
「おっとっと。腰元という自分はごまかせねえなあ……たまらねえところへ来ると思わじ武家言葉がとび出しやがる……ふ、ふふッ」
権太は指をペロリと めて、そのヌルリとした二本の指を、小雪の眼前にかざした。
「へ、えへへへッ。この指でおめえのたまらねえところをくじりまわしてやろうか……ひいひいとよがり泣きをしながら白状をするのもいいかもしれねえなァ……ふふふ」
「おい権太よう。その女のそこをなぶるのは井関さまに決っているんだ!。おめえがいじることたあならねえ!」
と辰造はきびしく云った。辰造は本当のところはお紺を井関半九郎に抱かせるつもりでいたのだが、あとでよく考えてみると、前にしののめ宿で抱いたお紺のむっちりしたおしりの感触が忘れられなくなっていたのだった。そこで気持が変りかけているのである。
「そ、そんな殺生なッ!お紺を抱こうとすりゃあいけねえって云うし、代りにこの女を抱けるのかと思って悦んでりゃあ、こいつもいけねえとなると、あっしはいってえどうすればいいんで?」
権太の褌に包まれたものは張り裂けそうになっているのだった。
「おおそうだったなァ。いまにお前にもいい女を当てがってやるぞお……」
と、辰造は云った。

二ところ責め

小雪は、右手首と右足首をひとつに縛られ左手首と左足首も一緒に縛られて、じりじりと左右に引きのばされて手足を拡げられていた。
「う、うッ!な、なんというひどいことを……い、痛いッ!あぁッ」
「それそれ、早く白状してしまったほうが身のためだぜ……そうれそれ、ずいぶんはずかしい姿になったなァ…く、ふふふふッ」
八助は、褌の下のものを石のように固くして、責められている小雪の羞恥に悶える姿を見ていた。
その小雪のまっぽだかの股の間に、権太が這いつくばって、豆いじりをし

ているのだった。
　権太は指先をぺっとりと唾液でぬらして、
「い、ひひひひッ！」
　みだらに笑いながら、ヌルヌルの指先で豆いじりを楽しんでいるのだった。
「あッ！ああーんッ！な、なにをするッ！あ、あーッ！ひいッ！ひいいいーッ！」
　小雪は、いやらしい男の指で敏感な肉葺をいじられて、耐えられずに喜悦の悲鳴をあげる。
「へ、へへッ。いまの間は気持がいいだろうが、そのうちにその気持のいいのがだんだん地獄になってくるんだぜ！へ、へへへへッ！　一度でも気を遣ったが最後だ。うんと頑張って気を遣らねえようにしねえと気を漏らしてしまうと地獄を見ることになるぜえ…へへへへッ！」
　と、権太は妙な笑い方をしながら小雪を追いつめてゆく。
「あはーッ、うふーん！　ひいーッ！」
　たまらず小雪は鼻息をあらくしてもだえるのだった。権太は、ますますぬめってくる女の肉芽のまわりをたんねんになぞりまわした。
「ふ、ふんふん。はァはァはアーッ」
　小気味の良い部分をなぞりまわされる度に小雪はフンフンと息使いをあらくして、今にも気を遣りそうな表情をするのだった。
「おうおう、この娘はもう気を遣りそうな顔をしていやがる。眉を八の字にして眼をトロンとさせて腰を浮かせてあえぎはじめてきやがったぜ。てへへへヘッ、もうそろそろというところだなァ……ほれほれ！どうでえどうでえ………気持がいいんだろう？それそれ！もうイキそうなんだろ？いいならいいと云ってみな！ほうれほれ………けへへ、おめえまたずいぶんとおつゆを出しやがったなア……ほらッここをこうすると、どうだい………どうだい！ほら何とか云ってみろ！」
「あ！　ああーッ、い、いいのッ、たまらないッ！ひいっ！あ、あっそ、そんなッそんなにしたら……も、もういくうーッ！」
「へへ、ああもうたまらねえなあ……こうするとすぐにでも気がイキそうになるんだなア……ほら、ここをこうすると……」
　云いながら権太は小雪の肉豆をむき出しにして、そのコリコリと硬くなったところを、したたりをも塗りつけた指先でクネリクネリともみたてるのだった。その心地良さは言語に絶した。小雪はもう耐えることもできなくなり
「ひいッ！も、もうだめッ！　ああーッ　い、いくうーッ」
　と断末魔の悲鳴をあげるのだった。
「ふふふふッ！おやもういくのかい。前から何度も云ってるはずだが、あんまり早くイキすぎるとあとが地獄だと教えてあるだろうがよう！ほれほれもう気がイキそうだなア……」
「あッあーッ！そ、そんなにすると、い、いっちゃうーッ！」
　必死になって気を漏らすまいと我慢をしていた小雪も、権太の指が、肉豆とおしりの穴を同時に狙って侵入してきたのにはさすがの小雪も声をあげて狂いまわった。
「ひえーッ！やめてえーッ！　あーんッおかしくなるうーッ！　ひいっ！ひいいーッ！」
「へ、へヘッ。どんな強情女でも、お

いらの二か所責めには音をあげるのさ……これでイカせたそのあとがいよいよ舌責め拷問ということになるのさ、うふふふッいまに腰が抜けるような目にあわせてやる。…………」
　権太の指で二か所を同時に責められるとさすがの小雪もたまらずよがり声をあげた。
「い、いくうーッ！　あッいくうッ！」
「へ、へへへッ。どうでえどうでえ、とうとう気を遣りやがったぜ……さあこれからが拷問の本番だぜ……へ、へへへッ」

豆責め拷問

　権太と八助は、もう一度小雪を縛った縄目をしっかりと調べ直した。
「おい権太よう。女の縄目はゆるんでいねえかよう……」
「へえ、八助あにき。縄目はだいじょうぶでさあ。このくらい締っていりゃあ少々あばれたって解けるもんじゃあねえよ」
「ああそうかいそうかい、そいつはよかったよく調べておかねえと、この豆め拷問というのは女がきちがいのようになってあばれまわるから、縄のかけかたが悪いとすぐ解けてしまうのだ」
　と、八助は云い、縛り縄の点検が終ったらそろそろ次の〝豆め拷問〟をやろうことにしようじゃねえかと相談をした。
「小雪の肉豆を舌で責める役は、いつもの通り権太、おめえの役廻りだ！女を言葉で責めて目当ての山地図のあり場所を吐かせるのはおれがやるぜ」
　と、八助と権太の役割りは決ったのであった。
「さあ、やるかァ……へ、へへへ、この役ばかりはいつやっても股倉の小憎がいきり立ちやがるんでなァ……テ、へへへへッ」
　権太は、さも照れたように笑ったが、この男の下腹部の一物は火のような熱を持ちはじめていた。
　蟹しばりにされた小雪の股間に　め役の権太が位置を占めて地獄の拷問が始まった。
「ふふふふ。たったいま気を遣ったばかりだからすぐにはイクめえが、どんな強情な女でも忽ち泣かせるおめえの舌で舐められちゃあいくらももつめえよ、うんとよがらせてやんな」
　八助の声援をうけて権太は舌によりをかけて小雪の秘所を舐めることになるのだった。

蟹縛り責め

　小雪は、蟹縛りにされてあまりの羞恥にあえいでいた。
「あーッ！　は、はずかしいッ！」
　それもそのはずで、この手足を左右に展げきった縛り方は女にとって気が狂うかと思うほどにはずかしい姿態になるのだった。
「え、へへへッ。たまらねえかっこうだなァ
　権太は、小雪の羞恥の姿をニヤリと眺めながら股間に頭をくっつけるようにして寝そべった。いよいよ、権太の舌責めがはじまるのだ。
「ひいッ！　な、なにをするのですッ？」
　熱い男の息が思わぬところにふれてきたので小雪はヒイッと悲鳴をあげた。
「あーッ！　な、なんということをッ！　あ、あれーッ！」
「け、へへッ。たったいま気を遣った

ばかりなのに気の毒だが、もう一度続いて気をやってもらうぜ……へ、へへ。おめえさんの口から山地図のあり場所をどうしても訊き出さなけりゃぁならねえんだ。」

八助が小雪の口から山地図のことを訊き出しにかかっている。

「あにき、やりますぜ……」

と、権太は云った。

「ああ、やりな。最初はすぐに気を遣らせるんだぞ。そのあとが二度三度となるごとに女は狂いはじめるのさ。そこがこっちの狙いなのだ」

八助は、舌なめずりをしながら、小雪が泣きはじめるのを待っているのだった。

「あーあッあーいやーッ！ いやらしいーッ」

縛られた小雪がはじかれたように身をもがいて叫びはじめた。

股間にうずくまった権太の舌が小雪の秘唇の中心を　めはじめたのだ。

「あ、あーッ！や　やめてッ！ やめてくださいッ！ そ、そのような、いやらしいことを……あーん、うふーん！」

「ヘッ！ いやらしいだとかいやだとが云ってるくせに、気持がよくて鼻息があらくなりはじめてやがる。ふふッふふふッ」

八助は勝ち誇ったように云ったが、この男には小雪が鼻息をあらくしてあえぎはじめると、女の敗北の姿が見えてくるのだった。

「ふ、ふん。はァッはァーッ！ふんふうん！」

妖しい息使いがだんだん荒くなってきて、小雪は必死に耐えているつもりでも声がもれそうになってくるのだ。

「べちょべちょ。ちゅうちゅう……！」

と、権太の舌は小雪の秘唇の最もたまらないところをチロチロと舌先でなめてくる。

「ふわぁーッ！ あーんッ。た、たまらないッ ああーッ！」

小雪は権太の舌先に翻弄されて、もう今にも気がイキそうな声をあげるのだった。

「へ、もうまいりそうだぜ権太よう、この女のお×××この味はどんなものだい？」

「う、うッ、う、むッ」

と、犬のように唸りながら言葉も出せず舐め続けている権太はもう口のまわりからあごにかけて小雪の流した淫水でべとべとになっていた。

「あ！ あーッ！ い、いくぅッ！ うふーん」

小雪の腰が大きく浮いて喘ぎが切迫してくる。

「権太ッもうすこしだ！もうすこしでおだぶつだァ……それそれッ、やれっっやれえ……」

八助は、小雪の喘ぎが切迫していると見て権太をけしかける。

「あ、ひいーッ！ も、もうダメえッ！あ、あーっ、い、いいーッ！ イクーッ！」

と、小雪は小鼻をヒクヒクさせて絶頂に果ててしまった。

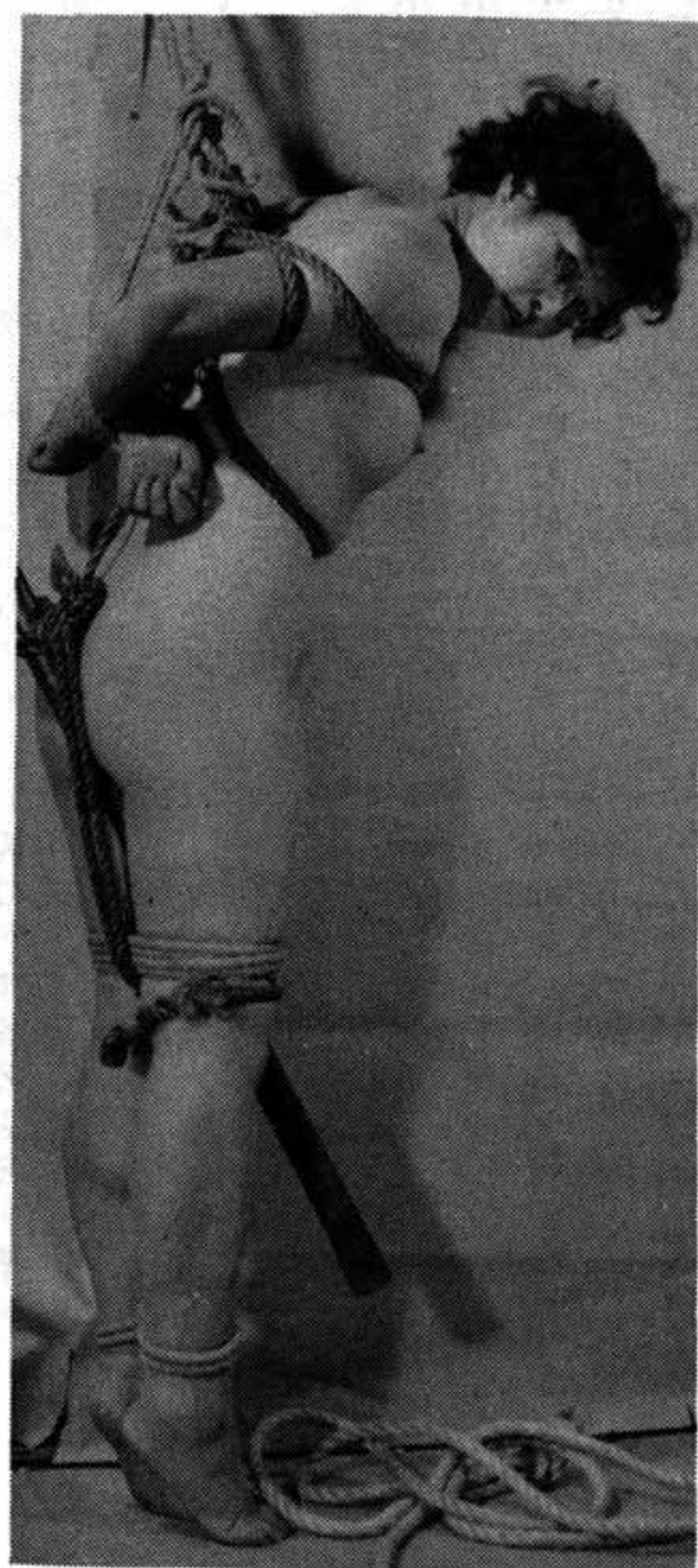
「て、へへヘッ。とうとういきやがったか。……ああおねえちゃん、いいきもちだったろうが……さあ、これからが拷問になるのだぜ……」

八八助いやらしくわらった。

「あッあッ！ やめてッ！ もうやめておくれえッ！」

と、小雪が必死に悶えて泣いている のは、たったいま気を遣ったばかりだという小雪の秘所を、再び権太が舌を這わせでゆくのだ。
「ひえーッ！ もういやッいやッ！ たすけてえーッ」
絶叫する小雪の白い内腿も権太のあごも淫水でビショビショに濡れそぼっていた。
「うわあ！ ずいぶん出してるじゃねえかよう、よっぽど気持が良かったとみえるなあ……」
八助の云う通りで、権太の唇の周りもあごのあたりも小雪の秘所からあふれた樹液でヌラヌラしているのだった。
「い、いやあーッ！ いやいやッ！ もうよしてえッ！」
小雪が狂いまわるのも道理で身動きできない女の敏感な部分に権太の唇がおぞましく吸いついてゆくのだった。
「そーれ権太よ。気を遣たスグあとのおサ○を思うさま吸ってやりな！」
と八助はけしかけるのだった。
「イヤーッ！ いやあーっ！」
小雪の裸身はおぞましさにはねかえった。

「ほら。もう一度続けて舐められるのが厭なら、山地図のある場所を教えろ！」
　と八助は脅しにかかるのだ。
「し、しらないッ！　しらないッ！」
「ふふ、強情な阿魔め！　吐かなきゃあ舐め責めだァ……やれ！　権太ッ！」
「おうよ……へ、へへへヘッ！」
　権太は両手で小雪の太腿を動けないようにしっかりと抑えておいてからヌルリとした熱い舌で犠牲の秘唇のまわりを舐めはじめるのだった。
「あッ、いやーッ、ま、またいくうッ！　あーん！」
　ついさっき気を遣ったばかりなのに小雪はまた妖しい気持になってくる。
「く、ふふふ。権太の唇の中で肉豆をずいぶんと大きくしていやがる……け、へへへそれを吸われるとたまらねえんだろ？」
　小雪は大きくなった肉豆を権太の唇の中にすっぽりと吸い込まれて、チューチューと音をたてて吸われると、あまりの小気味よさに
「ヒッ！　ひいーッ！」
　と泣いた。
「ふん。この泣き方は声がうわずっていやがるぜ……あともうひといきでまた気をやるんだ…ふ、ふふふッやれ！権太ッ」
「……………おうッ！」
　と応じた権太が右手の指をそろりとのばして、女のおしりの穴をぬるりと探りやがった。そして肉豆のそそり立ったところを舌の先でコロコロと転がしたものだ。
「ひっひいいいいーッ！」
　もう耐えらなかった。
「い、いくうーッ！」
　と一声泣きたてて、小雪は両足をふんばってぶるぶると震えた。
「おい、山地図のことを吐かねえなら、もう一度やるぜ！どうでえ！」
　と、八助がおどすと権太は小雪の蟻の戸わたりあたりをぞろりと舌で舐めるのだった。
「ひいッ！も、もうゆるしてえッ！もうゆるしてえッ！」
「なら、山地図はどこだ！」
「そ、それは…？」
「くそッ、まだ強情を張りやがるなッ」
「あ、あッ！も、もうゆるしてッ！」
「ゆるしてほしかったら、山地図のありかを吐いてしまえ！吐かねえと権太の舌がまた見舞うぜ！それ権太やれッ！」
「へえッ！」
　権太の舌は下から舐めあげるように小雪の秘唇を這った。
「あーッ。ま、またーッ、ふうん……くふふっ……あッ！」
「へへ。いくらがまんをしていても、そのうちに耐えられなくなってきて、二度も三度もむりやりに気を遣らされるのだ」
　小雪が白状したのはそのあといくらも過ぎない頃だった。
　さて次に責められるのは浪路の番だった。
「もう舐め責めにも飽きたから、こんどは、擽り責めをやろうぜ！女は軀のどこを擽られてもヒイヒイ泣ぎやがるからおもしれえや。
　さあ次は、浪路のくすぐり責めだだァ………」
　八助と権太は、浪路を引さ出しにかかっていた。

（以下次号）

あぶ派紳士録②

美濃村晃

突然彼がやってきた

　ある冬の朝の寒い頃、まだ床の中にいた私を、表の戸をドンドン叩いて叩き起した人物があった。私はそのとき奇ヶに勤めていて、堺市の西湊町五丁目に部屋を借りていたのである。
　その、寒い冬の朝に何の前ぶれもなく突然訪ねてきた人が、山下久一郎さんであった。
　山下さんの名は、古いマニアの方なら憶えている方もあると思うが、右ページのカット写真を見て、ああこの種の写真ならどこかで見たことがあると思い出す読者もあると思うのである。前記の山下さんは、当時の〝風俗草紙〟や〝裏窓〟などという初期の雑誌で活躍していたカメラマンである。山下さんは、その頃のかけ出しの私にとっては、兄き分のような人であった。何事によらず相談にものってくれたし、同じ縄の世界の先達のような方でもあったのだ。
　死んだ梶山季之が、小説現代の何月号かに「女を縛って四十年」と題する人物伝記を書いたことがあったが、その内容の人物のモデルが前記の山下さんだったものである。
　山下さんは、社会派のカメラマンとして主として社会派新聞系の立派な仕事をしていた。それが一度あぶの世界の人になると縄さばきもあざやかな縄師に変貌するのであった。
　前記の梶山氏の文章に彼のことはあますところなく書かれているのだが、終戦になって新聞特派員として外地に居た彼は白系ロシヤの若い女性と暮して、その白系ロシヤ女性を全裸にして縛り上げ写真を撮るのだった。この白系ロシヤの娘を縛る時の話は梶山作品中では圧巻だった。
　私は、当の山下さんから、この白系ロシヤ娘の話を直接訊いているが、この娘の思い出話をするときの山下さんの瞳はキラキラと青年のように輝くのだった。
　その彼女の思い出の写真は残念なことに一枚も残っていないという。彼は、

「こんな時代になることが判っていれば
どんなことをしても待って帰ったのだが
ねえ……敗戦だし、もうみんな何もかも
終りだと思って日本に帰るときに原地で
処理してしまって惜しいことをしたもの
だ……」

と、語っていたのを聞いたことがある
のだった。

私だって、先輩の山下さんが白系ロシ
ヤ娘を縛って撮った写真が残っているの
ならぜひ見たいものだと思っている一人
なのである。

山下さんは和歌山県の出身だそうで、
SMの写真歴は古くて実を云うと昭和初
期からの作品があるのだった。

山下さんはまことに無欲恬淡たる人で
本来ならこれほどのSMブームの中を、
その気になりさえすれば撮影の仕事だっ
て縄の演出の仕事だっていくらでもある
のをわざと自分から避けて通しているよ
うに思えたのは私のひがみだったろうか。

山下さんは、伊藤晴雨先生とも親交が
あった。

私に云わせれば、山下さんはS型の人
物ではあるが、心情的には熱血漢なので
ある。権力に媚びることが嫌いでよく納
得のいかないことがあると相手を撲ばずつっ
かかって行くようなところもあったようだ。

山下さんの縄さばきには、山下さんを知る
マニアの中でも定評があり、この道の趣味の
面でも山下さんに少なからずお世話になった

人は多いはずであった。右ページのカット写
真は彼の作品である。左ページのスナップは
あるときの撮影会か何かの彼の演技のひとこ
まで、山下さんを彷彿させるものがあり私に
はなつかしい写真である。

山下さんは、写真をとらせてくれるモデル
さんなどには非常に面倒みがよくて、何かと
相談にのってやり細かな世話をしていたりも
していたようである。

彼は生来のロマンチストで、コーヒーが好
きだった。彼の周囲に集ってくる女性たちは
みんなかわいくて美人で純真だったのだ。

私はよく石神井の彼の住居で、二人して一
人のモデルさんをハダカにして手足を縛りあ
げて、夜の更けることも忘れて縄の談議に明
かした思い出もあるのだ。

彼は私にとっては、ある時期には縄の師匠
であり、またある意味では、私のあぶ人生の
先導者だったとも云えるのだ。名利にこだわ
らず私慾におぼれず、山下さんは自分のした
いように好きなように、あぶ人生を生きつづ
けた人なのであった。いまちょっと消息がわ
からないが、山下さんは忘れた頃にひょっこ
りと人なつっこい笑顔を見せてくれる人なの
である。好漢の健在を祈ること切である。

あぶ・まにやの手記

まえがき

最近本誌の形をそつくりそのまゝ真似たイミテーションが出ていますが、そういつた雑誌が告白や手記に名を藉りた編集部の作り物であるのに反して、ここに掲げた四篇は文章や表現に或は生硬な所があるかも知れませんが、すべて真実の告白を殆どそのまま掲載したもので筆者の生活がいきいきと何の技巧や衒いもなく表現されている事はこれをお読み下さつた読者の方々が一番よくわかつて下さると思います。

自虐鬼の独白

河真田子路

私が常に、臀部を露出したいと欲求することは男色とは関係がないように思います。私は男色の経験はありませんし、そのような、要求を持つたこともありません。昨年の本誌に男色魔の虜という告白記がありましたがこれは、マゾヒストとしての立場から、あの徹底した責と情交のくりかえしの場に、ひどく心を惹かれ、強く印象に残つています。然し、単に、男色自体のみを扱つた他の読物類には何の感興も覚えないのです。別に嫌忌するという程に、積極的な反撥もありませんので、或いは潜在的には、そういう傾向に進み得る可能性があつたのでしょうが、それを自覚に導く、きつかけがないまゝ、ひつそくしてしまつたとでも考えられるでしょうか。私が男としての象徴物に対して

よりも、臀部、殊に肛門部への性感を強く意識するという事実について、自分でも何か素質的なものを否定できないのではないかと思つています。

肛門に異物を挿入する行為も、それを裏書しているようですが、私としては然し、その場合にも、その行為自体は決して、コイトスに代るものとしては行つていません。これはあくまでも被虐感を満足させるための手段として、するのであつて、肛門性交の意識は全然伴つていないと断言できます。

臀部や、肛門などを人前にさらして見せるということは私にした所で普通の状態では、到底できるものではありませんが、他からの強制によつて、いや応なく露呈しなければならなくなつた場合の屈辱感というものは、マゾヒストである私の異情な欲求を遺憾なく充たしてくれるでしょう

私は、衝動にかられながら、自らの手で露出し、又そこを、いろいろに、フアンブルするわけですが、それは手段上そうするのであつて、私の空想は、常に、圧制、強要又は暴力による屈服の結果として、その相手の懲罰下に服しているものと仮想します。勿論その手は私のものではなくて処罰者の手であります。私を凌辱する行為は彼女の意思によつて、その手がこれを強行していると思いこむのです

彼女は私が、最も羞しいと感じ、最も醜汚のものとしてひたすら隠蔽しようとする箇所を殊更に露出させた上、私の劣等感を一層強調させるための弄虐を加えて、やがては私から完全に人間感情を奪い取ろうというのが目的であつて、そのために私は、彼女の、ほしいまゝな嗜虐の対象となつているのだと想定しつゝ、我が手で演技するのです。

臀部露出とともに、殊更ら肛門をひろげて見せたり、何かの異物、たとえば指先とか、木片などを、無理押しに挿入したりして見ることも、要するに、肉体の苦痛と、醜汚部を誇張される絶望の快感を求めるからに外ならないのです。

もう一つ、私の相手、すなわち私を支配する位置に立つ者は必ず女性でなければならず、これを男に置きかえて考えたことは一度もありません。男の場合では全く何の刺戟もないのですが、反対に女性であつてさえくれれば、その容貌の美醜、年令、境遇などには余り条件を固持することがないのです。むしろ私は、極度に卑しめられることを欲するためか、顔立や物腰に、下品な魅力を持つた人で社会的な地位もなるべく低く、私よりも数等知能の劣つた相手から、逆に馴育され、玩具のように取扱われている自分の思い切り辱しめられた姿を想像することが多いのでした。

肛門に何かをインサートする行為については、かつて本誌上で羽村京子氏の秀抜な体験記を読ませて貰いました。これは、その方法の奇抜で、多様なことと、又体験者が女性である御自身のものという点で、なかなかの反響を呼んでいるようです。私も自分の傾向からして、当然深い関心をもつて愛読し、且つその妖美な感覚に陶酔しています。殊に、それが女性の立場で行われたものであるという魅力は決定的で、これを、そつくり男の行為として見た場合は

果して同じような感興を人に与えたかどうか、甚だ疑問です。むしろ真剣であればあるだけ、その要素は多分に戯画めいて来て、逆効果に終ることがあるのではないでしようか。

私も今、この記録ををつづりながら、実際に余り気乗りがせず、単に嫌悪感を人に与えるのみならば、筆を止めるべきではないかと考えるのです。が反面又少数の人々には共感を得ることも、あり得ると思う期待と、自己暴露は結局私自身の自慰行為であり、うつ積する懊悩を発散させるための手段としては許して貰えるかとも思い、敢えて下らぬ筆をたどつているわけであります。

私は、お腹の中に空気や、液体を注入して見たいとは思いませんが、肛門には、どの程度のものが入るのか、いろいろ試してみたものです。特にローソクの使用が主で、最初に極く細目のものから実験して、直経約一寸位のものまで、充分挿入できることを知りました。肛門を開拡される強圧感と、直腸への圧迫は、確かに責めの感覚に通じて、これが若し、女性の手によつて強制されているものとしたら、この上もない愉悦に浸ることができたでしよう。ローソクに、予め油性の滑剤を塗つて置けば、なる程挿入は容易ですが、同時に又、抜け易い欠点があり、私はむしろ、そのような細工をしないで、強い抵抗を排除しつゝ、無態な力によつてぐいぐい押しこめられる、あの、一種征服されていくような気持というものが、何ものにも例えようがない程、私を恍惚境に誘つてくれるのです。

私は、この実験を行う場合に、自分の空想を助けるためその雰囲気に近づくため、よく学校や工場などの女子便所に入りこみます。こういう場所は、通常たやすく、はいることはできませんが、運動会とか、バザーとか、いろいろの行事で、外来者のにぎあう日がよくありますから、そんな時は一番よい機会で、少しも人に怪しまれることなく紛れこむことができます。もちろん便所の方も、それらの外来者が出入りして用を足すことは何の不思議もないことで私は何喰わぬ顔をしてその中にはいるのです。便所内は案外清掃されているのが常で、その点共同便所のように始末に困ることはありません。踏板の上に、私はゆつくりと坐りこんで仕度にとりかゝるのです。扉には内部からサルを下ろして置けば、もう中で、どんなことをしていようと、発見されて騒がれる心配はありません。酸敗した糞便の臭いもその元は女性の体内から排泄されたものであるという連想が、私をかえつて楽しませてくれることは、云うまでもないことです。

私は酔つたような気持で、おもむろに衣服を脱ぎはじめます。

全裸体となつた時の妙に不安定な感じを私は好んでいます。まるで防備を失つた、攻撃の正面にさらされたような或いは又、追いつめられた獲物が、その場に射すくんでしまつたときのような、それに似た劣敗感を、いや応もなく味わされて、云うに云われぬ恍惚境を誘い出してくれるものです。

又、場合によつては、全裸体とならず、ズボンだけを脱いで、長目のワイシヤツ一枚で試みることもあるのです。

裾の長いワイシヤツは、一応腰下を充分、隠しているわけですが、その裾は、やがて、強制的に捲り上げられ、高々と背部に、たくし込まれるのです。これは全裸の場合よりも、特に露出された部分だけが、印象的に誇張され、尻まぐりという滑稽な恰好が、多数の面前に晒されたときのみじめな効果を想像するとき、私の被虐感は充分に強調されてくるのでした。

さて、便所の中は非常に窮屈で、いろいろと態位を作るのには苦労するわけですが、その窮屈さも、いわば一つの効果をもたらしていると云えるのです。それはまるで動物が、狭い檻の中に捕獲されている状態にも似ています。自分の身一つを入れるのが精々というくらいの、小さな小屋に繋縛された畜犬のように、限られた、極くわずかな自由しか与えられていないという観念が、私の求める雰囲気を助長させてくれるからです。

私は、丸裸か又はそれに近い珍妙な姿で、先ず固い床の上に仰向けに寝ころびますが、もちろん完全な状態で寝てしまうことはできません。床に接着する部分は、頭と肩の一部分に過ぎず、背から下は、一方の羽目板に添つて、逆さまに上へ伸びていきます。それから両脚を壁の巾一杯にひろげ、前方へ落すように折りまげますと、当然クレバスを全開したお尻の位置が、私の身体の最上位に、そびえ立つ火山のような姿勢で浮上つて来るのです。

陶製の便器は丁度肩のあたりを、ゴツゴツと責めて来ますので、長時間そのポーズを保つているためには、その痛苦にも堪えなければなりませんが、脱ぎ捨てた衣類を丸めて適宜な位置に敷いて置くと、幾分は楽でした。

さて、そんな形に自らを拘束しておいて、例の、ローソクを挿入し且つそれに火を点じるのですが、深々と突きさつたローソクは実に風変りな、その蠋台に、キツチリと収まり、安定した直線の先で、静かな焔を上げているのです。時折は、溶けた蠟が、つうツと流れ落ちてくることもありましたが、その熱さは、決して堪え難いようなものではなく、むしろ適度の刺戟を、その瞬間軟い皮膚の上に、ぴりツと与えてくれる程の、快い変化があるようでした。

私はそのような恰好を、架空の女性を対象とする強制拷問と心得、まるでその苦痛から救われようと努力する哀れな犠牲者のように藻掻き、のたうつのですが、結局はそれが徒労に過ぎないものとして、自覚されていく過程を演出しているわけでした。

女学校の便所の中に、このような不埒な男が潜んでいるなどとは、おそらく誰も想像しなかつたでしよう。この便所を使用する人達は、その九割までが女性であることは勿論で、現にその時も、私の入つている便所の右隣も左隣も入れ代り、立ちかわりと云つてよい程女の人がいそがしく用を足していくのです。私のはいつているドアを、ノックする人もおりましたし、前の通路を、連れの女性と声高に話し会つたり、嬌笑をあげて通りすぎる人もあつたりして

私はまるで多数の女性の環視の真ん中で、晒し者にされているような不安な錯覚に、胸をドキドキさせる程昂奮しつづけているのでした。

女性達が、何の遠慮も要らない弄り者として私を取り扱つたり、思い切つた加虐の実験に供しようというような時には、私は当然、自分の意思を否定された、無力で、柔順で、どんな要求をも充たし得るよう訓練飼育された犠牲獣れあるべきです。そして彼女達は、私の姿を、どんな醜い形においても、どんなにみじめな、汚辱の形においてでも自由な構想に基いて工作し、観賞と、実用の具に供すでことができるのです。私は人間の地位からけおとるさ、土の上に四つ這いとなつて、鎖につながれます。冷たい金具に装飾された革製の部厚い首輪が、ガツチリと南京錠で頸にとりつけられている筈です。私は自分の空想を満足させるため、便所の中の演技だけでは到底、辛抱するわけには参りませんので、夜ともなれば街を歩き、私に必要な舞台のありかをたずね廻ります。疎開跡の、まだ残つている野菜畑や、太い丸太が山のように並んでいる木場の前を通るときには、強い誘惑が私の足を引きとめてしまいます。そして私はそつと周囲を見廻しながら、いつの間にか、物かげに身をひそめ、その場の状況を見極めている自分に気がつきます。

私は闇につつまれており、人の往来する通路からは、かなりの距離にへだてられ、どこからも目撃される心配がないと知ると、例によつて、素早く脱ぎ捨ててしまいます。

あさましいとも、気狂ざたとも云いようがないですが、衝動に衝かられた時の私の行動は、自分ながら、どう喰いとめよう術もないのです。私は口をあけ、呼吸を切らして、文字通り、やせ犬のように、そこら中の土の臭いを嗅ぎ廻ります。膝を伸して四つ足で歩くその姿は、通常の人の想像する限りでは、どんなに馬鹿げた、滑稽なものだつたでしよう。

然も、その馬鹿げた、滑稽な姿が、彼女達の無遠慮な嘲弄の的となつて、ますます辱しめられてゆく結果への道を私自身が作つていこうとしているのだと知つたなら、遂に人々は、サジを投げてしまうでしょうか。

ともあれ、現在の私には、まだ対象となるべき一人の女性も存在していないのです。私は、独りの世界で、誰からの目撃も受けることなく、秘かに、そして大胆に、私の欲する行為を遂行しているのでした。

私は、鎖のついた犬の首輪を用意して来て自分の頸に装着すると、その鎖の先端を、木材や、雑草の根に、固く繋の留するのです。かくして私の意思は抹殺されました。私は鎖の長さが許す位置まで、右に左に匍い廻りますが、その限度に来る度に強い反撃を頸に感じて、よろめき倒れ、進もうとする意思を、完全に挫折させられるのです。私の所有者は、私を必要とする時が来たとき、いつでも、直ちに使用することができるように、私をここに、準備して置くわけです。

次に、私の所有者は、私が自分を犬であると強く自覚さ

せる必要から、私のお臀に尻尾をとりつけねばならないと考えるでしよう。私は、いろいろと工夫しました。結局、ゴム製の適当な太さのホースを、一尺ほどの長さに切りとて、使用しました。ホースの一端には、棕梠の毛を束ね私て差しこみ、それを尻尾の先と仮定します。他の一端には二寸位のやゝ固い棒状の物を差しこんで、ホースの太さをそこだけ一段と膨らませます。その膨らんだ部分が全部私の肛門内に収つてしまうのですが、それで充分抜け落ちる心配はありません。私は満足して歩いてみてもみごとにピンと伸びた尻尾の先は、地上を匍い廻る時の身体の振つにつれて、ゆらゆらと上下に揺れ、お尻を動かすときは左右にふるえます。

この思いつきは確かに私の気に入つたものの一つでした自分自身の姿を、傍から見物することはできませんが、私が今、どんなに奇抜で、滑稽極まる恰好に見えているかよくわかります。

私の対象となる、いずれかの女性の眼に、この光景が映じた場合はどうでしよう。私は立派に、弄りものとなる条件を備えているではないでしようか。彼女は間違いなく私を嘲笑し、或いは、もつと甚だしく私を辱しめようと考えるかも知れません。いくら辱しめても、どんなに弄つても一向に差し支えないものとして彼女の眼には私の姿が映る筈ですから。

実際に私は、自分で設計して、本物そつくりの犬の尻尾を、ゴム製品工場に依頼しようとさえ考えていました。それを私の肛門に装着して、一層犬らしく振舞つて見たならばと、全く真剣になつて考えたものです。

然し、このようにして私の妄動は、ますます異常の進行をつづける一方でしたが、空想はいかに逞しく発展しようとも、結局は独り芝居の虚しい結果を味わうばかりで、現実には、やはり救われる道はとざされているのです。こんなことを現実の世界に期待できるかどうか、期待してよいのかどうかはわかりません。然し私のような異常性格者が救われる方法があるとすれば、やはり異常の世界に、その道を求めるより外はないようです。

私は依然として恥ずべき露出行為をやめようとしないばかりか、一歩、二歩と漸進して空想を現実化しようと摸索する態度に出たようです。特に臀部に集中する私の露出慾は、汚い話ですが便所というものに殊更の魅力を感じています。道を歩いても共同便所のように不潔に汚れたものでさえ強く心を惹かれ、そこに入つて見たい慾望にかられます。そこでは、とも角何を顧慮することもなく、自分を露出することが許されるからですし、それが女子専用のものであつた場合ならば、なおのこと気分を満足させてくれるのです。

そして私は冬の寒さがまだ十分残つている三月の末、小学校の児童便所でそれを実行に移したのです。その経験は私に一つの自信と暗示とを与えてくれました。次の素晴しい全身の血が逆流するような機会が訪れるために。

あぶ・まにやの手記

倒錯艶書

信太蓉子さまへ

三富浩生より

ふみして恋しくなつかしき蓉子の君に申しまいらせそろ——と書くと、今宵はふたゝびおん目にかゝり候いぬ、と書いて来ねば落着かないようですが、お目にかゝつたことも無し、たゞ本誌でお書きになつたものを拝見しているだけなのですから、こゝは私の思いのたけを、ひたすら述べる他は有りますまい。

「開花の契機」(四月号)を読みました時の私の驚き、そして憧れとも付かず、ましてお慕いしていると云うでもなしたゞ人の世に生を受けて、同じ歓びを見付け出した近親感に切なく胸を締め付けられながら、私は繰り返し貴女の告白を読み耽るのでした。

何んなに美しい人でも、それが男でも、女でも、決して心を魅かれない私、むしろ、そういう人と恋愛はおろか、交際もしない私、そうして私はたゞ一人、貴女のようなお方を探し求めて来たのです。私自身と嗜好を同じく出来る女性、お互に理解し合える女性、貴女こそ私の理想の女性なのです。

セックスのこと、ましてこういう倒錯的な傾向は、たとえ好きな人が有つても自分から訴えることも出来ないし、他人のそれを見破ることも出来ません。ことに貴女同様、自己愛着と同時に自己加虐に執着する私は、極めて内気なのです。こういう告白だつて、貴女に面と向つてなら、貴女が私と同じ嗜好を持ち、充分理解し合える方だと判つていても、私は恐らく一言も云えずに了う位なのです。

ですから「開花の契機」を読んだ日からの私の、苦しいばかりの切なさは、何と言い現していゝか判りません。

何よりも私は「三宝の上の腹切刀」を前に、目を閉じて「屠腹せねばならない破目にある」御自分をいとおしむ貴女のお姿を想像するだけでも、激しい感動に打たれます。

やがて貴女は今は露わになつた。弾力のある柔かいお腹を撫で下すと、右手の腹切刀をお臍に突つ込むのです。それは何という艶麗且つ哀切極まりない構図でしょうか。五尺三寸十四貫という、貴女のすばらしい肢体が、一層此の哀婉美を引き立てます。中康氏の所謂「悲愴美」の極致と

云えましょう。
私は我を忘れて貴女へのお手紙を認めました。同じ歓びに胸を震わせたこともあつたという告白の手紙だつたのです。でも、悲しいことに貴女は一と言もお応え下さいませんでした。或いは編集部の方が、貴女の御迷惑を慮つて、取次いで下さらなかつたのかも知れません。そう思うことが私を安らがすのです。
貴女が色々の空想に浸つて楽しんで居られるように、私もまた色々な空想を楽しむことが出来ます。その一つを申上げましよう。

物語は今から二百年ほども昔にさかのぼります。
今年二十の春を迎えたお蓉の方は、明るく美しい。まるで芙蓉の花のようなお部屋様です。十九の浩司は、殿の近習を勤めています。
彼はお蓉の方を秘かにお慕い申上げているのですが、彼女は少しも彼に関心を持つていないようです。
ところが、すまじき恋に悩む彼は、ふとした素振りから同僚に見抜かれました。
もとより此の藩も、お家騒動は免れません。お国家老派とお江戸家老派とは、日夜激しい暗斗を続けているのです。お蓉の方も浩司も、お国家老の息のかゝつた人達ですから、江戸派は、事有らば彼らを失脚させようと計つています。殊に二人とも殿のお覚えが悪くない方なのですから……

そして、とう〳〵一夜、浩司が宿直の夜、厠に立つた間に、彼の袴は失くなつていました。
疑惑と懊悩に焦悴した浩司は老女に呼ばれて行きましたお蓉の方のお局の隅に、浩司の袴が脱いであつたと云うのです。一切の申し開きは無駄でした。
うま〳〵とお江戸派の奸計に陥入れられて、二人は不義密通の汚名の下に、死罪と決りました。可愛さ余つて憎さ百倍とは、うまく欺された殿の、無理からぬ心境です。
お蓉の方は、せめて最後の願いにと、切腹仰付けられるよう申し出ました。
——相対死にもよかろう。
殿は冷たい嗤いを浮かべました。
やがて刻限が来て、薄化粧のお蓉の方と、やつれ果てた浩司が、白布を敷きつめた大広間の中央に向い合つて着座しました。
二人の間には、三宝の上の腹切刀の、巻き残された刀先が、楢天井に映える灯明りに背いて、冷たい光りを放つています。
自分の不注意から、恋い慕うお蓉の方まで巻き添えにして了つた申訳なさに、蒼白い顔を俯せる浩司へ、お蓉の方は淋しく微笑してみせます。諦めの色なのです。
——申訳ござりませぬ。
低く呟く彼へ、お蓉さまは頭を振つて、
——はかない縁(えにし)、せめて最後を共に……
と応えました。あゝ思いは通じていたのかと、彼は一期

あぶ・まにやの手記

の歓びに胸打ち震わすのです。

検使が着座し、罪状が読み上げられました。それは身に覚えの無いものながら、今は心の底から二人の魂は触れ合うのです。

恋い慕うお蓉の方の切腹を見届けつゝ、自分も切腹することに、浩司は深い歓びを感じていました。

二人は同時に肌を押開き、刃を手にしました。眩しいほどのお蓉の方の美しさを、最後の眼に止めようとする浩司の前で、彼女の右手の腹切刀は、早や深々と、最も豊かに肉付いた下腹の左脇に突立つています。遅れじと彼も、刃を突つ込みます。迸る血汐、身内を貫く激痛、二人とも最早や死の陶酔に浸つて行くのでした……。

蓉子さま、お笑いにならないで下さいね。

若し私が貴女にお目にかゝれたら、きつと刃引きの刀で斯うした幻想の遊戯にお誘いするでしよう。

私のたゞ一つの気がかりは、被虐の相手を誰にも頼めないから、「不本意ながら自虐の手段――即ち切腹の真似――を選ばざるを得ないのです。」という貴女のお言葉でした。

「悦虐秘帖」（八月号）で、貴女は本当の慾望をはつきりお書きになりました。

醜怪な悪魔に腹を突き刺される幻想、それが貴女の最上の快楽だ、ということを。

それでもいゝのです。貴女さえ許して下さるなら、私は望まぬことですが醜怪な悪魔に扮しましよう。此の世で私の最も愛する貴女の御希望を充たすためですもの。

そして若し、遊戯のみにあき足りず、貴女が真実、貴女のおつしやる「甘美なる桃源境」にとび込んで了われるなら、その時こそ私は生きて甲斐ないのですから、貴女の豊かに麗わしいお腹を割いた刃で、直ぐに私自身の腹を割いて、貴女に折り重つて斃れるでしよう。空想は自由です。空想は其の限りで楽しいものですね。

勿論貴女は、私にそんな特権を与えて下さらないし、また東と西に遠く離れ住む上に、とても内気な私達は、一生お会いする機会は無いのですから。

たま〳〵同じ号で、陰惨にして華麗な芳年の責め絵を紹介する記事が、私の眼に止まりました。その中の圧巻「安達が原一つ家の図」は私がかつて或る錦絵店で見たことの有るものでした。是れを手に入れよう。そして貴女に差上げよう。きつと喜んで貰えるに違いない。私はそう信じました。

見た、というのは丁度一年ほど前のことです。

その錦絵店の主人は合巻ものの中の版画を繰りながら、

――どうです、えゝもんでつせ、

一寸舌足らずに云い切ると、面長な、どこか新派役者のように目鼻立ちの整つた顔を私に向けました。

そこには、緋色の腰巻一つの若い妊み女が、逆吊りに吊るされ、肋も露わに老女が、凄まじい形相で包丁を砥いで

いました。藍刷りの背景に女の真白な膨らみ切つた腹が印象的で、苦悶の表情の底にも、何か放恣な、性慾の匂いと云つたものが覗けていました。

老女の眼は到底逃がしつこない妄執の表情に暗く炎えて女の姿態を捉え渋紙色の肌のたるみが、今将に苛まれて行こうとする豊満な女体を一層引き立てゝいました。

でも私は其の時、主人の調子に引込まれませんでした。絵そらごと、それは絵そらごとの世界です。そしてその限りで、スリリングな悦びの形象であるかも知れません。

無言でいる私に、

――これも取締りがきびしおしてな、まあ是はお伽だ、お伽だすよつてに其の心算で見たらえゝのです。

純粋な上方弁とは云い難い口調で、また云い切ると、主人はしげ〳〵と絵を瞶めていました。

私が何も買わずに其処を出た時、真夏の日光は、暗い錦絵店の古めかしく沈んだ空気を忘れさせるような強烈さで私の眼を射すくめていました。……

暫らく行かぬ其の店へ、私は芳年の絵を求めに雨の鋪道を歩いて行きました。然し絵は売れて了つて、もう無いのでした。

――廉う放しました。惜しいようなもんだ、あん時買うといて貰たらねえ、また心がけときまつさ。

何も彼も変つて行く、ふと、そう思いました。主人も一年ぶりで老けていました。私も貴女という女性を見付け出して、何か楽しいのです。絵も持主を変えて了いました。

真白に膨らみ切つた女の腹、腰や脛を蔽う真赤な腰巻、それらが幻影となつて私の眼に浮かびました。

――いや、縁が無かつたんですよ、また寄せて貰います

私は雨の鋪道へ出ました。是で貴女に私をつなぐ縁の糸が、一つ切れました。でも、私が、貴女が、生きて行く限り私達は同じ耽美的な世界に呼吸して行くことが出来るのですね。

ね、蓉子さま、そうお思いになりませんか？ 貴女の何時までも若く美しくいて下さることを、私はお祈りしています。

圖責めのアイデイアを募る圖

責めの写真及び縛り絵について、こういつた構図やポーズ或は趣向で作成してほしいという御希望がありましたらその説明と出来れば略画をつけてお寄せ下さい。優秀なる企画並に採用の分には、画稿又は写真を差し上げます。

（編　集　部）

あぶ。まにやの手記

白へのノスタルジア

河村哲夫

私は白い物に憧れる。とりわけ女性の肌の白さは哀しいまでに私をうつ。丁度闘牛が、赤い色を見て昂奮するように、長い間私は女性の肉体の白さを病的に近い異常な執着で追求して来た。真白い二の腕、透るような素足の白さ、大理石を磨いたような胸のふくらみ、それ等はどんなにか私の心を狂わせたことだろう。特に、女体の或る部分が、正常であれば当然あるべきものがある筈なのに、白かつたような場合、その一事だけで、私は彼女に烈しい恋情を抱いた。そしてもし私がそんな女性に遭遇したとしたら、私のもう一つの異常性慾――サジズム――が頭を擡げて、彼女を思うさま凌辱し、苦しめたい衝動にじつとしていられなくなるだろう。私のこの変つて性癖は、幼少年時代のふとした出来事からうけた強い印象が未だに悩裏から去らないという一事に起因する。いわば白への憧憬は、幸多かつた幼時へのノスタルジアかもしれないのだ。

白へのノスタルジア――そうだ、あれは私がまだ小学一年生の頃だつた。私の生家は紀北の田舎町、その田舎町の中心部から少し離れた町はずれにあつた。玄関は表通り、勝手口は裏町の長屋に面していた。箱入息子の通性で私は生れつき気が弱く、学校へ入つても友達らしい友達もなかつたが、それでも長屋の方に男女合わせて三人の友達があつた。父母は表通りの子供と遊ばせようと骨折つたが私はなぜか長屋を好み、お上品な表通りの子と遊びたがらなかつた。

裏の長屋の中、十軒余りは私の父の持家だつた。そんなわけで、私より一つ年上の高田、高田の妹で私より一つ下の小夜子、私と同い年の喜美子、の三人の幼友達は私の事をぼんちやん（坊ちやんの意。家主の息子に対する敬称であろうか）と呼んでくれた。或る日、小夜子と私は二人でべつたをして遊んでいた時、小夜子がふいに遊びを止めて「ぼんちやん、女のおしつこどこから出るか見たことないやろ。見せてやろか。」と大まじめな顔で言つた。私は大して見たくもなかつたが、気が弱かつたのでもし嫌だと言つたら小夜子が怒つて遊んでくれないと困ると思つて「う

ん」と生ま返事をした。
二人は長屋の共同便所へゆき、小夜子はサツと着物をまくつた。ズロースなどはいていない女の子の多かつた時代で、彼女もその例にもれず、長屋の子にしては白い尻が、ふいに私の目にとびこんで来て、私は一瞬クラ〳〵と目まいのするような想いだつた。まるい白い臀部が烈しい印象を与えたのはこの時以来である。
小学二年生の頃だつた。丁度母は隣村へ行つて夕方まで帰らず、父は遊びに来た。高田が喜美子と小夜子をつれてその頃、日夜放蕩に日を送つて家によりつかなかつたので私たち四人の早熟児が秘密の遊びをするのにもつてこいの条件がそろつていた。長屋の子の特質として例外なく両親の夜の行為を竊視して知つていた。四人の中、知らないのは私だけであつた。
高田が「おい××××××んか」と言い出すと私は恐ろしいような気がしたが、弱虫といわれるのが嫌ですぐ賛成した。高田の提案で彼と喜美子、私と小夜子、とコンビがきまつた。喜美子は腺病質で小夜子の健康的な白さとはまた違つた青白い肌をもつていた。
その夜、喜美子がその日した遊びを友達にしやべつたことから長屋中に知れ、私は母にこつぴどく叱られ、灸をすえられ、以後長屋の子と遊ぶことを禁ぜられてしまつたので、私たちの愉快な試みもその時一回ぎりに終つた。小学校も上級になると共に女の子と遊ぶことはなくなり、私の性向も次第に内攻性をおびて行つた。当時はまだ「男女七歳にして席を同じうせず」式の格言が幅をきかせていたのである。その頃、私は自分を虐げることに興味を持ちはじめていた。四年生の時父が多年の結核が悪化して死んでから、母は私を甘やかすようになり、それが私を益々アブノーマルな世界へ追いやる結果となつた。
私は閑さえあれば二階へ上り、同年輩の子供たちと遊ばず一人で種々な空想に耽つた。いつの頃からか私は自分で自分を後手に縛ることを覚えた。今ではもうあんな器用なまねはできないが、それでもキユツと緊る紐の感覚が幼い私の心にたまらない自巳憐憫の情をおこさせ、鼻の先がジーンと熱くなつたのを、はつきりとおぼえている。又、チリ紙を何枚ももんで丸め、肛門にあてがつて、痛いのを無理しておしこんだりした。
当時私の空想の中に現れたのは、四十がらみの、ブクブクと脂ぎつた醜い顔のおばさんだつた。継子いじめの芝居などの影響だろうか、私は彼女を自分の継母だと夢想したおばさんはいつも私の手足を後で縛り、焼火箸を私の体中におしつけて苦しめたり、天井から吊してホーキで叩いたりした。時には私を素裸にして自分も裸になり、私の背に馬乗りになつて部屋中をグル〳〵歩きまわらせたりした。
そんな時私はおばさんの大きなダブ〳〵の大きな尻の下でへしやぎそうになり、重苦しさにハア〳〵いいながら、それでも苦しみだけではなく何かもつと他の感情が体内の血を逆流させるのをどうすることもできなかつた。とう〳〵しまいにはおばさんはその巨大な股でやせた私の体を頭か

らギユーギユーおしつけ、お腹の中へムシヤ〳〵喰いこんでしまうのであつた。私はこうして頭から喰われる時が空想の中で一番苦しく、又一番切ない楽しさを味つた。奇妙な事にはそのおばさんは四十すぎにもなつているのに毛がなかつた。これは幼時小夜子や喜美子と遊んだ時の強烈な印象が未だに悩裏にこびりついていたのかもしれない。三十歳近い今日でも私は女性の無毛に憧れるが、現実には残念ながら見た事がない。

私がその後五年ぶりで現実に裸体を見たのは高等小学校の頃である。動機は銭湯であつた。私たちの銭湯は場末のそれらしく男女の脱衣場間のしきりは極めてお粗末なもので、ちよつと番台の近くで脱衣すると、その気さえあればいくらでも女湯の方が見えた。私は従兄弟の山本や加藤とよく一緒に銭湯へ行つたが、私に〃女湯覗き〃をおしえてくれたのは従兄の山本であつた。私は迂濶にも毎夜銭湯へ行きながら、自分でそれに気付かなかつたのであるが、彼がいつも番台の近くで脱衣するのでなぜだろうと不思議になり、一度自分もそこへぬいでみて始めてその秘密をしつた。その時の驚きと感激は素晴しいものだつた。なぜもつと早く気付かなかつたのだろうと後悔してやまなかつた。ほんの目の前、四、五尺のところに、十何人もの種々様々な白い裸体が、パノラマを見るようにうごめいているのだ。私は私の神に感謝し以後どんな事があつても脱衣は番台の近くと決めた。あゝしかし、私はなめるように上から下まで、気に入つた裸体を見まわして行つて或る一点まで行くと屢々失望して慌てて眼をそらさねばならなかつた。たとえその部分が手拭でかくされていても、その下にあるものを想像せねばならぬのは耐え難い苦痛だつた。勢い、私は同年輩、又はそれ以下の女体を求めねばならなかつた。それもずつとかけ離れた小さい子よりは、もう思春期寸前の、同年輩の女の子をみるとたまらなかつた。もしあのまゝ、ずつとそのまゝで大人になるのだつたらどんなにか美しいだろう。と果てしないロマンチツクな空想を描くのだつた。

こうした私の夢を満足させてくれる女の子が一人いた。私と同い年で、後年長屋小町と騒がれた浅子という美しい顔立ちの娘だつた。彼女は顔だけでなく、肌も私の最もすきなまつ白な大理石のような肌で、それが湯上りで上気してホンノリとうす桃色に色づくのを私はこよなく楽しんだ。しかもおあつらえ向きに彼女は、たいしてかくしもせず、ぬぐ時も着る時も平気で男湯の方をむいてまともにゆつくりと鑑賞させてくれた。ポツチリと、僅かにふくれ上つて彫刻の花びらのように固い乳房、そして問題の場所は、私の好みに、従つて神秘的な美しさをたたえていたのであるその頃、私は自瀆することを覚えはじめたが、その時の空想には、きまつて全裸の浅子が登場した。私はもう以前のようなマゾヒズムの傾向がなくなり、代つてサジズムの兆候が表れはじめていたから、チリ紙をにぎりこぶしぐらいに丸めて、それを私の目の前に無抵抗で横たわつている彼女の白い裸体に向かつてグイ〳〵おしこんでいた。彼女は泣いて痛がつたが、それでも私を愛しているので、この風

変りな遊戯をやめることができず毎夜私の空想の枕辺に現れ、奴隷のように哀願するのであるが、私が意地悪くチリ紙をもんで丸め出すと、泣く〳〵全裸の姿態を横たえるのであつた。だが、私の夢も破れる日が来た。或る日私は、浅子にも予期しなかつたものを発見せねばならなかつた。浅子だけは、という私のロマンチシズムはきびしい現実の前に一ぺんにくずれ、幻滅の悲哀が、私の心中をひしひしとおそつて、失恋の痛手に泣きながら、以後女湯覗きの悪習を止めてしまつた。

その後、長ずるに従つて私の白への恋慕は減ずるどころか益々募つてゆき、特に無毛に対する強い憧れは年と共に烈しさを加えるばかりだつた。太平洋戦争中は、周囲の環境のせいもあつて、どうすることもできないまゝにすぎたが、終戦と共に性の解放が叫ばれ、巷間に性に関する書物がハンランするや、私は与う限りの力をつくして、ヴアンデベルデから、がり版ずりの春本に至るまで漁りまわつたしかし、当時旧制M高校の文科生にすぎなかつた私には、いくらも集められず、集つた僅かのくだらない雑誌類の中から、あやしげな裸体写真を探し出しては辛うじて渇を慰していた。極端に内気な私は、それらの書物を買うくらいがやつとで、当時流行りかけたストリツプ小屋など覗く勇気はなかつた。雑誌のヌード写真も、私の一番見たいところは、かくしてあるか、さもなければ修正してあつたからとてもあの少年時代の浅子の神秘的な美しさには及ぶべくもなかつた。雑誌の相談欄などに、無毛に悩む女性の深刻な手記を見るたびに、何度かその女性に手紙をかくことを思つたが、相手が仮名ではどうしようもなかつた。それらの数多い書物の中で、最も私を喜ばしてくれたものに、田村泰次郎の〃肉体の門〃があつた。責めの描写の多い事も私の趣味に合つたし、何よりも関東小政が、町子という未亡人を裸にして責める場面が、たまらなく私を刺激した。小政がカミソリをもつて、柱にしばりつけた町子の裸体につめよる数行は、幾度か私を恍惚境へ誘い込んだことであろう。いつそ真白くしてしまえばよいのにつまらない横槍が出て町子がゆるされるところは、小説としてならいざしらず、私にとつては蛇足も甚だしいものであつた。書物の外に、私は偶然ある機会から、幾枚かの写真の乾板を手に入れた。その殆どは、私にとつて何の興味もなかつたが、たつた一枚だけ、珍味おくあたわざるものがあつた。それは西洋の少年と少女のもので、丁度幼い日の高田と喜美子のあの戯れが今まさに行われようとしているところを撮つたものであつたが、その部分が修正されず、はつきりと出ていた。私は暗夜寮友のねしずまつた寄宿舎の一角で、ずい喜の笑みをたたえながら、ひそかに何枚も〳〵焼まししておいたが、惜しくも、他の蒐集物と共に、寄宿舎の火事で灰燼に帰してしまつた。その頃、寮友の中で、近くのD温泉うらの、遊廓へ通うものがあり、私も誘われて二、三度行つたが、正常な行為に興味を持たぬ私は、いつも失敗し、失望して帰るばかりであつた。ところが或る日、○○楼の某女はパイパンだ、という噂がとんだ時には、いつも

消極的な私も目の色をかえた。教えられて〇〇楼へ上り、その女と対面するや、私は恥かしさで真赤になりながら「君の…………………か」。と言つて見た。女は笑いながら「デマよ。うすいだけなの」。といつた。私はいたく失望したが、それでも彼女が素直に………くれるので、…………………私は夢中で………………女を驚かせた。それだけ、他に何にもせずに高い料金を払つて私は帰つて来た。その後もう一度行こうと思つたこともあつたが、私が夢中で接吻した時に女が「変態ね、あんた。」と言つて笑つた言葉が忘れられず、又本当の白一色でもなかつたので行きそびれてしまつた。

今の妻と結婚してから私は、始めて正常の行為をおぼえそして一年程は幸福であつた。妻は美しく、私を愛してくれたし、私も過去の悪い夢はすつかり忘れ去つてしまつたかのようであつた。だが、子供が生れた頃から、私の本来の反逆性が頭を擡げ始め、日毎懊悩が続いた。或る夜、私は遂に妻にすべてを告白し、私の異常性を認めてくれと懇願した。世間なみの典型的な恐妻型であつた妻は一言の下にニベもなく私の願いをしりぞけた。曰く「私はあんたみたいな変態じやないわ。」私は絶望的に幾度か「剃らしてくれ。縛らせてくれ。むりはいわない。せめてその腋の下だけでも無くしてくれ」。と懇願したが、妻は「あなたはあなた。私は私。あなたの変態趣味に私までまきこまれるなんて、まつ平だわ。」とそつ気なかつた。今、私達は離婚寸前まで来ている。妻は、「あなたがあくまでもそのくだらない変態をつゞけるのなら、私は離婚するよりほかないわ。責められて私までがマゾになるより、死んだ方がましだし、死ぬよりは離婚する方がもつといいわ」。とはつきり言つた。私も一生に二度とない大きな失敗——無責任な結婚について妻に申しわけなく思い、再出発のつもりで離婚を考えているが、離婚してもこんな醜い、働きの無い私のような男に、果して同じ性癖の妻を迎える事ができるかどうか遅疑逡巡し、未だに腐れ縁を続けている。私の家の塀一つへだてた隣に、私の従姉に当る未亡人が住んでいる。私の妻にくらべると、顔もずつと醜いし、人間としてもはるかに劣る。ところが、たつた一つ、彼女が私をひきつけるものがある。それは、かつて見たD遊廓の某女のように彼女も薄いのだ。私は今、毎日夕方になると塀のすき間から彼女の行水を覗いている。これがせめても私の渇を医してくれるのだ。

以上、私の平凡な告白記を何一つかくさずに記した。この手記が活字になるかどうかは私の知つたことではない。だが、もし活字になるとすればその時こそ、満天下の誌友諸姉よ、私は古川裕子氏のように声を大にして叫びたいのだ。誰か私のような者にでも責められてみようという人は居ないか。私は渇えている。誰か私に白へのノスタルジアを満たしてくれる人は居ないのかと。

（以上）

縄に憑かれて

時山加代子

私は十九の年、家を出てから、ほんこの間国へ帰つてくるまで大阪の毛織工場で寄宿舎へ入つて織姫として勤めていた。突然そこをやめて両親のところへ帰つてきて、まだ半年も経つていない。貯めたお金も少しはあるし、それにあと一月程すれば失業保険金も貰えるから当分遊んでいても困らないんだけれど、私の身体にしみついた都会の味はこんな田舎町の場末で駄菓子屋の二階借り暮しは辛抱出来ない。私が二年間勤めた工場をやめたというのも私が自分の身体に体験した異常なこの青春の思い出の為だとしたら一体どうしたらいゝのだろう。女ばかりが目じろ押しに喧噪な織機の音の中にひしめいていたこの間までの生活が走馬燈のように私の瞼にうかんでは消えてゆく。私が若しまだあのまゝ工場に勤めているとしたら、いくら編集部の方の頼みだつてこんな文章を書く勇気はない。でもやめてみると、あの当時の事が何事につけてなつかしく思い出されて自分からペンをとつて見る気になつた。

高いコンクリートの塀に囲れた殺風景な工場の中を幅一

パジヤマなどという気のきいた寝巻きは持合せていない私、勤めに出だして二年目の現在、春秋二回、新調した富士絹地の純白のワンピース一着、秋の訪れにウール地に灰色のツーピース一着に並んで、チヨコ色のハイヒール、これが二年間の私の所産、現在、寝巻きはお嫁に行つた姉さんのお古、枕一つ、二階の六帖一間に姉弟四人と父母と私の五人の雑魚寝、今年は雨が多くて涼しいんだけど、それでも七月ともなれば暑くてやり切れない。

十になる弟の薄汚い足が私のシユミーズの辺りに投げかけられる。それにつれて新制中学三年生の妹の政代、私よりか色白でぬめやかな肌、小高い三角形の肉丘のテントのようにシユミーズを支えた二つの乳房、そのふくらみの尖端にほんのりと色に染んだ乳首、その他、更に幼い妹弟たちは実に無雑作な姿態の中に寝息を立てゝいる。

むし暑く寝苦しい夜のひととき、私はじつと眼を見開いたまゝ、工場での出来事が次から次へと頭に浮かんできて眠れない。

米位の川が流れていて寄宿舎の窓からはシユミーズやズロースの洗濯物が風にはためいているのだけがさすがに女ばかりの世界のなまめかしさを漂している。一棟の工場には数台の織機がずらりと並んでいて各織機毎に〃台持ち〃という経験四年以上の責任者と、その裏側に〃裏廻り〃という補助者。それに私達のような二十才迄の〃織(はた)の子〃と呼ばれる素人工が二人。これだけで一台の織機を動かしている。織(はた)の子の仕事は切れた毛糸をつなぐのが役目。

早番は朝五時半から午後の二時半迄、晩番は午後一時から十時までの二交替。これが一週間毎に替ることになつている。一日中立つたまゝで織機の廻りをうろ〳〵していると足がだるくて夏なんか、どこの部屋で出番でない人達のシユミーズ一枚の大根足の行列。寄宿舎は十五帖の牢屋のように細長い部屋に九人、それこそ見事な程の目じろ押し

お昼の一時から二時半迄の一時間半は早出と晩出の両方の女工が重なるので工場の中は急に賑やかになる。真面目な人は台についているのだが、通いの世帯持ちや後家、或はオールドミス等の齢のいつた人達が若い織の子を掴まえて男との閨房の経験談を露骨に話すのもこの時間で、私達が恥しがつて顔を赤めたりするのを面白がつてきわどい所まで手ぶりおかしく得意になつて話す。そんな時、〃いやだ、いやだ〃と言い乍らも一番熱心な聞手に廻るのは色気づいたばかりの私達織の子、そして、そんな話に興がのつて、やんやと囃し立てた挙句、お乳とお尻の特に大きな私を寄つてたかつて無理に抓つたり擽つたりする。

台についている時でも御不浄への行き帰りに、後を通りながら手を伸して私のお尻のむつちりした上をぷちんと抓つていく。そんな時挙げる私の頓狂な悲鳴を聞いて、ゲラ〳〵と得意そうに笑う。私は裸にされたように恥しくつて真赤になると、附近の人達が卑猥な野次を入れてはやし立てる。〃いや、いやらしい事ばつかしして！〃と私は云い乍らも、何か皆から注目されている自分の立場に面映ゆさを感じて抓られたあとが痛いながらも快い。もつときつく抓られてみたい。

私の組の台持ちは富さんのいう二十五になる出戻り娘、猥談の名人で勤続六年という人気者、色が浅黒くつて強靭そうな四肢がすばしこい。富さんは特にそんな事が好きなのだろうか、とりわけ執拗に私をからかつたり苛めたりする。私は他人から自分の自体に触られるのが擽つたくて耐らない。自分でもそんな時は全身に鳥肌が立つのがわかるでも富さんには工場に入つた時から世話になつているので出来るだけ辛抱していたら、擽つたがる私を面白がつて工場の隅へ追いつめて、腋の下を擽つたり、お尻や太腿を抓つたり、ハア〳〵息をはずませて動けなくなつた私をベニヤ板に押しつけてとんでもない所へ手を差し入れてもがき苦しむ私を見て喜ぶ。そんな事を毎日繰り返えしている中に、自分の身体を他人から弄れることにほのかな悦びを感ずるようになつた。

晩番が終つて帰ろうとして、富さんとしめし合せた三人の台持ちさんに追いつめられて材料の倉庫の原毛のフゴの

上へ押えつけらて無理矢理私の秘密の場所をすつかり暴れたときの羞しさ。何故彼女たちは私にだけそんなに興味を持つのだろうか、それ以来、もう一度あんな手籠めのように目に合せられないかと、恐ろしい中にも甘酸い期待があつて毎日工場へ出るのが楽しみになつた。今日はどんなにして苛められるんだろうつて。

そんな或る休日の日、ふと町の書店で手にした奇譚クラブという雑誌、その変つた内容にひかれた。こんな雑誌もあつたのか。私の現在の心持をそのまゝ現したような内容特にその中の「縛られた女の写真」には、ぎゆツと身を締めつけられるような衝動を感じた。お小使の中からその写真一組をゆきつけのお好焼屋のおばさんに頼んで取り寄せた。

その写真を見た時の私の驚き、今迄私の知らなかつた未知の世界が急に後光をさして眼前に展開したような気持。何度見かえしてもその時の私の身体の奥底から湧き上つてくるような胸の疼きは忘れられない。私はその写真を御不浄の天井と棟木のすき間にかくして時々秘かに行つては眺めた。私の特に気にいつたのは、胸に二廻りばかりきつく縄が巻かれ、後手が首すじ近く迄高く上つたポーズ、両足は揃えて横に投げ出されお臍の上と下に大きなくびれが二つ、私はそのぺこんと凹んだお臍がとても好きで、自分もこんなにして縛られてみたら、どんなにいゝだろうなアと空想してそのモデルの人が羨しくなつた。

今迄向い寮だつた富さんが私の部屋の室長になつた時は本当に驚かされた。その晩から彼女は私の蒲団の横へぺつたりと自分の蒲団をくつつけて、消燈時間がくると早速、私の蒲団の中へ身体をすべり込ませてくる。同室の者に〝うるさいツ〟と叱られるので、暑いのに蒲団をかぶつて、私は富さんからいろ〳〵の知らない事を沢山教えられた。

私が一番最初に嚙まされたのは顎だつた。私は肥つているので、二重顎のようにしやくれているのを、前歯できゆつと思いきり嚙まれる。〝痛い！〟というと富さんは掌で私の口を押えて、顎から頬に喰いついて離れない。そして一方の手で私の身体を撲る。「ムムム、、、、」私は口を押えられる苦しさと、嚙まれる痛さ、それに撲つたさ、思わず呻めく。

顎から頬、そして首頸から肩、肩先は力一ぱい嚙まれても余り痛くはないが、紅葉のような歯型をお風呂へ行つてかくすのに困つた。白い肌にブツブツと赤く血のにじんだ歯型、お友達に〝あなた、これ、どうしたの？〟と聞かれた時は、蚊にさゝれたあとだとごま化したけれど、私はなんだか気が気でなかつた。歯型が肩から胸、乳房、下腹へとだんだん下つてくるにつれて、もう私は単に掌で口を押える位では、洩れる呻めき声をこらえる事が出来なくなつた。同室の人達は昼の疲れでぐつすり眠つているからいゝようなものゝ時折、咳払いや寝返えりを打つ音等がしてドキリとさせられた。そんな時は枕カバーをむしり取つて自分で口の中へ押し込んだ。

こらえる痛さと呻めくに呻めかれない息苦しさ。上下の

犬歯のとがつたのが肌に喰い込むときの身体中にじんと響く疼き。富さんはさんざん私の身を噛んだり抓つたり擽つたりした挙句、「時ちやんの肌は肉づきがよくて、やわらかくつて本当に食べてしまいたい位」そういつて朝まで私を離さない。そんな時私は、自分の身体を〃どうかして、どうかして〃と心の中で悶える。さすがに口に出しては云えないが燃え上つた身体はどうしていゝかわからない。富さんにつけられた二つの腕と太股の痣は最初は赤くなつて次には青くなり、次第に淡黄色となつて消えてゆく。そんな痣を私がお風呂でかくしきれなくなつた頃、私と富さんの仲が人の噂にぼつ〳〵上るようになつた。同性愛だと囁やく人もあつた。

しかし富さんにはれつきとした恋人があつたし、私が富さんから受けるものは一般の人達が考えるようなものではなかつた。でも、私は男を愛すると同じ程度に同性も愛せるという気持があつた。何んとはなしにだが。

秋になつて奇譚クラブの編集部へ出した私の手紙が二月号の読者通信に載つて、私が生れて初めて手にした沢山の未知の男の人達からの手紙。それは一まとめに厚手の大きな封筒に入れて転送して下さつたからいゝようなものゝ、あれだけの手紙を一通宛送られたとしたら、人の噂に敏感なところだけに人眼について大変だつたろう。不思議と女の人からのは一通もなかつた。皆言い合したように縛らせてくれという内容、中には自分の写真や詳しい経歴を書いたものもあつた。若しこれがたつた一通であつたとしたら或は私はそれからの自分の運命がどのように変化したとしてもその男の人の許へ行つていたかも知れない。でも、こんなに沢山のお手紙、こゝへ返事を貰つた時の事を考えると便りを書く勇気がなかつた。そして日が経つていつた。その手紙の束は大切に行李の底へしまつて、休みの日、同室の者が外出した暇に出しては繰り返えし読んだ。読むだけでもほのかな愉しさがあつた。今でも私の手文庫には手垢に汚れた手紙の束が大事に保管してある。

私は富さんに縛つてほしいと思つて、擽られる時、故意に抵抗して、彼女が怒つたら、そんなら私を動かれないように縛つたらよいのに、と云つて扱帯を出したが彼女は冗談のように笑つて本気にしなかつた。そして私は淡い失望を感じた。

お嫁入道具にと、箪笥やミシン、ラジオ等を競争で買うことが流行して、只さえ狭い部屋が荷物で一ぱいになつて同室の人眼を盗んでする私達の遊戯も困難になつてきた。私は雑誌を読んだり写真を見たりしているうち、自分も編集部へ頼んで責めのモデルになつてみようかと思つたりした。自分の裸体ががんじがらめに縛り上げられて、男の人達に見られたら、そしてその写真が沢山の男の人達を喜ばせることが出来たとしたらどんなに素晴しいことだろう。肉体には自信があつた。

時たま、外出して荒物屋の店先に麻縄がぶら下げてあるのを見てドキリとさせられた。まだ一度も本当に男の人に縛られたことのない私。何故このように縄を見て胸さわぎ

がするのだろう。縄が眼の前へ飛び込んでくる時、私の心をぎゆつと無言の威圧で締めつける。

富さんは気性の強い女だつた。私や彼女が工場をやめなければならないようになつたいきさつも、一つには彼女の気性の強さからきていると思う。桜が散つてまだ間のない日曜日の事だつた。富さんは例のように恋人に逢うために外出した。私は友達と映画を見に行つて夕食迄に帰寮したが、晩くともいつも門限ぎり〳〵には帰つてきた彼女が門限の十時半を過ぎても帰つて来なかつた。私は心配して表門の近く迄行つてみた。正門の横のくぐり戸は閉められて守衛所にも人影はなく淡い電灯がぽつんと一つついているだけだつた。ひよつとしたら？　そう思つて、私は材料倉庫の裏手、川が工場内へ注いでいる塀際迄行つてみた。

と云うのは、富さんは口癖のように若し門限に遅れたら川を潜つて帰つてくる。と言つていたから――。月は雲にかくれてあたりは暗かつた。ほんこの間迄花が咲いていた桜も今は葉ばかりになつて塀に沿つて風は揺られていた。その桜の稍すれ〳〵にコンクリートの塀越しに包みがぽいと向う側からほり込まれた。

ころ〳〵と叢の中へ転つてゆくのを私は走り寄つて拾つた。やはり想像した通り富さんのワンピース、ハンドバツグと靴を芯にしてベルトで結んである。暫くして川の注ぎ口から髪までびつしより濡らした富さんが這うようにして川岸へ上つてきた。ズロースがべつたり肌について雫が立ち上つた足下にぽと〳〵と落ちている。私は自分のハンカチで彼女の背中を拭いてやりながら、自分もこんな激しい恋をしてみたいと思つた。

まだ十分乾ききらない肌にワンピースをつけて濡れたズロースを脱ごうとしている時だつた。材料倉庫の横から太い男の声がした。「誰だツ、そこにいるのは？」「あツ」私が驚いて声を出すのと靴を両手に持つて富さんが塀沿いに走るのと同時だつた。

その晩のことは私としては別に大したことでもなかつたが、富さんがやめるというし、自治会で根堀り葉堀りいろんなことを聞くので私もうるさくなつて、さつさと止めてしまつた。会社では人手のない時だつたから、といつて引き留めて呉れたが、辞表を友達に預けたまゝ飛び出してしまつた。

寝苦しい夏の夜のひととき、私の空想は次から次へと趣せて尽きるところを知らない。私は弟妹たちの寝姿に眼をやつて、明日は町へ出てみようかと何んとはなしに考えていた。

ミシンを踏む女

三条卓史 作・画

「おばちゃん、これ、ブルマーに縫って」
ある日、私は黒い朱子の布と、五センチ程の幅の、白いゴム紐とを持って、裏の小母さんの処へ行った。
小母さんは、縁側近くのミシンの前で、白い割烹前掛の縫い端の糸を、小さな手鋏でチョキン、チョキンと切っていた。
「そうだ、もうすぐ運動会だったわね」
と小母さんは笑いながら、膝のまわりの白い布を押しやると
「清ちゃんの腰廻りはどの位だったか知ら、ちよっとこちらへいらっしゃい」
と、傍らのメジヤーを持って私を呼んだ。
この小母さんはおせんさんといって一年程前から、うちの長屋に住んでいた。
この家は私の家の丁度裏手にあって、最初物置にしていたものを、おせんさんのために、少し改造したもので、二人のいる処から、狭い庭（といっても空地のようなもの）を隔てて、私の家の道具倉が見える。粗末な造りだけれど、奥まった、ひっそりとした住居であった。
おせんさんは、この長屋に一人で住んでいた。年の頃は三十一、二で、色の白い、小造りの美しい人であった。主人はいるのだが、ダム建設の人夫頭とかで、年に一、二度帰る位であった。私の母の遠縁に当るとかで、時折私の家へ来て、母といろいろ話しをすることもあった。
おせんさんは、スカートの上から私の腰廻りを計ると
「ずい分大きくなったわね。もう中学三年になるの？　清ちやんは大柄だから、まるで大人の寸法よ。股下の寸法を計るから、ちよっとスカートを上げて……」
と微笑みながらいった。
私は一瞬たじろいだが、立ったまま紺サージのフレヤーのスカートの裾を両手で持って

擦り上げた。
「ずい分大きくなっているので、ぐるりと計って見ましょうね」
おせんさんはそういうと、私の横へ寄って足の間へメジャーをすーッと通して引き上げた。そして
「股割り六〇センチじゃ、少しきつすぎるようね」
といいながら、何回も計り直した。
丁度、その時、台所口の方で
「こんちわァ、八百屋で……」
というご用聞きの声がした。おせんさんは慌てたように私の傍を離れた。

○

その翌日、私はおせんさんの家へブルマーを貰いに行くと、丁度入口の傍に荷台の綱を解いたままの自転車が置いてあった。
私は誰が来ているのだろうかと、一寸入るのをためらったが、その自転車の後の泥除に、白いエナメルで「中田被服店」と書いてあるのを見て、――なアんだ半物屋のおじさんか――と心で呟やきながら格子戸を開けた。
中田被服店は、おせんさんにエプロンやサロン前掛などの縫製を頼んでいる店で、赧ら顔の小父さんが、大きな張りぼての竹籠に仕立物を積んでこの家へ出入りしているのを二三度見かけたことがあった。
「おばちゃん、ブルマー出来た？」
といいながら私が入って行くと、ミシンの前へ腰を掛けているおせんさんの姿が、一瞬中田のおじさんの影にかくれた。いや、おせんさんの後ろにいたおじさんが、私の姿を見て咄嗟に位置を変えたように思われた。
「あら、清ちゃんだったの？」
おせんさんは、中田のおじさんの向うから首だけ出すようにして、ちらりとおじさんの顔を見たが、
「裁ってはあるんだけど、おじさんの急ぐお仕事があったので、まだ縫ってないのよ」
そういって眼を仕立物の方へやった。花模様のプリントのサロン前掛が、ミシンの下の辺りに散らばっていた。
「済まないけど、夕方来て呉れない？　それまでには縫っておくから……」
「ええ、じゃアそうする」
と、私は何だか私自身がきまりが悪いような気持ちでそのまま外へ出た。何だか見てはならないものを見てしまったようで、顔がほてっていた。
私が何気なくおせんさんの足許を見た時、おせんさんの形のよい、白い足の左右の親指が、鋳鉄製のミシンの踏み板の桟に、細いプリント布の切れ端で結び留められているのに気が付いたのだ。
――あれは、小母ちゃんが結んだのじゃアない。自分で結ぼうとすれば、どうしても結べない筈だ――そう考えると、いつもミシンを踏んでいる時には、両手をテーブルの上に置いているのが、その日に限って白いその手が見えなかった。
私は家へ帰ると、家人に気付かれないようにそっと倉へ入った。ギイーと内扉を引くと暗い闇である。手で周囲を探るようにして南の窓辺に近付いた。その倉は道具倉で、古い箪笥や夜具戸棚や、屏風を入れた箱などが入っていた。私は手探りで隅の小抽出しのついている木箱を抱えて来て窓の下に置いた。高い窓を覗く足台にするためである。私は出来る限り蝶番のきしむ音がしないように、少しずつ開いた。
背伸びした私の眼に蒼い空の色が映った。少し苔のついた瓦屋根と、板びさしとが映った。そのひさしの下は縁側で、縁側のすぐ近くにミシンがあった。私はまるで怖い物でも

見るような気持で胸が騒いだ。

ミシンの向うにはおせんさんが腰を掛け、そのすぐ後ろに、中田のおじさんが立っていた。おせんさんの足指は、矢張りミシンの踏み板に結び留められていた。真黒なタイトのスカートが、少し開いた二本の足の膝頭を覆っている。そこから上はミシンのテーブルに遮られて見えなかったが、ユの字形のミシンの機械の向うにおせんさんの胸があった。純白なブラウスの短かいフレンチ袖からずんなりと伸びた両腕の上膊部に、花柄の平紐が喰い入っていた。無論、両肱から先は見えない。花柄の平紐は、サロンエプロンの紐として、昨日おせんさんが長く長く縫っていたものである。

中田のおじさんは、おせんさんの後ろで、その花柄の紐を手繰っていたが、やがて束ね終るとおせんさんの顎へ両手を掛けて静かに後ろに引いた。おせんさんは仰向けになり、何かいっているようだったが、二人とも声は聞えなかった。おせんさんの身体は腰を腰掛けに乗せたまま弓なりになり、倉の窓からは太鼓の皮のようにピッチリ張ったタイトスカートのお腹の辺りが微かに見えるだけであった。私には、中田のおじさんが、どうしてそんなひどいことをするのか訳が分らなかった。また、おせんさんも、おじさんのそんな仕草に対して、なぜ強くはねつけないのか不思議に思われた。そんな事を考えている時、中庭の方で母の呼ぶ声が聞えたので、私は急いで倉の窓を閉めると、そっと中庭の方へ出て行った。

日が暮れてから、おせんさんが私のブルマーを届けて来た。母と上り框で笑いながら話しているおせんさんの、昼間平紐の喰い込んでいたと思われる二の腕を、それとなく見たが、その時は、肱近くまで袖のあるワンピースを着ていたので、それを確かめることができなかった。

◯

それから一週間ほど経った或る日、おせんさんが、顔色を変えて母の処へ来た。おせんさんの亭主がダム建設の現場で、大怪我をしたのだそうだ。おせんさんは母から旅費を借りると大急ぎで出て行った。何でも黒部の峡谷とやらへ行くのだそうだと母がいっていたが、十日ばかり過ぎた頃、おせんさんは、白い布で包んだ木箱を抱えて、しよんぼりと帰って来た。

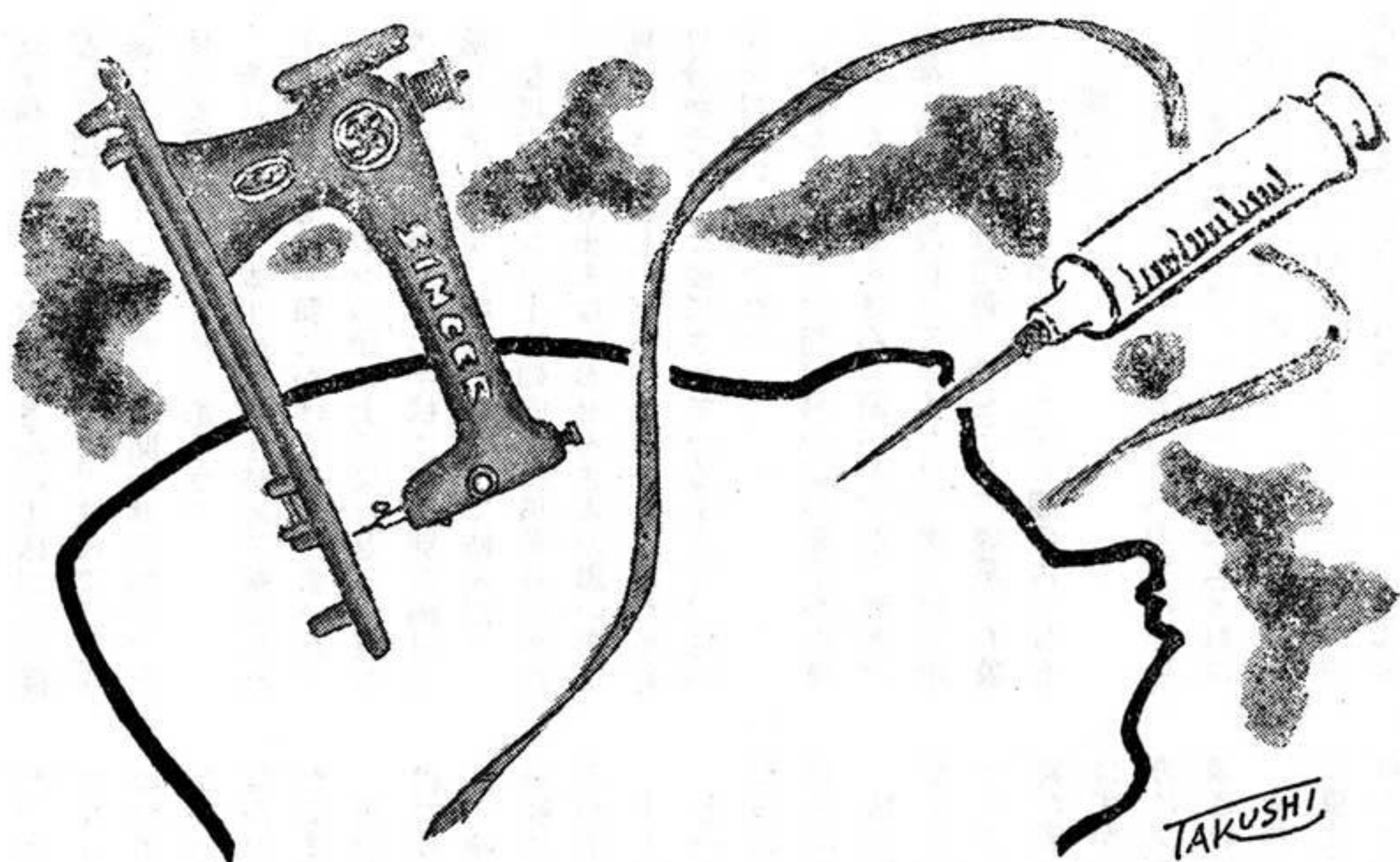
やがて夏も過ぎ、軒下に吊されていた盆提灯も取り外されて、すすきの穂の揺れる初秋がやって来た。

おせんさんは一生懸命仕立物に精を出すようになった。中田のおじさんの代りに、若い男の人がリヤカーで裁断した布を運ぶようになった。私はその後も何回か、こっそりと倉の窓から覗いたが、おせんさんはいつも独りで一生懸命ミシンを踏んでいた。

或る日、私は夜中にふッと眼が覚めた。便所へ行って帰ろうとすると、廊下の隅に置いてある金魚鉢を、見た事のない野良猫が狙っていた。私は「シッシッ」と、声を掛けたが、猫は庭の沓脱石の処で眼を光らせて去ろうとしない。私は庭履き下駄を突っ掛けてその猫を追った。月が蒼白く中天に懸って、あたりはしんと静まり返っていた。

ふと気が付くと、私は何時の間にか倉の前に立っていた。私はその時、何かのものに憑かれたように倉の扉を開けていた。

おせんさんの家の縁側には腰に硝子の嵌った障子が閉って、部屋の中にはまだ灯りがついていた。夜業をしているのか知ら――と思いながら窓の鉄扉を閉めようとした時である。

障子に影絵のように映っていたミシンの影

に重なるようにして一つの人影が現われた。障子の蔭なので顔は見えなかったが、頭の髪の形や、肩のいかり工合で、中田のおじさんである事が直感された。私は慌てて窓枠にしがみついた。

その男の影は、右手に捻じ廻しを逆に持って、その柄でミシンの頭部に立っている糸巻き棒をコンコンと五六度左右から叩いて、左の手で抜き取った。

――なアんだ、ミシンの修繕をしているのか――と案外に思ったが、そうではなかった。男の影が消えると、入れかわりにおせんさんらしい女の影が映った。その影は動くたびに大きくなったり小さくなったりした。影がミシンの頭へ片手を触れた時、男の影が後ろから映って、女の腕に手を掛けて後ろに廻した。男の口の辺りから、細い紐の影がゆらゆらと揺れている。男は片手で女の手首を後ろで握ると、もう一方の手を女の胸へやった。女が二三度上体を揺すっている間に、その手は器用に上衣のホックを外し、腕へずらせて、手首を持ちかえる拍子に、するりと脱がせてしまった。

男は口に咥えていた紐の端を手に取って、女の両手首を背で縛った。それから、その端を胸へ廻して、ふっくらと盛り上った乳房の上下を二巻きして後ろでぐいと引いた。それからが大変である。

男はおせんさんを抱くように、腰掛を足場にしてミシンの上へ立たせた。それから後ろの紐を引いて、そろそろとミシンの頭を跨がせるのである。おせんさんは、膝を曲げ、腰をミシンの頭の上に落す。タイトのスカートが膝からずり上ってミシンのプーリーの所でたくれている。男は女の足首を握ってテーブルの両側に伸ばす。おせんさんは、両手を後に縛られたまま、ミシンの上へ馬乗りにされたわけである。

まだこれだけではなかった。男はおせんさんの両足をミシンの下で縛り合わせようと引ッ張っていたが、テーブルの幅が広いか一緒に引付ける事ができない様子であった。男の影が一たん消えると、今度は長柄の箒を持って現われた。それをテーブルの下に通して、今度は思い切ってその両端に別の紐で左右の

足を括り付けた。おせんさんの上体が二三度左右に揺れた。テーブルを膝で挟んで安定を保っていたその膝を竹箒で開かせられて、上体の安定を失ったためであろう。

男は今度は日本手拭の端を結んで輪にしたようなものを女の顎にかけて後ろへ引いた。女の上体はミシンの頭の上で反り返り、腹が大きく波打った。その手拭に、又別の細紐を通してテーブルの脚に引き付けて結んだ。

私は、ミシンの上に仰向けに馬乗りにされて、身動きも出来ないおせんさんの黒い影を見て、さぞ苦しいだろうと思った。あたかも自分がそうした姿にされているようで、足がすくむ思いであった。

それから暫らくの間、男の影が障子から消えていた。おせんさんの頭がかすかに動き、腹部が異様に波打っているだけであった。中田のおじさんは座敷に腰を下して煙草でも吸っているのであろうか、うすい煙のようなものが漂っていた。

やがて、影が動いて現われた男の手に、半透明の管が握られていた。よく見るとそれは注射器のようであった。

息を凝らして見ているうちに、その一本はおせんさんの影坊師に吸われるように同化した。とたんにおせんさんの影が苦痛を表現してぐっとのけぞり、ヒクヒクとふるえているのがよくわかった。注射器をはこんだ手の影がひっこんだが、その手には何も持たれていなかった。注射器はおせんさんに刺し込まれたままなのだ。私は思わず眼を瞑った。

男の影は更に次の注射器を取り上げると、再びゆっくりとその針先をおせんさんに近ずけてゆく。こんどは針先の狙っているのが、奇妙にくびれて張り出している豊胸らしいことがよくわかった。サッと注射器が動いた。

——うえッ——

という呻きが、洩らすまいと耐えていた堰が切れたように聞えた気がして、私は思わず耳を掩った。

私が再び顔を上げて見た時、半透明の細いガラス管は、おせんさんの胸の隆起にブラ下って、さっきまでのおせんさんの影坊師を奇異な形に変えていた。黒い影絵だけにわかるはずがないが、最初の注射器も同じように片方にブラ下っているのではないかと私には想像されて自分の胸が痛んだ。

それから間もなく、おせんさんの影が、二三度上下に揺れた。天井から下がっている電灯のコードを外して、その位置を変えたらしく、障子が次第に明るくなるにつれて、おせんさんの影はすーと障子の腰板の方へ下がっていって、そのまま私の視界から消えてしまった。

○

十日ほど経った或る日、おせんさんは母の処へ来て長い間話していた。

亡くなった亭主の遺骨を抱いて実家へ帰るというのである。

おせんさんはいよいよ家財道具を片付ける際、日頃使っていたミシンを私の家へ置いて行った。

「私はミシンはよう使わないけど、清ちゃんが学校で習うようになったら、お稽古用になるでしょ」

母はそういって引き取ったが、

「お部屋には何処にも置き場がないわ」

といって、倉の中の丁度窓の下に置いた。

そのミシンのテーブルの上へあがって窓を開けると、今はおせんさんのいない家の堅く閉ざした雨戸の傍に、赤い鶏頭の花が秋風にゆらゆらと揺れているのがよく見えた。

丁度、あの夜の奇怪な影坊師が揺れていたのを真似ているかのように……。

甲斐と歓びを見出だしている女だった。

自分がいけない女だということを確認したいからというマミの提案が発展して、白い膚に個々の識別の表示をすることにした。愛称がいいという忍には「リリ」と書いた。忍は百合の花が好きだし、面長で瞳の大きな処や口許のはっきりした処がスラリとした体つきと共に百合の花を感じさせるからだ。両腕の上膊部の内側と両の内腿、そして胃の辺りに、私は黒のマジックインキでリリと書きつけた。鏡の前で身を捻ったり爪立ったりして、忍は自己の膚に印された愛称を眺める。

「私は何でもいいわ。でも、なるべく人に見られたら困るもの、恥づかしくて死にたくなるものがいいわ。」

ここでもマミは忍と違っていた。例えば、最近活躍の東浦ひかる嬢のように〝わたし責めて下さい〟と素肌に記すことが、忍には耐え難い屈辱であり、マミには生ぬるい遊びだった。胸に「女奴隷マミ」と横に書いた。腹部を露出して立たせ、縦二行に「私はいつでも縛られています」と黒く書いた。後向きにさせて、ヒップに「撻って頂戴！　いくらでも」と書いた時、私はマミの瞳の輝やきをゾツとする程美しいと思った。赤のマジックで左手首の内側と襟足に、私はMの字をはっきりと書きつけた。女の体の上に、一行に五、六字を書くと勢い細字になって、衣服の隙間から覗く文字は他人に判読し難いだろう。だが、当の女性にしてみれば心の休まる暇がなく、スリルと羞恥の烈しい責めになるのだ。

慎しみ深いマミは決して露出癖を持たないから、プレイではヌードの思いきりもいい割に、肌に文字を記したままの外出で、殆ど下を向かなかった。私にとっては幸いな話で、もしもマミの首筋のMの緋文字が人目についても、恐らくキスマーク位で通っただろう。右手で左手首を握っているマミの、一見淑やかな風情に対して、忍は時折大胆なポーズでリリの文字を確かめようとする。表現に敏感な二人でも、それを嫌悪し通す潔癖な忍の無躾な所作と、それを愛恋し情熱的に反応するマミの、純真そのもののような仕草との対照が、私には何となく信じ難いものに思われた。

奇くが運んで来た女「マミ」は、私と忍にとって、実の姉よりも親しい人になった。忍と一緒に私の嗜虐の対象として悶えてもくれるし、或いは私と忍との両方から罰を受忍することもあり、時には忍を懲罰にかけるための意地悪い女執行人として仕置を買って出ることさえあるのだ。そしてそのいずれもが、少しもぎごちない処を持たず、その役になりきっていた。忍に対する縛りは、外観の変化は乏しいものの、綿密で丹念だった。いたぶりはネチネチと執念深く、必らず忍に涙を流させてくれた。そのようなことは、KKの春日・伊吹のSM名コンビで既に示された女性の特性といえるものだが、マミという女は、私が指示すれば、一寸したヒントでスケールの大きな縛りや責めにも従事してくれる女だった。マミのそういう実態を紹介する機会もいずれ巡って来るかも知れない。

マミと忍はパンティ一枚で背中合わせに坐り、それぞれ相手の腹部に廻した後手を縛られ、更に組んだ足首を括り合わせた縄が首を巻いて上体を前屈みに強いる。つまり絡み合った海老縛りの女二人を眼の前にして、私はKKを愛し、しみじみと幸せを味わうことができるのだ。

《終り》

受難記

と
と
中村良子

　昭和三十五年十月の始めの事です。ラストバンドが、ラ・クンパルシーターを奏して居ります。ホールのお客は今日もちらほらで淋しいのですが、私の受持のボックスでは初めてのお客で、三十過ぎの官吏らしいキザなお客に同僚の亜矢子さんと一緒に先程からうんざりして居ました。

　知ったかぶりの音楽、美術、映画等の話でしきりに気勢を挙げ、二人共大分酔っているのか、態度がだんだん露骨になり、今まで背中に手をやっていたのが、肩にしなだれ掛って来ました。

「さっきから思って居たんだけどね、君の顔は女優の左幸子に良く似てるね」

「あら、そうお」

聞き流しました。すると向いのソフアの亜矢子さんのお客が

「いや、その一寸冷たいところが、アメリカのアンバクスターに似てるよ」

「それは、どうも有難うございます」

「アハハハ……」

　二人は声を揃えて高笑いしました。

「ハハハハ、いや本当だよ君、アンバクスターに、そっくりだよ」

「いやボクは左幸子に似てると思うね」

　私のお客が肩を引き寄せ、私の顔を覗き込みました。

「うん、そりゃ似てると云えば似てるけどねえ、うーんそうだね、二人をちゃんぽんした顔だね」

「あらそうお、女優さんに似てるってば、私は美人って訳ね。それはどうも有難うございます。さ、どうぞどうぞ」

　おどけた声で私も調子を合せ、ビールを差出しました。

「アハハ……」

「ところでボクはね、君の目が一番魅力があると思うね、目がいい」

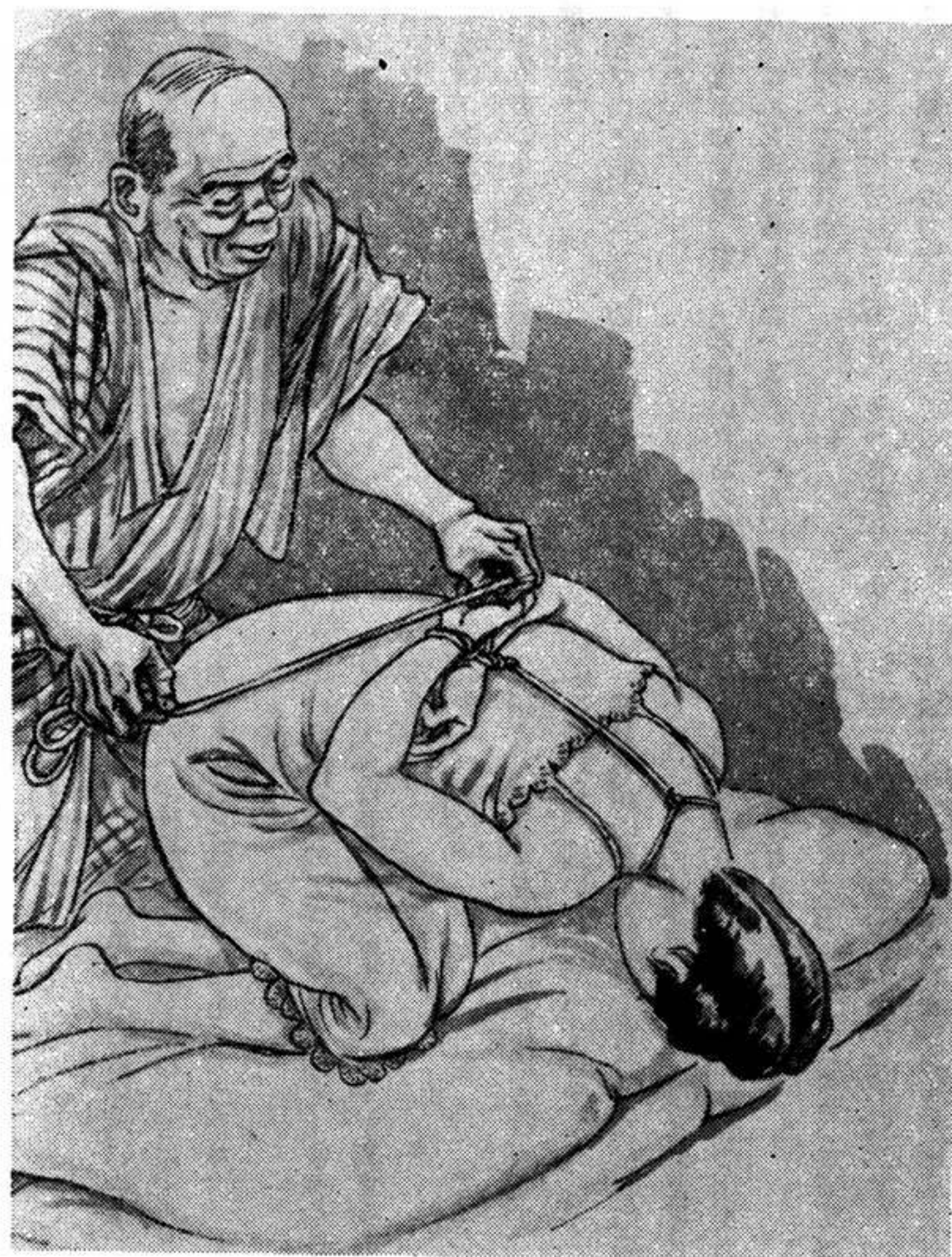
「そうかね、ボクはね、目よりも此の娘の魅力はね」

　私の横のお客は、そう云ったかと思うと、私の肩を片手で強く抱き締め、手を延ばして私の鼻をキューッと摘まみました。

「いやーん」

「この鼻だよ。ハハハハハ」

「いや、いや、離して頂だい。いやーん」
鼻声を挙げて、振り離そうともがきましたが、強く摘まんだまま離しません。
「痛ァーい」
「ハハハハ、成る程、君は鼻が一番いい」
「嫌々、そんなひどい事、嫌」
やっと手を離しました。
「いやよ、そんなの」
私はプンプンおこりました。
「そうおこるなよ、まあ機嫌なおしに一パイ飲めよ」
私は出されたコップのビールを一息に飲みました。
「お見事お見事。君、上を向いた時の鼻の穴が、これ又素晴らしいね、もう一ぺん、一寸上を向いて呉れよ」
「いやよ、何云ってんのよ、さっきからいやらしい事ばっかり」
「そう云わずに。ほれ、そう暴れたら駄目だよ。おい君、顔を起して呉れないか」
向かいのお客に声を掛け、私の両腕を摑んで後へ捻じました。
「痛ァーい。いやーん、いやーん」
向かいのお客はニヤニヤしながら、俯向いた私の顔を両手ではさんで仰向けました。
「いやいや」
「うーん、この娘の鼻の穴の恰好はいいね。ハハハハ、性的魅力を感じるね。では、ボクもおもむろに摘ましてもらおうかね」
「いやいや」
いやがる私のアゴを片手で抑え、ゆっくりと、大きな手で私の鼻をギューッと摘まみ上げました。
「アハハハハ」
摘まんだまま左右に動かし始めるのです。
「いやいや、痛い、いやってば」
怒り心頭に発した私は、有りったけの力を出して、お客に体をぶっつけ、摑まれた手首を思い切り振り離し、向かいのお客の手を力一ぱい引っぱたきました。
「済まん済まん。そうおこるなよ。大分まわってるんでね、まあカンベンして呉れよ」
本気でおこった私に二人は謝まり始めました。ふと私は、自分の腕を見ますと、私の腕時計のガラスがわれて居るのです。テーブルにでも当ったのかしら、耳に当ててみると音は正確に刻んでいます。私の時計は、型も古く、値段も安い物ですが、かなり狂いの少い時計だったのです。
「時計、どうも無かったのかね。ガラスだけかい？ そう。ところでどうだい、いい時計を買ってやろうか、そんな古臭い時計じゃ君の様な美人に似合わないよ。ええ？ 但し今晩これからボクとつき合って呉れたらね」
冗談とも本気ともつかない態度で云います。侮辱されたように感じた私は、きっぱりと
「お断りします。帰って下さい、もうカンバンです」
ピシャッと止めをさしました。
私は時計を腕から外し、ハンケチに包みました。ああ、この時計が、今夜これから、一生心に焼つけるような災いの原因になろうとは、夢にも思いませんでした。
私は帰り支度を済ませホールを出ました。福原口の停留所で市電を待ちましたが、仲々来ないので兵庫駅まで歩いても知れてると思い、歩き出しました。そして永沢町を少し過ぎた頃、腕時計のガラスの事を思い出しました。ちょうど四、五軒向うに小さな一軒の時計屋があり、未だ店をあけて居りました。
私はその時計屋の店へ入りました。入れ違いに美しい女の人が出て来ました。主人らしい、三十五、六の小柄な陰気な感じの男の人が只一人、カウンターの上の散らばった女持

ちの腕時計を整理して居りました。
「あの、このガラスを入れて下さい」
「はい、いらっしゃい。一寸お待ちになって下さい」
主人は私の手から時計を受け取り、隅にある仕事台の前に坐り、ガラスの沢山入っている箱を取出し、合せ始めました。手持不沙汰な私はぼんやりカウンターの上の散らばった女持の腕時計に目を落しました。こんな良い時計を持てたら、今日のお客にあんな事も云われないのになあと、莫然と考えた時、魔がさしたというのでしょうか、指先の直ぐ前の

俗に云う南京虫の時計が大きく私の心を捕えてしまったのです。やはり女は虚栄の動物なのでしょうか。自分の手をほんの四五寸動かせば手に取れるのです。主人は、合ったガラスがないのかまだ出来ません。私は顔を上げたまま右手をじりじり動かしました。指先に時計が触れました。「大変な事をしかけている、いけないいけない」そう良心は叫んでいるのですが、遂に私は悪魔の囁きに負け、時計をつまんで、そっとハンドバッグの中へ滑らせてしまっていたのです。ああ、とうとう私は盗みを働いてしまったのです。
その時、主人は立上りました。私は悪い事をしたという自責からまともに主人の顔が見られず、下を向いたままハンドバッグに手を入れ、努めて冷静に云いました。
「お幾らですの?」
主人は、黙って散らかった時計をケースに並べ始めました。私の頭から血の気がスーッと引いてゆきます。並べ終ったケースの中には一個分の空間が出来ています。
「えーっと、七千二十円頂きます」
「ええッ?」
「七千二十円です」
「何の事です? そんなに」

「南京虫の代金とガラス代です」

「何の話です。それは？」

　私の態度に怒気を表わした主人は、

「白っぱくれるな。このケースにキチンと入っとった時計が、この通り一個足らんやないか」

「そ、そ、それがなぜ私が盗った証拠になるんです。失礼な」

「おい、おとなしいに下手から出たらええ気になりやがって、そんな綺麗な顔して、図々しい奴やな。おいそのハンドバッグをこっちへ貸してみい」

「な、なんの権利があって女の持物を調べるんです。本当に失礼な」

　所詮及ばない事とは知りながらも突っかかって云い返しました。

「まだ強情張る気か、えーおい。おとなしいに謝ったら勘忍したろ思てんのに。ようし、そしたら云うけんどな、あすこの仕事台の上にはな、お客さんを仕事しながらでも見えるように小さい鏡が置いてあんのや、その鏡で今さっきあんたが盗ってハンドバッグの中へ入れるんを見たんや」

　ああ、知らなかった。見られていたとは、まさか。主人は腕を延ばしてハンドバッグを引ったくり、時計を取り出しました。

「どうや、これでもまだ白を切る気か」

　私は観念して必死になって謝りました。

「済みません、本当に悪い事をしました。つい出来心でやったんです。済みません、許して下さい」

「おい姐さん、あんたは万引の常習やろ。今までもちよいちよいやっとったんやろがな、ええ？」

「いいえ、いいえ違います。初めてなんです。つい出来心でしたんです。本当に出来心でやったんです」

「嘘つけ。図太い奴やお前は。警察へ行こう今店を閉めるからそこへ掛けて待っとれ」

　警察！　私は目の前が真暗になりました。私が警察の厄介になれば、家の者は、近所の人は何と云うだろう。どんな事があっても、どんな事をしても、警察問題にされたくない。そうだ、どんな事をしても。

　戸締まりを終った主人に半泣きになって、すがりつき

「ね、お願いです。許して下さい。警察だけは勘忍して下さい」

「そんなら、このまま帰してくれ云うんか」

「いえ、ぶつなと蹴るなと、あなたの気の済むようにして下さい」
「アホな事云うな、女をなぐって何になるねん。とにかく警察へ行こう。そしたら初めてか常習かわかんねん」
「本当に初めてなんです。お願いです。警察だけは許して下さい。他の事だったらどんな事でもしますから」
「どんな事でも？　ふーん、どんな事でもなあ？」
主人は、私の頭の先から足元までジロリと見下しました。
「あんたの商売は、何やねん？」
「ダンサーです」
「ふーん。今あんた、どんな事でもする云うたなあ？」
「ええ、許して頂けるんでしたら、どんな事をされても構いません」
「本当に構へんねんな？」
「ええ」
「よっしや、そんならあんたの望みで、あんたの体を自由にさしてもらうで。もしそれが嫌やったら警察へ行くだけの話や」
「いえ、どんな事でもされますから警察だけは」
「姐さん、あんたそない云うけんどな、わいがどんな酷い事しても、いやらしい事しても嫌がれへんねんな？　云われた通り何でもするねんな？」
「はい」
「今云うた事忘れたらあかんで、なあ」
「はい」
罪人の汚名から逃れる為には一夜の苦痛を耐え忍ばねばと、私は覚悟しました。
「そしたら、座敷へ上れ」
私はホッとしました。主人の案内で通されたのは六畳の客間でした。直ぐ隣の四帖半の部屋に机、椅子、タンス等が置いてありますが、なぜか女気が全然ありません。
「わいは一寸帳面するさかい、ふとん敷いといってくれ」
と、押入からふとんを引張り出しました。私は客間の卓台を部屋の隅へやり、床を敷き電燈を小さい球に切替え、暗くし、服を脱いでシュミーズ一枚になり、ふとんの中へ入りした。天井を見つめながら（私の家の者達はもう寝ただろうか。私が帰らないので心配して居るのではないだろうか。明日の朝、帰った時どう云い訳しよう。いや、そんな事より今夜これからの事）私は不安と観念の入交った気持で、隣の部屋に耳を傾けました。しばらくして、パタンと帳簿の閉じる音がして、それから寝巻きに着換える気配がしました。私は体を横にし、ふとんの端で顔をかくして体を固くしました。無言のまま、主人が近づいて来ます。
枕元に立つと、ふとんに手を掛け、体を滑り込ませて来ました。私は一層体を固くしました。主人はそーっと私の体を後から抱き締めました。ぞーっとするものが、背すじを走ります。しばらく抱いていたかと思うと、そのまま私の背中を押して俯伏せにし、いきなりふとんをめくり上げ、私の背中の上にどっかと馬乗りになりました。
「うーん」思わずうなりました。それから両手を摑まれ、後にまわして捻じ上げられ、背中の上で手首を組台せられました。何時の間に用意したのか細紐を取出しました。あっ、縛られるのです。私を縛り上げ、体の自由を奪って、どんな目に逢わそうと云うのでしょう。〝怖い〟思わず手を引込めました。
「おい、嫌がるんか？　さっきどんな事でもされる云うたんと違うんか？　ええ？」
ああ、私は今夜一晩、この人の奴隷なのです。私の体はこの人の玩弄物なのです。諦め

て、両手を背中に回しました。
「もっとしっかり、手首を合さんかい、まだまだ」
細紐が幾重にも手首に巻付き、締め上げられ、しっかりと縛りつけられました。それから、胸に手を廻し私の体を抱き起し、坐らせました。そして別の紐で、二の腕から乳房を回して二巻きして背中で結び、残った紐を両手首の間を通して吊り上げるようにギューッと締め上げられました。
「痛い!」
思わず声を出しました。
「痛いか? ふふ、わいは変っとるからな、その積りでな。さあこっち向いて坐れ」
仕方なく主人の方を向いて坐りました。主人は両手を伸ばして、俯向いた私の顔を両側から挟んで仰向けました。そしてじっと私の顔を見るのです。しばらくして思い出したように手を離し、隣の部屋の机の電気スタンドを外して私の直ぐ前に置き、傘を取り、ソケットに差し込み、パッと点けました。恐らく百ワット位の光で目のすぐ下から照らすのです。何の為にこんな事をするのでしょう。私はまぶしいので目をかたく閉じました。
前に坐った主人は又、私の顔を両手で挟みぐいと顔を仰向けました。そして、ぐるぐるゆっくりと私の顔を回すのです。
「ふふ、何処から見ても綺麗やな。ええ恰好しとる」
ああ、この人も、私の鼻に興味があるのです。手を離した主人はチリ紙を取出し、細く破りコヨリを作り始めました。両手を後手に縛り上げられ、しかもどんな事でもされると云う絶対的な条件の下に私の鼻の穴にコヨリを差込んで弄ぶ積りなのです。これから後、どんな酷い目に逢わされるのでしょうか。改めて私の心に恐怖の念がひしひしと胸を締めつけて来ました。
私は無意識にあごをすっかり胸にすりつけました。主人は胸を縛った紐に左手を掛けて私の体を引寄せ、抑え、右手に持ったコヨリを鼻先へ持って来ました。先が、鼻孔の入口に触れました。反動的に私は首を振りました。しかし主人は無理をせずに私の嫌がる表情を見るのです。右へ逃げれば右、左へ行けば左と追って来ます。
「うふふ……」
逃げまどう私の姿を充分楽しむのです。
「さあ、もうええ加減にじっとしたら、どないや。ええ? 判っとるやろな?」
ああ、そうだった。
私はどんな事をされても嫌がってはいけないのだった。甘んじて辱かしめを受けねばならないのだった。
私は、俯向いたまま、じっと動かずに観念の目を閉じました。
「さあ、もう動いたらアカンで」
コヨリが、徐々に左の鼻孔に入って来て、穴の内側がムズムズして来ます。小鼻のピクピクするのが自分でも判ります。だんだん奥の方へ入れて来ました。思わずクシャミが出そうになります。すると、コヨリを〝すっ〟と抜きます。そして又、ゆっくりと差し入れて来ます。出そうになると又抜きます。そして今度は左手で私の髪の毛を掴んで引起し、仰向けました。
「あんたの鼻は、ほんまにええ恰好しとるし綺麗やな。ふふ……」
鼻にコヨリを入れ、指先でクルクル廻しながら奥の方へ入れて来ました。ああ、ああ耐らない。
「ハ、ハ、ハクション……」
大きなクシャミが出てしまいました。そして右の鼻孔にも差込んで、クシャミをさせました。

「うふゝゝ……」
コヨリを棄てた主人は、ゆっくりと私の鼻を摘まみ
「柔かい鼻やなあ、ふゝゝ……」
　摘まみ上げて、左右に捻じ上げるのです。
「痛い！」
「痛いか、うふゝゝ……」
　鼻を引張ったり押したり、さんざんもみくちゃにするのです。そして親指を鼻の頭に当て、下から上の方へグイと押し上げました。鼻孔を押拡げて中を覗き込まれます。
「何とも云えん、えゝ鼻しとるナ、えゝ」
　そのままぐりぐり指先を動かします。長い間、穴を見てから髪の毛を離して、そのままどんと後へ押され仰向けに寝かされました。腕が痛い。立上った主人は私の体をまたいでお腹の上にどっかと馬乗りになりました。
「うー、痛い」
　腕が折れそうです。主人は手を伸ばしてシュミーズの肩の紐を外し始めました。恥かしい、主人の目は私の顔を見ているのです。そして電気スタンドを私の顔の直ぐ横に置き、一寸腰を浮かして手を伸ばし、私の鼻を摘まんで引張り上げ、体を少し起こさせ、その間に枕を私の背中の辺りに押込んで手を離しました。それで私の胸は大きく突出し、逆立ちにされたように顔が下になります。しかし、その為腕は楽になりました。すると今度は主人は立上り、私の顔をまたいで直ぐ両側に顔を挟むように各々足を置き、反り上った胸の上に腰を下しました。そして乗ったまま体をゆすぶるのです。乳房が押しつぶされそうです。
「うゝ、痛い、うー勘忍して下さい、うーうーうー」
　けれども主人は容赦なく私の苦悶の表情を笑いを浮かべて楽しむのです。そして更に、棄てたコヨリを拾って私の鼻を押上げ、穴の中に差入れ、鼻孔をピクピク拡がらせるのです。もがこうとするのですが、自由になりません。
「わいが変っとるいう事が判って来たやろ？　ふゝ……。この鼻の綺麗な色はどないや、えゝ、ふゝ……　ほれどないや、まだか、ほれほれ」
「クシャン、クシャン」
「ハハ……うふ……こそばいか？　うーん？　かゆいのか？　そうか、うふ……かいたろかうん？」
　クシャミのため、湿りを帯びた左の鼻孔に主人の右手の小指が突込まれて来ました。
「うーうーうー」
「うふゝゝ、何処がかゆいんや、えゝ？　もっと奥の方か、よっしや、こうか、えゝまだか？」
「痛い！」
　勝手な事を云いながら突込んで来ます。
「うん此処か？　よっしや、ほれどうや、えゝ？　どうや」
　ぐりぐり鼻をほぜくり回すのです。そして右の鼻孔も、左手で撫ぜ廻し、小鼻を内側から摘んでめくるように内側をむき出しにします。
「痛い痛い、離して下さい。カンニンして下さい」
　やっと離してくれました。立上った主人は煙草に火をつけ、一服しています。
　確かにこの人は変っている。普通の男が感じる所に興味を持たず、顔、それも鼻に魅力を感じるのだ。しかも縛り上げた状態で。
　一息入れた主人は私の体を抱き起し、床柱の前に立たせました。そして帯を持って来て床柱に胸を縛りつけました。そして隣の部屋から椅子を持って来て前に置いて坐り、私の姿をじろじろ舐めるように見廻します。ギリ

ギリ縛り上げられ、腕や手首に紐が喰込み痛い。恥かしさと苦痛にゆがむ私の姿態をゆっくり眺めるのです。そして手を伸ばしてシュミーズの裾をめくり上げ、胸に回した帯に差込んで止めてしまいました。

「あゝ」

私は身悶えました。体の自由を奪われた、女性の一番恥かしい姿を、腰をかけて主人は笑みを浮かべながら見物するのです。しばらく眺めてからシュミーズを元通りにして、隣の部屋から紙ハサミの大きなのを持って来ました。あゝ、又鼻を玩具にする積りなのです。主人は椅子に坐ったまま、紙ハサミを手にしてニヤニヤ私を見上げました。

「ねえ、そんな事、勘忍して下さい。本当にもう」

「わいは変っとるから、どんな事してもかまへんか云うとったやろ？　えゝ、かまへん云うたん違うんか？」

「でもそんな事、あんまり」

「そやから、どんな酷い事でもいやらしい事でもしてもえゝかて始めから断った筈やで。まあおとなしいに。ほれ動いたらアカン云うのに。ほら、動いたら余けい痛いで、そう、じっとしとけ」

片手で私のアゴを抑え、紙ハサミを大きく開き、鼻の付根まで押しつけて離しました。
「痛い！」
飛び上る程痛い。予想していたよりずっと痛い。
「痛い痛い。取って下さい、早く早く、辛抱出来ません。痛い、早く」
私は思いきり顔を振り回しながら、鼻声で頼みました。主人はにやにやと私が苦しんでいるのを眺めているだけです。あゝ痛い、鼻が根本から切り取られるように痛い。思わず大声で叫びました。
「あゝ切れる切れる。痛い痛い。助けてえ」
私の声の大きさに驚いた主人は、あわてゝ紙ハサミを取り外し、大きな手で私の口をふさぎました。
「アホ、大きな声を出すな、びっくりするやないかい。山の中の一軒家と違うんやぞ、アホ」
今挟まれた鼻の付根の辺りを指先で触り
「どないもないわい」
口を抑えられた為、大きく鼻で息をしている私のふくらんだ小鼻を指の先で押したり撫ぜたり摘まんだり、そして又、ブタの鼻のように上へ押上げました。
「ふゝ……、何とも云えんなあ」
そう云った主人は、口を近づけ、私の左の鼻孔に〝プー〟と息を吹き入れました。
「うー」
男臭い息が鼻孔に入って来る気持悪さ。それから口の手を一寸離したかと思うと、首の後ろから左手を回し、又しっかりと口を抑え私の首を曲げて仰向けました。
「うーうーうー」
主人の目は、フーフーふくらむ私の鼻孔に喰いついたままです。
「うーうーうー」
やっと手を離しました。とたん大きく開いた左の鼻孔に薬指を捻じ入れて来ました。指が太いので入口を一寸入っただけです。それを無理に押して入れようと、ぐいぐい捻じ込んで来るのです。
「うーう」
私は痛さに呻きました。
主人はそのまま手をぐいと持上げ、更に私の顔を上向け、右の鼻孔を覗き込みます。
「フフフ……、バタバタせんとゆっくり楽しませてもらうで、観念せなアカンで、な、えゝ？ この綺麗な鼻、フフフ……ぞくぞくして来るがな」
身悶え苦しむ私の鼻孔を突っつき回すのです。長い間、いじり廻した揚句、ようやく手を離しました。そして柱に結びつけた紐をほどきました。
「ねえ、お願いですから、もうそんな事、勘忍して下さい。他の事だったらともかく、お願いです。とにかく紐を解いて下さい」
しかし、主人は無言のまま、紐尻をぐいと引張り、椅子に私を無理やりに坐らせ、縛りつけました。
「ねえ、お願いです。縛るのは勘忍して下さい。おとなしくしていますから」
私の云う事には耳をかさず、主人は隣の部屋へ行き、タオルを手にして来ました。
「わいはなあ、おとなしいにしとっても、とにかく縛り上げげんと気に入らんのや。それからな、夜中やでな、一寸静かにしてもらわんとな」
そう云った主人は素早く私の鼻をキューッと強く摘まみ上げ、軽く開いた口へ丸めた紙屑を押し込み、その上からしっかり鼻口をタオルで猿ぐつわをしてしまいました。
「うーうーうー」
「大きな声、出されたら困るでな」
椅子にくくりつけた紐を解いて、立たせ、

胸を縛った紐だけほどいて、後手を摑んで持上げ、椅子のもたれの外側に腕を通して潜らせました。そして、前に回って足首を揃えて紐でくくり、その紐を椅子の下を通して後に回し、後手首に通して、ぐーっと締め上げて縛りつけました。椅子のもたれの堅い木が直接背中に当って痛い。身動きも出来ない位です。もはや、自由になるのは首から上だけです。何か云おうとしても声にはなりません。女性の手足の自由を奪って、映画などに出て来るようにムチで叩いたりする積りなのでしようか。出来心を押え切れなかった罰とは云え、とんでもない人に捕まってしまった。これからどうなるのだろう。これだけ縛っているのにまだ足りないのか、その上、私の首に紐を一巻きして軽く結び、後から回し、椅子の下を通して前に持って来て、その紐尻を手にして私の前に立ちました。

　私は主人の目が恐ろしかった、何だか狂的に感じる目と合うのが怖わかった。だから目を閉じて、反った体ながら俯向いて固くなりました。主人は手にした紐を徐々に引張りました。それにつれて私の顔もだんだん上に向けられて行きます。首が締まります。苦しい。

「うーうーうー」

「ふゝ……。ほれ、もう一寸上向いて、そうそう」

　顔が水平になるまで引き上げられました。

「うーうーうー」

　全身を締め上げられ、悶える術もありません。只、苦しい。その上、主人は私のひざの上に坐るではありませんか。

「うーん」

　私は思わず大きく呻きました。痛い痛い。身動きも出来ずに苦しむ私の表情を笑みを浮かべて見るのです。やっとひざから下りて引張った紐の先を足首に結んでしまいました。そして鼻口の猿ぐつわのタオルを鼻からずり下げ、口だけをしっかり締め直しました。

「さあ、これでよしと。さあーって、どないしたろかな。この鼻をどないしていじめたろかな、この鼻を」

　横に立って、手を伸ばして私の鼻を摘まんで捻じるのです。

「うーうーうー」

　摘まんだまま後に回りました。そして手を離し、体を乗り出してのぞき込みました。そして左手で私のうなじ、あご等をくすぐり始めました。こそばいような、何とも云えない気味悪さです。

「白い綺麗な肌しとるなあ」

「うーうーうー」

　そして右手の指先で、私の鼻の頭を押上げ覗き込みました。

「ふゝ……、この綺麗な鼻へ何を入れたら面白いやろな、ふゝ……、そうや、面白い事がある」

　手を離した主人は店の方へ行き、何やらゴトゴト色んな物を持って来ました。そして又ひざの上に坐りました。痛い痛い。ぎっちり縛り上げられ、猿ぐつわを掛けられ、賜って下さいというように、恥かしい鼻孔を余す所なくさらけ出し、完全に自由を奪われて意のままに鼻孔を弄ばれねばならないのです。

　私が美しい鼻孔の持主である事が却って災いを大きくしてしまっているのです。今度はどんな風に私の大切な鼻を責めるのでしょう。叫びたいけれど、声にはならない。

　以上、ここまで書いて、私はふと考えました。字も下手で判り難いし、こんな事を今まで一度も書いた事もない私の作品が果たして御誌の御気に入るかどうか？　しかしここに書いた事は、実際に私が経験した話だという事だけが唯一つ取りえなのです。文章が下手な為、果たしてどの程度に実感が出ているか自分自身ではわかりません。

　この話の続きはまだまだあり、この二倍位になるでしょう。本格的に鼻孔を責め抜かれるのは、むしろこれからですが、今書きましたように作品価値があるかどうか、結果を見てから続きを書けば、と思います。

〈告白〉

浣腸とおシメとゴムの魅力

水城由紀子

初めてお仲間入りさせていただきます。毎月、皆様のお便りやら、作品を楽しく拝見させていただいておりますが、最近は月経帯や浣腸、おむつカバー等の記事が比較的すくなく残念でございます。

私は平凡なBGに過ぎませんが、高校時代より良く病気をしたせいで、いつの間にかゴムマニアになってしまいました。最初は氷枕や氷のうのゴムの匂いや、冷んやりとした、その感触に惹かれたのが動機でした。やがては月経帯なども、出来る限りゴム布地の大きなものを求めるようになりました。

丁度その頃、ひどい便秘にかかり熱まででる始末で、とうとう浣腸というものを経験してしまいました。浣腸を知った初めの頃は、余りの恥かしさに、よく駄々をこねたものです。病気が永びくにつれて、浣腸される機会も増し、暫く恥かしいながらも、その効果を認めなければならないような心境になった頃には、もう私は挿込便器や導尿まで体験してしまいました。

その揚句が、とうとう軽い夜尿症まで併発して、総ゴム製の大人用おむつカバーの厄介にもなりました。こうした永い治療生活を通して、私は誰にも打明けることのできないゴムとか月経帯とかいう変ったものに対して、興味と、期待を持つ女となってしまったのです。

真新しい黒のパンティ型の月経帯を身につけるときの一瞬――。私はナイロン生地のシャキシャキした肌のすべりを楽しみながら、やがて冷んやりとした替ゴムが肌に直接しっとりと吸いつくように当る時の女だけが持つことが許される或る種の情感を味わいます。身体にそれを当てて鏡の前に立ちますと、どちらかといえば小柄で色の白い私の腰をぴっちりとおおっている、その布片の感触は、他のどんなパンテイやショーツにも増して、自分の気持を満足させるものだと思わずにはいられません。

腿のところをきつく喰込ませているゴム。中心のところが替ゴムのためのふっくらと隆起している、その様子に私は軽い衝動さえ覚

えずにはいられません。やがて、そんな型の月経帯をはいた罪を私は受けはじめます。柔らかく肌になじんだかに思われる替ゴムは、結局、ゴムが厚く大きすぎるために肌になじまず、汗をかきはじめ息苦しさと窮屈さに悲鳴をあげはじめるのです。でも自分の身体の中で今、しっとりとむれて汗ばみ、異様なゴムの臭気さえ放っているという秘そやかな愉しみは、私をして、他の人にない一つのシークレットを持っているという感を深くさせるのでした。

誰かに知られたら、死んでしまいたくなるような、私の月経帯に対する執著。むれたにおいが、外に洩れはしないかという気づかいが、更に一層私をして、その行為が密めごとという感じを深くさせるのです。

私は月のうち殆んど半分以上は、この衣裳をつけ、黒の持つ陰微なコントラストの魅力に酔い、ゴムの放散するあの特有の臭いとにちゃりとしたタッチにおぼれているのです。

それから浣腸のこと――。

初めの頃はイチジク浣腸をされました。これは家で姉の子供もされていたので、恥かしいのと、トイレへ行くまでのお腹の痛さがいやという程度で、さほど肌を露出することもなく、お布団の中へ姉が手を差込んで、そっと促がしながら私にポーズをとらせるので、まだまだショックは強烈であったとはいえ、我慢できないほどのものではありませんでした。

しかし、初めてガラス製浣腸器で浣腸された時の異物感と激しい灼熱感は今迄のそれとは全く違ったものでした。暑かった気候のせいもありましたが、シーツもめくられ、スリップ一枚の肌もあらわな姿で、力を込めて挿入されたあの硝子の嘴管の感触は、私にドキリとした衝撃を与えました。しも、結局はいやいやと大きな声を出しはしたものの、薬液の注入を受けてしまいました。それに続く激しい腸の蠕動と排泄感は、全く未知のものであっただけに、どう対処していいのやら分らず、おトイレへ馳ける途中で遂に粗相してしまいました。

その後、又もひどく熱を出した折には挿込便器が用意されました。この時は発熱のため身体が弱り、その上便通のないため、お腹は膨満感で息苦しくてたまらず、この日だけは浣腸が待遠しいような気分の午後でした。私はそのため素直にゴム合羽の上に身体を横たえました。そして、例によって例のごとき残酷な硝子製ポンプの責苦とお腹の悪魔との斗い……でも、この日は何故か、それらのことも喜ばしく、排泄のあとの爽快感のことを思えば苦痛ではありませんでした。

やがて時満ちて私はトイレへと身体を動かしました。すると何時の間にか姉の手には、白いブリキ製の挿込便器が持たれていたのです。私はそれが何んであるか一見して判りましたので抵抗はしました。しかしどれだけの時間、お腹の中で暴れている悪魔は待ってくれるでしょう。強い排泄の兆候にとうとう負けて身体を開いてしまいました。溜っていたガスの排気の荒々しさと、そのものの押し出されるたけだけしさと、便器を使っているというめくるめく羞恥に、私は馴れず下半身を汚していることも忘れて、泣いてしまいました。スリップもはぎとられ、姉にあと始末をしてもらったまま、私は毛布をかぶって朝まで顔を出せませんでした。

翌日は昨日の苦しさが全く嘘のように、熱も下がり、お腹がぐんとひっこんだような快適な気分を知ってみると、姉に「よかったでしょう?」と、浣腸の効果のことを聞かれれば、「うん」と毛布をかぶったまま私は返事をしてしまうのでした。この日を契機として

私はこの細いせいぜい三〇CCの液しか入らない小さな硝子管と、ブリキできた小さな容器のとりこになってしまいました。

――そして、次には赤ちゃんみたいに、おむつを当てがわれる災厄の日が近づいていました。便秘からくる発熱。胃腸障害とニキビ…何やらめまぐるしい私の病歴は、一進一退でなかなか回復をみせず、やがては浣腸の時に恥かしさのために排尿を遠慮したりしたため、夜中にもらしてしまうことも再三ありました。又、発熱のため悪夢の中でふと何か心地良い気分に襲われて、身体の力を抜いた瞬間、下半身に冷んやりとしたものを覚えて目をさましますと、粗相していたこともありました。下着やシーツを、こっそりと始末しようとしても結局は露見してしまいました。

姉は私のかかりつけの医院の看護婦さんに聞いたからといって、或る晩、私の枕元へ紙包みを持ってきました。私は何を買ってくれたのかと見ていますと取出して大きく目の前で広げられたものは、茶色のゴムの大きなおむつカバーでした。総ゴム製の両脇にホックのついた大人用のものでした。

「今夜からこれ当てて休むのよ」と突出された瞬間、むっとするゴム特有の激しい、きしむようなあの匂いに、私は真赤になって顔をおおってしまいました。

事実、その週には、三回もシーツを汚した罪科があるだけに、強く叱責され強要されると、私はどうしようもなく、仰向けになって赤ちゃんと全く同じようなポーズで、それをあてがわれてしまいました。それからは全快して粗相をしなくなるまで殆んど毎晩、おむつとおむつカバーのお世話になりました。勿論、恥かしい状態になるのは週に二三回でしたが、それが何時かを予測できないだけに、たまに私がおむつカバーをはずして休みたいなどというならば、きつく叱られるばかりでした。あとでは浣腸の時などにも、粗相してもいいなどという理由から、お布団の上にゴム合羽の替りに広げたり、またあてがわれたりしました。

私も又、このむちむちとしてすぐ汗ばみ、強い匂いを放つ大きなゴムカバーの魅力に憑かれてしまいました。そんな私でも月経と重なった時だけはいやでした。数日間も昼間は月経帯のゴム、夜はおむつカバーのゴムにせめられる私の身体は、とても皆さんにはお話できないほど恥かしい有様となり、洗滌を受けたり、パウダーのお世話にならねばなりませんでした。そんな時は洗って干してあるおむつカバーを眺めながら、どんなに自分の病弱さを嘆息したことでしょう。

だが、都合二枚――先に書いた茶色のものとあとから予備にと白色のもの一枚追加――のおむつカバーを長い間使用してみて、私は自分がもうどんなにしてみても、このゴムの魔力（それも浣腸との関連的使用の場合特に強烈）からは永久に逃避できない女に変身してしまっていることを自覚せずにはいられませんでした。

――あの病気以来三年半にもなる今、過去のように病床に伏して、幾日も浣腸や挿込便器、またおむつカバーの世話になるようなことはありませんが、何故か苦しかったあの頃がなつかしくさえ感じられます。何かの機会に女性がそれらのことによって受ける感情と感覚……マニアの変貌してゆくプロセスなどを、卒直にもっと詳細に亘って書いてみたいと思いますが、今はそのゆとりもありませんので遠慮させていただきます。

現在は家を出て六帖のアパートで一人BG生活です。男女を通じてお友達もあり、屈託なく交際してはいますが、いざ一歩つきすすんで、よほどプライベートなことまで打明け

られる女友達、或は恋愛にまで発展していく異性感情というものは私には持てません。それは私にはどうしても守らねばならぬ秘密の城があり、人に見られたら死んでしまいたくなるような夜のアパートの一室での秘密の生活があるからなのです。

今年は今日までに三回、姉の家で浣腸をしてもらいました。姉の家を訪れた時、姉は私の顔色を見てすぐ私の便秘を見抜き準備を始めるのです。私も現在では素直にそれをされるだけの落着きを持ってはいます。しかし、もはやそれは真実便秘をいやす治療としての浣腸であって、ゴムにまみれ、のたうち、匂いにむせるなどという、私のひそやかな性向や、プレイ方式にとっては物足りません。やはり夜更けたアパートの一室で、たった一人でするプレイの真実味の方が私にとっては救いなのです。

私は、自分自身でプレイはできます。しかし、他の人にされたら、などという大それた妄想にとりつかれると、その胸騒ぎを静めてくれるものは、奇クの誌上しかありません。作品や通信を通じて沢山の仲間のいらっしゃることで、どんなに私は心暖められていることでしょう。そういったことに対する感謝の気持も含めて、今日は拙いペンをとった次第です。

皆様と直接プレイするなどということは現実としては不可能ですので、何か私のものをお手にとっていただくことで、間接的に、交流を深め皆様と交歓したいと思います。私のパンテイ、スリップ、おむつカバーや月経帯などよろしかったらお送りします。使用済のものでも洗ったものでもお好みをいって下さいませ。

パンティとスリップは白と黒が主体です。おむつカバーは茶・白・赤の総ゴム、白とピンク、黄のビニール製など。他に総ゴムパンテイ、産後バンドもありますが、月経帯は、黒と黄と白で全部替ゴム付のものです。前開式も二枚ございます。浣腸器とゴムシーツも古いのでよければ差上げます。

これらを、どなたか同好の方が受けとって下さるという連帯感は、私の心をきっとやわらげてくれることでしょう。

秘密を守って下さる誠意ある方や素晴らしい便りやら体験談を聞かせて下さるお方にだけ差上げるつもりでございます。封書にて十日までに必ず到着するように、名古屋中央郵便局止にてお便り下さいませ。お待ち申しております。

水城由紀子

懸賞〔告白、手記、体験〕入選作品発表

女性の羞恥願望を衝く

三木徹朗

教頭がそのことを話し始めたとき、十二人の先生方の示した反応は、それぞれに違っていた。

おばアちゃん先生は眉をよせ、中年の男教師はニヤニヤと崩れた態度を見せた。そして若い独身教師の一人である私は、内心どきどきしながら平静をよそほい、唯一人の独身女教師の平松先生をチラチラと見やっていた。その平松先生は真赤になってうつむいたままであった。

終戦后四年程経ってはいたが、街には進駐軍が幅をきかし、GHQの教育担当官が、まれにこの小さな女子高校へやって来て、教師の女生徒に対する扱いが粗暴だとか、授業中は黒板に字を書く時といえども生徒に尻をむけてはならんなどと勝手なことを言い、それが又ごむりごもっともで通る時代であった。従って教師もいささか自主性を失っていた頃のことである。折柄いつも生徒達の身体検査を依頼している近くの大学病院から、今年の身体検査には研究上、骨盤計測をやらせてもらいたいという申し入れがあったのである。別にそれは進駐軍命令でもなく、単なる大学病院の依頼なので、ことわってことわれないことはなかったが、安い費用で身体検査を毎年やってもらっている手前、何とか生徒達にショックを与えない様にしながら、この申し入れを受け入れられないかというのが教頭の説明であった。

「骨盤計測といっても婦人科の検査をしょうというのではなし、いいんじゃないですか」

と、これは数学の老男性教師N先生。

「そうはいっても、場所が場所だけに生徒達には相当ショックだと思いますよ」と既婚女教師のF先生が渋い顔でいう。

「オヤ御経験がありですのね」

「ええ、ええ、これでも二児の母親ですからね」
「骨盤計測というのは、どんな姿勢でやるンですか」
「そんなこと、この席では言えませんよ」
「じゃ後で、こっそり教えて下さい」
皆がふき出してしまった。
「冗談はさておき、我々男性は骨盤計測なるものがどんなことをするのか知らないのだしそれを生徒達に受けさせていいかどうか、判断がつかないと思います。ひとつ女の先生、どなたかが大学病院へゆかれて、その検査方法をきいてこられて、御説明いただくわけにはゆきませんか」

いつもの職員会議で良識的な発言をするまとめ役のA先生の発言だから、忽ち賛成意見多数となったが、女性側には甚だうけが悪かった。しかし教頭の唯今のA先生の御意見に従うより仕方がないという発言で、それならどなたにこの大役をお願いするかということになったとき、冗談ずきのK先生が半ば本気ともつかず
「それは何といっても生理衛生担当の平松先生でしょう」
からかう様に平松先生を見ながら提案したのである。私はその会議の途中から耳は皆の発言をききながら眼は絶えず平松先生を追っており、このとき見せた平松先生のまさに消え入りそうな態度を見、女性の羞恥にあえぐ姿を、こんなにも美しいものかと思ったのである。
実を言えば私と平松先生とはひそかな恋仲であり、もとより恋愛はきつい御法度の女子高校で、せいぜい一緒に居残りして採点する程度のことであったが、気持はお互に何とはなく通じあっていたと今でも思う。この平松先生の窮地に本来なら先輩の女教師達が助け船を出すべきであったが、恐らくは自分がその役を引き受けるのがいやなのと、若く美しい同性に対する嫉妬からであろう。平松先生は見殺しにされ結局この大役を引きうけさせられた。私はと言えば、おはずかしいことに胸が高鳴り、のどがかわき、とても助け船どころではなかったのである。
「どうするつもり?」
翌日の昼休み、私はとなりの席の平松先生にささやいた。
「だって、仕様がないでしょう。でも男の先生っていやアね」
「僕だけは別でしょ。ところで、いつゆくつもりなの?」
「明日の午后は、授業がないから、明日にするワ」
「僕も一緒にいってあげようか」
「バカ」
たわいのない会話がまた楽しい二人でもあ

った。

翌日、少しおそく迄明日の教材を揃えていると後から平松先生の声がして

「いって来たワ。とにかく相当なものよ」

彼女の言う所によると、普通妊婦等の骨盤サイズを計るには、ベッドの上に寝させて仰向けたり、横向きにしたりして計るのだが、今回の検査では立ったままで計る。それも普通の身体検査と同じく浴衣をきたままでいいという。

「それじゃ、どうっていうこともないじゃないの」

「ううん、それからが大変、胸囲を測るときの様に浴衣の前をひらいて看護婦さんの前に立てばいいんだけど、看護婦さんはズロースを下まで下げてしまうんですって」

「へえ、生徒達おとなしくしているかしら」

「そんな格好で横をむかせたり前をむかせたりして測るの。時間はあまりかからないらしいわ。でも、よく生徒達にいってきかせて、納得させておかなくては無理ね」

二三日前の職員会議の時とはうって変って平松先生は、すっかり落着いている。

この平松先生の報告が翌週の職員会議で行われたが、彼女のはきはきした悪びれないもの言いに、かえって聞いている方が気押されて、にやけた雰囲気にもならず、そして平松先生が単なる研究のためだけでなく将来生徒達が結婚した場合にも役に立つという説明をあっさり承認して結局、平松先生が各教室を廻って生徒達に十分納得させるという条件づきで満場一致で、この大学病院の申し入れを受けることになったのである。

「いやいや、どうなることかと思っていましたが、女性は分らぬものだネエ。あんなにはずかしがっていた平松先生が、ああいう説明をするとはネ」

会議后にA先生が言った言葉が、皆の正直な気持であったかも知れない。

それから平松先生は緊張した面持ちで各教室を廻っていたが、生徒達に心配された動揺もなく説得は順調に進んでいるかに見えた。

「うまくいっているらしいじゃないですか」

「ううん、そうでもないのよ」

平松先生は一寸憂欝そうな顔を見せた。

「何といっても恥ずかしざかりの年頃だから仲々大変よ。特に三年生がうるさいわね」

近くの先生方の耳を意識して平松先生は小声でつづけた。

「特に先生の組に手古ずらせるのがいるわ」

私は三年二組の担当である。本来は私の様な若い独身の教師は、クラスをもたなくてもいい事になっている。それが先輩の先生の長期入院で、いわばピンチヒッターとして、一番むつかしい卒業を控えた三年生を、もたされたわけである。

「玉置ですか」

「御名答」

「玉置が何か言いましたか」

「私が一通り説明を終って何か質問はといったら、彼女立ち上ってね。先生、私達にその様な検査が絶対必要と言わぬまでも、有益であることは分りました。しかし私達に有益なことは同じ未婚女性として先生にとっても有益と思いますが、どうですかって言うのよ。私、返答につまっちゃって、勿論私も検査を受けますって返答しちゃったの」

「…………」

「何をニヤニヤしているのよ」

何もニヤニヤしていたわけではない、作り笑いでもしていなければ、心臓の鼓動がさとられてしまう様に思えたからだ。

この体当り的説得は生徒達のショック防止には役立ったが、いつか教員室に伝わり先生方の間に微妙な波紋をまき起した。あのはず

かしがりやの平松先生が、生徒達の先頭に立って羞恥に堪えながら骨盤計測をうけるという、それだけで職員室にはいとも悩ましい雰囲気がただよって来た。K先生などは
「僕も医者になればよかったな」
真面目な顔で言えば
「おあいにくさま。計るのは看護婦さんですよ」
と、おばアちゃん先生にたしなめられる一幕もあった。その間、平松先生は不思議な微笑をもらしながら一言も言わなかった。あれから十数年経った今、私はふとその頃の平松先生の心境のうつり変りを、首をひねりながら思い起すのである。極度の羞恥は同時に、その様なはげしい羞恥をうけたいという願望ととなり合わせではないのか。それは露出狂というには、もっと微妙で複雑な女ごころではないのか。

さていよいよ明日が当日という日の授業で私は自分の担任の生徒達に明日はいつもの身体検査の時と同じく浴衣を忘れない様にと注意した。ゆっくり教室中を見廻したとき玉置がいたずらそうに笑いながら手を上げた。
「先生、明日の身体検査は、生理日の者はどうするんですか」

教室中が机をたたく音と、キャアキャア声につつまれて、その間に人権じうりんだわの声も飛び出し、私は教壇の上で全く立往生のありさまだった。
「平松先生は、何とか言われなかったのか」
「平松先生は、明日は生理日ではないンでしょ」
玉置の声が鋭くかえって来た。教室が又喧騒につつまれ、私は、ほうほうの態で教室を出た。

教員室へ戻るや私は平松先生をつかまえ、今の一部始終を話して何とか話してもらいたいと詰問する様に言った。顔をやや赤らめながら聞いていた平松先生は
「話してあるンですよ。検査のときに看護婦さんにそう言えば心配ない様にやってくれるンです。先生がからかわれたンですよ」
その様なきわどい冗談で受持教師をからかうなどということは当時の私には全く不可解であったが、しかし同時にこの不思議な心理の持主の玉置という生徒に特別の関心を持たざるを得なかった。教師が受持生徒の中の特定個人に興味を持つのは禁物だが、教師とても人間であり特に若い男性である私は生徒を異性として意識せざるを得ない時もあるのである。

ただ教師としての理性が具体的行動をからくも抑えている時がしばしばあった。実を言えば玉置という生徒には前にも生々しい思い出があった。前の年の秋、運動会がささやかながら開かれた時、折柄残暑のきびしい日で朝から太陽にさらされて皆些かグロッキーになっていた頃、玉置が見物席で崩折れる様にうつぷしたのである。私は意識を失って重くなった彼女をひとりで背負って医務室に運び救急措置を保健婦にまかせ校医に電話をかけた。医務室へ戻ると胸元をひろげ丸いふくらみの一部をのぞかせながら真赤な顔であえいでいる玉置を、保健婦がせっせと冷したり、あおいだりしていた。
「日射病らしいですね」
「そうですか。校医さんが間もなく見えますよ」
私は玉置の胸のふくらみから、あわてて眼をそらしながら言った。間もなく校医が見えたのを機に医務室を出ようとする私へ
「先生、ここに居て」
玉置が声をかけた。自分が医者に診察されるのを、異性の私に見せようというのか。後日機会があって、その時の気持を玉置に聞い

てみたら、思わず口から出たのよと笑っていたが、私には長い間その心理の深層は分らなかった。
「じゃ向うで待っているよ」
　医者や保健婦の手前、私はついたてのむこう側へ行った。椅子に所在なくかけながら全神経はついたての中へ注いでいた。胸に聴診器をあてているらしい様子だったが間もなく
「日射病の様ですね。苦しいかね」
「………」
「うん、熱が高いからね。冷やすより方法はないンだが。若し苦しい様なら急いで熱を下げる為に冷水灌腸という手もあるがね」
「………」
「しかし、ここではいやでしょう」
「………」
「それとも思い切ってしまいますか」
「………」
「うん、それじゃ、僕の鞄の中に消毒したのがあるンだが、ええと、ここの水道は飲めますね」
　保健婦にたずねる声がしてやがてカチカチというガラスのふれ合う音に変った。私は衝立のかげに身を固くしながら、もっと固くなっているであろう玉置の顔を思い浮べ息をひそめていた。
「横をむいて、そうそう……一寸下ばきを下ろしてやって下さい。ええ、その程度でいいでしょう。すぐすむからね。膝をまげて……そう固くなっちゃだめ、口で息をしてごらん。大きく息をして、一寸いきむ様にして、ハイ、もういいですよ」
「これはすぐ出してもいいですが便器ありますね。出したら、もう一本しておきますか。早く熱も下がるでしょうから」
　やがて便器を用意する音がして
「一寸私、となりで煙草吸ってくるから、ゆっくりなさい」
　校医が衝立のこちらへ姿を見せたとき私は
「先生、大丈夫でしょうか」
　と一応の挨拶をした。校医は私がそこにいることを、大して意にも介さぬらしく、煙草に火をつけながら
「もう直ぐ熱も下がるでしょう。そうすれば歩いて帰れますよ」
　と言いながら
「もう済んだかね。済んだらベッドにもう一度寝ていなさい」
　と声をかけた。そして煙草を吸い終るやゆっくりと又衝立の蔭に入った。
　二度目の洗腸を終えて医者が帰り、排泄も終ったのをたしかめて、私は玉置の枕元に立った。
「大丈夫か」
　玉置は手で顔を覆ったまま、何も答えなかった。
　そんなことがあってから私は教壇に立って礼を受けるとき、いつかふっと玉置に眼をやる自分に気がついた。或いは玉置は私にほのかな慕情をいだいているのではないか、そんなことを下宿の二階のつれづれなるまま考えたのは若い教師のセンチメタンリズムであったろう。私の心はといえば、あの一寸勝気でそれでいて私と二人のときは俄かにくだけた態度を見せる平松先生に完全にひかれていたのである。
　さて検査の当日、私は体重測定を受け持った。小数の教師しかいないから、独身教師の私といえども何かを受け持たねばならぬ。身長や体重は一番無難なものであった。胸囲の測定になると、どうしても生徒達の乳房に手をふれないわけにはゆかない。そして冗談に中年の男教師が志願するが大抵は女の先生に落付くのである。又男の先生では生徒達も恥かしがり仲々浴衣の前をひろげぬばかりか、

測定中にも身体をすくめたりして手間どるのである。その他にも眼科耳鼻科内科の診察の結果の記録がある。異常なしの所へ○をつければすむ仕事だが、大抵は眼科耳鼻科はとにかく内科はともすれば生徒達の水々しい裸が見えることもあり、これも又女の先生の手がある限り女の先生の仕事になっていた。

少数の生徒しかいないといっても三百人近くの検査だから医務室には入り切れず、小さな講堂を使う事になった。骨盤計測だけでも医務室をいう意見もあったが、生徒達にかえって異常な緊張感を与えるのではないかというとで講堂のすみを衝立で仕切り、入口にはカーテンを下げて使うことになった。私は先日の検査場の設営を行ない、生徒達を指図して机を運ばせたりしたが、骨盤計測の衝立の中の机配置等は専ら平松先生が指図していた。時々生徒達が

「いやだわ、こんなところで」

などと口ごもる声がすると

「何でもないですよ。すぐすむし、私もちゃんと受けるンですから」

と平松先生の、しゃんとした声がかえって来た。

私は体重計をその衝立のすぐ近くにおき体重測定の終った生徒が次には骨盤計測を受ける様に配置した。その位置は衝立のかすかな隙間から骨盤計測の様子がちらちらとうかがえる位置である。生徒達のはずかしがりようもさることながら平松先生がその立派な言葉に反して、どの様な羞恥にもだえた様子を見せるか私は胸のときめきを禁じ得なかった。

当日、私は体重計の前で生徒達が入ってくるのを待って雑談していたとき平松先生が、看護婦二名を案内して来てカーテンをわけて衝立の中に入った。間もなく先生は看護婦を中に残して出て来た。或いはスカートやシュミーズをまくったままの姿勢で計測を受けたのかと一時どきりとしたが、時間から見てそれは単なる案内であった様だ。やがて一年一組の生徒達がズロース一枚の上に浴衣を着て前を合わせながら、どやどやと入って来た。一年生とはいうものの満でいえば十五、六のいわば女らしさのめっきり出て来る年頃で、この様ななまめかしい姿は仲々見ごたえがある。講堂の別の隅に設けられた同じく衝立でかこった内科検診を終え、更に眼科耳鼻科を終えて胸囲にかかる頃から生徒達の声は、だんだんやかましくなり

「あら、先生、くすぐったいワ」

「何を言ってるの。さア、しゃんと胸を張って――」

「いやだわ、先生、早くして」

「宮島さん、七五・五、ハイ、つぎ」

こんな調子で体重測定になる頃は、生徒達も大分口が軽くなっている。

「後藤さん、五四・○キロ」

「あら、そんなにあるんですか。いやだわ」

「大分ふとったな。おしりぶとりだろう」

「先生、大きらい」

後につづいている生徒達が、キャッキャッと笑う。

いつもなら、こんな調子で終ってしまう身体検査も、この後に骨盤計測を控えていてはとたんに無口になってしまう。おそるおそるカーテンの隙間から中をのぞきこんでいたりしたが、いつの間にあらわれたのか平松先生に五、六人が一緒に衝立の中へ、おしこまれた。

私は後の生徒の体重測定をつづけながら時々衝立の隙間をチラチラ見やったが、生徒達の華やかな浴衣や看護婦の白衣が見えかくれするだけで様子は殆んど分らなかった。しかし時間がたつにつれ浴衣の前を開いて神妙に立っている生徒や椅子に腰かけて何やら生徒

の腰のあたりに計測器をあてているらしい看護婦の様子がおぼろげながら分って来た。

始め看護婦の方に正面むいて立っていた生徒が測定が済むと今度は横を向いて別の測定を受けているらしい。最初の測定ではこちらからは後姿だけしか見えないが、横を向くときは右を向く生徒と左を向く生徒とがあり、右を向く場合は入口のカーテンの方へやや体がむくせいか右を向く生徒が少い様である。そして左を向く場合には当人達には気づかないが私の位置からは、ひよっとすると、はっきりと彼女達の全身が眼に入るのである。浴衣の前をひろげ、その下にはズロース一枚だけの姿を見せながら横をむいた生徒に看護婦が職業的な無造作さとすばやさでズロースに手をかけ腰骨のぎりぎりの所まで一気にずりおろす。その時の生徒達のある者は蒼白な顔で、ある者は真赤な顔で、そしていずれもしっかりと眼を閉じて、この堪え難い羞恥の洗礼を必死にこらえていた。

午後からになってあとは三年生だけというとき、平松先生が青い大柄な模様の浴衣の上に帯をしめて入って来た。生徒達も他の先生方も一瞬しんとして平松先生を見やったが、そんな一同に眼もくれずカーテンの前まで真直に歩いて来た先生は、そのあたりにいた三年生四、五人の背中を押す様にしてカーテンを押し分けて入っていった。私は体重測定の生徒達に何気なく一服つけるよと言い、さりげない風に、衝立の中が見やすい位置をとった。

青い大柄な花模様がゆれ動いて平松先生が左を向いたとき私は息をとめた。純白のズロース、その上の固くしまった乳房、そしてこの時だけはやや遠慮がちにズロースに手をかけた看護婦が、それをそろそろと下へ下ろした時、やや身じろいだが、やがて気をとり直した様にしっかりと浴衣の端をつかんで開いたまま鈍い金属色の丁度水牛の角の様な計測器が当てられるのを懸命にこらえているらしかった。ただ平松先生は生徒達と違い、その大きな眼をしっかりと見開いていたのを奇異に感じたことを今でも記憶してる。それからしばらく経って私の受持の組の生徒達の番になったが、玉置が体重計を下りながら

「先生、のぞいちゃだめよ」

小声で言った時、私は胆を冷やした。何気なく冗談を言ったのか、それとも私の位置がのぞき見に適していることを承知で言ったのか。

玉置が計測される頃を見はからい、私はわざとそちらの方をじっと見つめていたが、玉置は左を向き、そして平松先生よりはむしろ豊かな肉付きをもった裸身をこちらへさらしながら、思いなしか、かすかに微笑している様にさえ思われたのである。

それから数日后、学校からの帰り途、あとから小走りに追いかけて来た平松先生が

「三木先生、私、知っていたんですよ」

と、いたずらそうに笑いながら私の顔を見上げて話しかけて来た。

「何のことですか」

内心どきりとしながら、ききかえす私に

「衝立のかげから、先生がのぞき見なさったこと」

「…………」

「だから私、わざと、そちらの方へ向いたんです。……私、やせてるでしょ」

私は、とっさに返す言葉がなかった。私の無言の反応をゆっくりたしかめながら、平松先生はひとりごとの様に話しつづけた。

「本当のこと言いましょうか」

私はいつか停留所を過ぎて平松先生と並んで歩きつづけているのに気付き、生徒に見つかるとうるさいぞと、ちらと思いながら裏通

りの喫茶店へつれ込んだ。
「本当のことを言いますとね」
平松先生は、コーヒーをかきまわしながらつづけた。
「玉置さんが、あの日、控え室で私が浴衣に着かえているときに来て、三木先生にお気をつけあそばせ、のぞき見されますよと忠告してくれたんです」
「なるほど、でも玉置がどうして、そんなことを言ったんですかね」
「蛇の道の蛇ではないんですか」
めずらしく平松先生が、くだけた口調になっていた。
「先生も蛇ではないんですか」
と冗談を言いながら、あの日、玉置もあるいは意識して左を向き浴衣の前を開いて、私の眼に裸身をさらしたのではないかとふっと思った。そして以前に玉置が日射病で倒れ、医務室で冷水潅腸を受けた時のことを何気ない口調で話し、玉置はその様な羞恥に対する願望をもっているのではないかと言うと、大きくうなずいて
「あり得ることですわね」
平松先生は実は自分にも、少しそんな気持がある様で心配だと、つぶやく様に話し出した。それでなければ、たとえ生徒がどういおうと自分からすすんで、あの様なはずかしい検査を受けるはずもなく、又先生の眼を意識しながら、わざとそちらを向いて浴衣の前を開いて、やせっぽちの裸を見せるわけがないというのである。
「私のそういう気持は、先天的なものでなく後天的なものの様に思います。というのは女学校五年のとき、生理不順で母につれられて婦人科に行ったことがあるんです。勿論始めてでしたが、大体はどんな診察があるかは知っていました。ですからゆく迄は、とてもいやだったんです。それで、いやいやながら行ったんですが、はじめに問診があって、それからじゃ一寸だけ診察しましょうといって先生が立上り、看護婦さんが、どうぞこちらへと検診台のあるところへ案内し、下穿きおとりになって下さいと言われたとき、そのまま逃げ出したいと思ったんです。でも眼をつむって下穿きをとり、言われるままに台に上りスカートとシュミーズをまくられたときは無我夢中でした。娘でしたからでしょうが、器具などもそんなに使われず、ただ肛門に指を入れられた時のへんな気持と、お医者さんの手がさわるたびに、はずかしいよりはどうにでもなれといった様な力の抜けてゆく様な感じを、今でも覚えていますわ」
「………」
「その時の診察の結果では、単純な発育不全で、そのうちによくなるでしょうとのことでしたが、別にホルモン注射をするわけでもなかったので、お医者さんの方は、それきりになってしまったんです」
「でも、それ以来少しずつは良くなって来ているものの、未だに完全ではなく時々狂うんです。そんなとき又お医者さんへ行って見ようかなと思うんです。あの女学生時代のはずかしい記憶がむしろなつかしい様な変な気持なのです。私って少し変態かしら」
「別に変態とは思わないが、でもこんな話を僕にするのが変態かも知れないですね」
「あら、それを喜んで聞いているあなたこそ変態でしょ」
二人は声をしのんで笑った。そして
「私ね、二三日中に大学病院の婦人科へゆくのよ。この前、骨盤計測のことで大学病院へ行った時に、応待に出た講師の方に、帰り際に生理不順のこと聞いてみたの。そしたら二十三にもなって不順なのは、どこか異常があるのかも知れない、一度おいでなさい診察し

てあげますっていわれたの。その時は診察なんて特に大学病院では大勢インターンなんかがみるんでしょ。真平だと思ったんだけど、骨盤計測を受けたとき、ふと又そんな羞恥に身をさらしたい衝動を感じたの。だから、その先生から骨盤計測の協力についてのお礼の電話がかかって来たとき、私診ていただきたいんですが、いつがよろしいですかと口から出ちゃったんです。その結果報告は、あなたも興味あるらしいから、いつか話してあげるわ」

それから二人は冷えたコーヒーをすすり別々に喫茶店を出た。

しかし、その興味ある結果報告は永久にききそこねた。二人の心の交流が急激に、その日から深まったことは事実だが、態度に出すのは極力セーブしたつもりだったにもかかわらず、生徒達の便所に二人名前の相合傘がかかれる様になっては、教頭も一言注意しないわけにはゆかなかったのであろう。こうして二人は親しく口を聞くことさえ、はばかられたのである。

こんなある日、平松先生が学校をやめ結婚すると教頭から聞かされた。私は腹の底からこみあげるいらだたしさを抑えかねて、平松

私の生活断片

生尿（いきにょう）

花原竜子

イキニョウと読みます。詳しい製法は省略いたしますが、これは月のものの前日又は前々日位から、その期間中の女王さまの尿を主成分として、これに九穴から分泌する体液を調合加味し、特殊処理により脱臭滅菌精製しました液体に純粋葡萄糖（市販の葡萄糖を一度溶解して結晶させた薄紫の氷砂糖）を加えて熟成した薄紫色の透明な美しい液体で、ポットに入れて灯にかざしますと、まるで正倉院にある御物のはり器を水にとかしたようにキラキラ輝く優美さは、とても尿が原料とは信じられません。

一種の妖しい芳香と甘美を持ち、ごく微量の酒精分を含有しております。非常な手間と時間がかけてありますので、飲料としては全く貴重で高級なものです。

男ドレイを肉体的に組みしいたり、いじめたりするだけでは、私の征服欲はいらだつだけで満足感には至りません。もっと徹底的に征服したいのです。そうかと申していわゆるSのように、むちを加えたりする興味は全然なく、そんな野蛮なことはいやなのです。精神的S傾向と自分では考えています。精神的に完全に隷属させたいのです。ひとりの大の男、それも立派な社会的地位のある男を、私の泌尿器管の付属部品以下の存在にして、徹底的におとしめたいのです。

私を神としてあがめる男に絶対的に君臨することによって、はじめて私の征服感は満足いたします。何という恐ろしい女かとふと思うこともありますが、どうすること

先生に、結婚しても子供が出来るんですかとか診察結果はどうでしたとか、せいぜい皮肉をいってみたが、彼女は微笑したまま答えなかった。いよいよ今日かぎりでさよならという日、私の所へ挨拶に来て

「先生のおかげで、学校へ出てくるのがたのしかったわ。先生と趣味が合ったのですものね。ウフフ……」

と久しぶりに笑顔を見せ、最后に

「玉置さんに深入りしてはだめよ」

真面目な顔で言い足早に去って行った。

私は急に学校へ出る情熱を失い、翌年の春玉置達を卒業させると同時に教師をやめてサラリーマンになった。

玉置はと言えば、ある工場のBGになり、事務関係をやっていたが父親の停年退職もあり一家が田舎へひっこすため彼女だけがその工場の女子従業員寄宿者へ移った。そしてサラリーマンとなり、既に教師といううきずなから解放された私と時々会う機会があった。

今はもうあれから十余年の年月を経たことでもあり、玉置とはごくまれに会う機会があるが、昔の想い出話をし、お互に軽い刺戟を味うに過ぎない。羞恥願望、それはやはり若さの所産であろうからである。

も出来ない強い力が私をかりたてます。

私の排泄物を原料とした生尿は、一種いいようのない芳香を放って、男ドレイを魅了します。彼の体内に流れこみ、全身に行き渡り、その五臓六腑はもとより、瞳の紅彩の中にも、舌の内部にも脳髄にも入りこんで内部から彼を征服してゆくのです。

彼の性格の弱い一つ一つの細胞に浸入していった私の生尿は、ただちに、その細胞核に君臨します。単に肉体的に私にくみしかれているだけではなく、全身全霊を総あげして私に組みしかれているわけです。

一時間余、私の全身は征服感に燃え上り武者ぶるいにも似た快感におののきます。音楽には<勝利>の伴奏がともないます。奴レイは被征服感に陶酔し、今はスタミナも使い果し、生尿のアルコールに上気しながら、虫の息で私の膝下に呻吟しております。これでプレイは終りますが、そのすばらしい一時間半を御想像下さい。

私の勝手な考えですが、世間の普通の男女の愛が、動物的な単純なものに思えて魅力がありません。私の場合は、確かに献身的な愛、宗教的にまで高められた崇拝があり、人間にしかない愛の型ですし、生物として最も進歩した愛の形式ではないでしょうか。

肉体的には単に若くたくましい女性が、社会的地位のある四十男を、膝下に組みしいているというだけの現像でしかありません。そこには信じられないくらいの豊富な内容があります。信じていただけないかもしれませんが、私はまだ男を知りませんしまた知りたいとも思いません。

男奴ドレイは目下二人ですが、普通の交際では学問的にも趣味の上でも、私はこの上なく尊敬しております。ただその時だけは女王と豚になってしまうのです。生尿はまるで麻薬のように、ドレイの血液の中から生尿がきれると禁断症状を呈します。まるで飼主に離れた犬か猫のように、心細くたよりなく、恋しさに、泣くと聞かされています。与える回数は月三回で、それ以上はどんなに恋しがっても絶対に与えないことにしています。他人にも自己にもきびしく律するのが女王としての、私の性格なのでございます。

縛った経験を語る

★第四回讀者座談會★

日　時　八月二日(日)午後六時

場　所　料亭カドヤの二階

司会者　辻　村　　隆

出席者（敬称略）
垣　内　豊　三(42)会社員
木　南　　要(38)商店主
川　岸　　守(30)工　員

本誌側　家　原　文　子

司会　今晩はベテランの皆様のお集りを願いましたのですから、一つ取つておきの秘話を公開して頂きたいものです。

垣内　いや、これは恐れいりましたネ、私は専ら辻村さんの経験談の聞き役に廻ろうと思つて楽しみにしてきたのですが。（笑声）

司会　そりやいけませんヨ、特に今日は来て頂く時刻を夕方にしましたのも、暑いせいもありますが、昼日中ではどうも雰囲気がぴつたりしないという所から選んだんですから、ビールでも飲みながら忌憚ない所を出して下さい。私も司会者というより一サデイスト辻村として打明話を出しますから雑談という恰好でザツクバランに話し合いましよう。

木南　最近奇譚クラブのやり方をそつくりそのまゝ真似たニセ物が出ていますが、やはり女の責めに興味を持つている人も相当増えてきたんでしようかね。

辻村　奇譚クラブは昨年の六月号からA判に変えて、こういつたアブノーマル傾向の雑誌の先鞭をつけたわけですが、こゝ一年か二年でそう読者が増えたというわけでもないと思います。

垣内　今迄のエロ雑誌が奇譚クラブをそつく

り真似するという事について何か原因があるんじやないんですか？

辻村　原因といえば読者対象の関係ではなく御承知の昨年末以来の当局の弾圧ですネ、あれで殆どの軟かい雑誌は潰れたんですが、それらの残党が残つて頑張つている奇譚クラブに活路を求めて、真似をしてきたというのが本当のところでしよう。

木南　すると一概にアブノーマルの傾向を持つ読者が増えたということは云えないわけですか。

辻村　まアそうでしよう。然し一般の軟かい雑誌を好む読者も他の雑誌がなくなつた関係でこちらへ移つてきたという事にあるでしようね。浮動的な層として――。それにマンネリズムに陥つた編集内容をなんとか打解したいという焦り、それが本誌の好評に便乗して形を真似てきたというわけでしよう。

木南　そういえば他の雑誌でも縛り絵とか責絵を口絵等にぼち〳〵載せていますね、私達としては大して興味をそゝられるものでもないのですが、やはり自主性の欠除というところですかね。

辻村　本誌を変態雑誌と笑つていた連中が慌てゝ一夜漬の模倣をするというのは面白い現象です。

垣内　なんと弁解してもその点は争えませんね。一時的な流行といつた性質もあるでしようが、責めの大家の伊藤晴雨さんあたりが見れば却つて苦笑ものでしようね。

川岸　女の縛りが流行といつてはおかしいですが、比較的一般化してきたということについて奇クあたりの影響も預つて力あることは勿論ですが、その下地としての世相も考える必要があると思いますが。

辻村　それは大いにあります。

川岸　私は戦争中、警務要員として南方へ派遣されていまして相当いろ〳〵の拷問等を見てきましたが戦中戦後を通じて現在はそういつた傾向を持つ温床としての世相だともいえますね。

辻村　確かに戦争は人間の精神生活に物質以上の大きな変化をもたらしました。私も従軍四年の経験ではそういつた場面に度々出くわしましたが、捕虜を銃の台尻をなぐつた兵隊も復員すれば平和で善良な農夫なのですから総て戦争のもたらす悪だとの見方も出来ます

川岸　私も若気の至りとは云い乍らスパイ事件で十数名の男女の華僑を取調べた時は相当ヒドイ事をしたものです。

辻村　それはどういつた事件で？

川岸　なんでもピストルの密輪から足がついた日本政府顛覆の陰謀事件というので現地の憲兵隊が相当派手に活躍したんです。私は通訳といつた形で手伝わされるのですが、関係者の殆どが戦犯で処刑され、絞首刑になつた人もあります。

木南　拷問なんかどんな方法で？

川岸　私は只単に手伝わされたので主になつてやつたわけではありませんが、若い女には特に興味を持ちますね。純粋なサディスチツクな気持が、敵愾心の外に異国の女という点それに職務上やるという気軽さ、そんな点で無茶なこともやれたわけです。縛るとか叩く吊るというのはまア序の口です。石鹼水を飲ませたり、塩水を飲ませたり、とにかく死の寸前まで責め立てるのです。然しこれは女を縛るということゝは話は脱線しますが。

辻村　男が男ということであれば、終戦後大分日本人もやられましたね。日本内地でこそ終戦とか進駐軍とか云つていましたが、無条

件降伏というものを身を以て知らされたのは第一線の兵士ですからね。

垣内　私なんかずつと内地ばかりですから一向にそういつた事はわかりません。

辻村　垣内さん、どういつたきつかけで女を縛ることに興味をお持ちになりました？

垣内　小さい時から持つていたようにも思いますがはつきりしません。直接きつかけになつたのは二十才の時、高等学校の学生でしたが、失恋の結果すべての女に失望を感じてヒドイ神経衰弱で一年間休学したことがあります。まア、それがきつかけといえばいえます

辻村　神経衰弱というとどういう症状？

垣内　女にすつかり嫌悪を感じて普通ではインポになつてしまつたんです。精神的な打撃は恐ろしいと思います。

辻村　失恋の打撃が原因で、女に復讐するという気持が起きてきた？

垣内　復讐といつた大げさな考えじやないんですが、不思議と女を責めている時にだけリビドを感ずるのです。ショックが余りにもきつかつたからだと思います。

川岸　只単に女を責めるといつても主として縛るわけでしょう。又どんな女の相手でも選り好みしないという事もないんでしょう。

垣内　まア縛ることが主ですね。附帯して外の事もやりますが、――（間）――私は私なりに相手にする女に或る条件を持つていますがそれは一寸恥しくて……。

辻村　そりや又後で話して頂くとして、私自身、夏なんか電車で、特に今年は袖のない洋服がはやつて腋の下を露わに出している娘さんが多いですが、どちらかといえばやはり毛深いのにひかれますね。

垣内　私は辻村さんの反対なんです。毛の点については――。

川岸　私は特にそういつた強い好みはないですが、やはり若いピチピチと張りきつた豊満な女性がいゝですね。取り立てゝ云えば下腹部のお臍を中心とした膨らみですか。

木南　私は小学校の上級生の時、隣の家に母親と二人きりの生活で痩せ形の寂しそうな感じの私と同じ年の初子という子がありましたが、その子をよく虐めたものです。そんなところから今でもどうしても弱々しい感じの女にひかれますね。

辻村　女でさえあつたら誰でもいゝ、縛らせてくれゝば縛りたいという人もよくありますがどんなものでしょうね。

川岸　相手が許すならばいろ〳〵の方法を用いて責めてみたいという気持は起りますね。単純に興味本位からいつても――。

垣内　私は二人の間に何か精神的なつながりと云いますか、この人ならどんな事をさせてもいゝという親頼感の上に立たなければ誰でもいゝという気持は起りませんね。齢のせいかもしれませんが。

辻村　相手が嫌というのを無理に縛るのを好む人と合意で、まア云えば前戯的に楽しみたいという人とありますが、垣内さんはさしあたり前戯派といつたところですか。

垣内　そうですね。私が今親しくしている須美香という芸妓なんかも、だんだんに慣らして少しも無理はしませんでした。そして相手が少しでも嫌な顔をすると気分がこわれてしまうんです。

辻村　モデルでもヌードを承知する人なら十人が十人縛ることも承知しますね。そして徐々に最初はゆるく次第に強度を増して根気よく馴らしてゆけば殆どの女の人は相当程度の責めもやらせるようになります。

川岸　その中特に縛られることを喜ぶ人も出来てくるわけですね。

辻村　殆どの女の人は縄には或る程度の反能をします。殊更はつきり証拠を残す人もあ

りますが、中々そういつた事は直接言つてくれません。しかし態度で嫌でないという事位はすぐわかります。

木南　モデルを沢山扱つておられるといろいろ変つた人にも出喰わすでしようね。

辻村　古川裕子さんはサドの人が完全なる自分の所有物を欲しいと思うならば、思いきつて女の一切の自由を奪い、出来るだけ苦しませ、もがく力もなくなるまで責め立てることゝ、たゞこれはマゾの傾向を持つた人でなければ適用出来ませんが、なまじ遊び事のような折檻では駄目なのです。と言つて来ておられますが、本当に真理をうがつています

木南　すると辻村さんなんか遠慮会釈なしにビシ〳〵やられるわけですか。

辻村　勿論それは時と場合によります。今迄伺つたところでは女を縛ることについての罪悪感を持たれる方が多いようですが、女を前にして逡巡は禁物ですよ。断然強引に縛つてゆくことです。これが却つて相手を安心させることになります。

木南　マゾに女を仕込むコツのようなものはありますか。

辻村　相手がイヤだといつて逃げるのを無理に縛りたいという人には、なんでもさす女というものには興味を持たなくなります。私はどちらかと云えば無理にというのは好かないので、その点相手がマゾであれば本当は都合がいゝんです。仕込むといつても、安心感と信頼感を持たしながら気永に馴らしてゆくわけです。一見矛盾したようですが、単刀直入と逡巡はいけませんね。それと、そういつた素質の全然ない人には最初から手を出さない事ですね。

川岸　素質は一見してわかりますか。

辻村　ちよつとつきあつて居れば大体わかりますね。概して内気で大人しい人を選べば十中八九間違いはないようです。サドの男としてマゾ的な女性に接すると、或る種の直感というものがありますね、変つた人つて云えば川端さんなんかは典型的なマゾといつていゝでしようね。

川岸　私は拷問にのたうつ若い女の姿というものが瞼の底に焼きついてからはもう普通の事には興味を持たなくなつてきました。奇譚クラブは昨年の六月号から毎月欠かさず見ていますが、拷問によつて目覚めた私の気持を本当によく慰めてくれます。

辻村　川岸さんはまだおひとり？

川岸　えゝ、そんなわけで私は自分の性向を知つていますから簡単に結婚しないのです。

木南　私は私の母がお茶屋をしていまして、私がまだ十八九の頃でしたが森安という船成金のお客がありまして、その人が又滅法女を縛ることが好きで、金にあかして、芸者は勿論女中や出入りの素人娘を片つ端から縛つて楽んでいましたが、その助手が専ら私の役目でした。赤い扱帯が真白な肌に喰い込む様子は今でも目の前にちらつきます。

辻村　すると木南さんの女体緊縛の夢はその御手伝いから初つたわけですね。

木南　そうなんです。その時分は私も若いですし、家にとつては大事のお客というので、

道具を運んだり後片づけをしたり中々楽しいものでした。雪見の時なんか三十帖の広間の三方の障子を開け放つて縁側の柱へ長襦袢一枚の女を縛り上げてそれを肴に眺めながら酒を飲むのです。

川岸　伊藤晴両氏がよくやられる雪責めなんかは？

木南　森安さんは、特に変つたひどい事はされなかつたようです。只後手の高手小手に縛り上げて長い間ほつて置く然し沢山の朋輩の見ている所では、これだけで大抵の女は真赤になつて羞恥にのたうつていたものです。

辻村　只女を縛つて眺めて楽しむというだけ？

木南　いや、お座敷がすんで、さて別室へという時は嫉しいような羨ましいような気で、後片づけもしないでぼんやりしていた事もあります。別室の二人きりで彼がどんな事をしたかという事は知りませんが、色街では金がすべてを解決するものですから、相当いろいろな女たちが可愛がつて貰つていたようです。が、変な噂のようなものは立ちませんでした

辻村　木南さんもそういつた遊びをしてみたいという希望が潜在的な嗜好と合致したつていうわけですね。

木南　そりや、男である以上美しい女を周囲に侍らせて自分の気まゝに愛玩したいという欲望は今でもあります。然し現在のように税金に追われている身分では高嶺の花というところです。

辻村　私は時折新地を素見して接客婦に当つてみるんですが、案外喜んで縛らせるという女もいますよ。

川岸　最初からですか？

辻村　えゝ、京都から来て間のないという女でしたが、大変大人しくつて易々として縛らせました。少し痩せているのが難点でしたが帰りにチップをやろうと言つてもどうしても取らないんです。そんな女もいるんですね。

垣内　この前の座談会の時も誰か云つておられたようですが、結婚媒介所を利用すれば一月いくらという契約で、うまくゆくと初心な娘に当ることもあります。尤も渡り歩きのすれつからしも多いことは多いようですが。

川岸　私は通勤の電車の中で知り合つた二十才になる市役所に勤めているという娘さんと映画へ行つた帰り、若しも貴女を縛らせて呉れと僕が言つたらどうする？ときいてみたんですが、一向に驚く気配もなく、以前に見た映画で支那の夜の李紅蘭が縛られた所なんか美しかつたと云つているんです。

垣内　今の娘さんはさばけていますね、それで縛つてみましたか？

川岸　それが駄目なんです。ホテルへ行つた事もあるんですが、まるでクラゲのようにくたく〳〵でなんでも嫌と云わない女なのです。途端に私の興味がなくなりました。今度八月号で完結した〃クリスチーヌの受難〃あゝいつた清純で高貴な良家の娘を無理に凌辱するといつたところに大きな価値を見出しますね実際あれは近来にない傑作だつた。

辻村　はゝあん、すると垣内さんと正反対ですナ、それでその娘さんには興味を失つたつてわけ？

川岸　前に勤めていた会社では課長と仲がよかつたと云つていましたら、どうせ処女じやないでしようが、現在ではそういう中途半端な娘さんが多いですね、贅沢な考えか知りませんが着物を着た田舎の娘さんで何も知らない純真な人を自分の思うまゝに教育してみたいという気持がありますね。

木南　そんな女に逢つた時も〃私に貴女を縛らせて下さい〃つて口説きますか。（笑声）

辻村　これからは貴女を縛らせて下さいという愛の告白がはやるかも知れませんね。

木南　女が特に未婚の人が男に自分の身体を縛らせるという事はよく〳〵の事じやないんですかねえ。

辻村　合意でも縛られるということは不安なものです。先日も川端さんがいつも貴方にばかり縛られているから一度私にも縛らせて、というので冗談に縛らせたんですが、若し平常の仕返えしだといつてひどい事をされないかと思つてビクビクしましたヨ。（笑声）

川岸　本誌では毎号大分いろ〳〵の縛り方が出ていますね、辻村さん、どんな縛り方が一番いゝんでしようね。

辻村　後手の高手小手というのが定石ですが縄は余り沢山使わず二巻きか三巻き、ぎつちりと胸から云つて二の腕に廻して縛ることですね。美観から云つても女体に与える影響からいつてもいゝ方法だと思います。

川岸　馴れるまでは縛られるのを嫌がる人があるのと同じように猿ぐつわを大変嫌がる人がありますね。

辻村　女体の悦虐にはやはり猿ぐつわは欠すことの出来ないものです。これを活用すれば知る人ぞ知るの醍醐味を味うことが出来ます縛ることが痛さを与えることより自由を奪うことであり、猿ぐつわも苦しさを与えることより発声の自由を奪うということに主眼を置く必要があります。

木南　私は自分でいろ〳〵研究したり雑誌の記事を参考にしたりして縛つたりしていますが、吾妻さんの提唱される股間の縦縛り確かにいゝですよ。

辻村　木南さんの専ら縛つておられるという女の方は？

木南　〃妻は縛らず〃という文章がありましたが私も丁度あゝいつた気持なのです。妻には愛情は感じていますが、縛るのは外の女をというわけで、只今十ばかり下の未亡人の方を縛らせて貰つています。

川岸　私なんか若し妻を貰うとすればどうしてもマゾ的傾向の人じやないとうまくゆかないと思います。然しマゾとして完成されゝば興味を失つてしまうという予感は持つていますが。

辻村　中々複雑でムツカシイですね。自覚しているんでしたらこういつた条件で探されることはいいことです。軽いサド傾向の男性に軽いマゾ傾向の女性の取り合せが一番しつくりゆくと云われます。それから読者から沢山縛り方やポーズ等について責めのアイデアを寄せられますが、各人各様、いろいろな方法で楽んでいるという事が伺えます。

垣内　その中で卓抜したものというと？

辻村　完成されたマゾの女性をモデルとしてその人の好みに従つて縛つてみよ、というのなんかいゝ意見でした。川端さんをモデルに川端多奈子悦虐写真集というのを考えています。マゾの女性の好む縛り方というわけです。

垣内　この前五月号に載つた松井さんを囲む座談会の時には川端さんも出席されていましたし、九月号の縛られた女ばかりの座談会では司会をしていられましたが、今晩あたり顔を出して貰つたらお伺いしたいことも大分ありましたのですが——。

辻村　今丁度国へ帰つていられるので残念で

した。貴方がたベテランとして雑誌についての御意見は？

川岸　手にとつてペラ〳〵とめくつた時一番強い感銘を受けます。私は何度も読みかえしますが時が経つにつれて刺戟がうすれてゆくようです。だから毎月新しい月号が出るのが楽しみなんです。

木南　私は最初開いた時、一番ドキッとします。然し同じ刺戟を繰り返されると感覚がにぶります。特にあくどい本は飽きが早いようです。其の点奇クの内容がグン〳〵変つてゆくのでいつも新鮮さを感じさせてくれますよくまア毎号これだけ変つたやり方で読者を倦きさせず盛沢山に編集してゆけるものだとひそかに感服しています。

辻村　最近は載せたい原稿が沢山輻輳して選択に困つているそうですが、幸い読者の方々から貴重な御意見を多数寄せられますので、十分飽かさせないだけの自信はあります。

垣内　まあ此れからどう情勢が変化するかわかりませんが、その時々の場当じやなしにじつくり腰を落ち着けて永読させてほしいですね、私達マニアは一冊抜けても気持ちが悪いといつた熱心さで執著しているのですからね

木南　そう、或る雑誌に広告してあつて申込んだパンプレット式の出版物なんか、二三回でもう送つて来ないものがありまして、こちらが熱を挙げているだけに腹立たしくなります。

辻村　それじや話を変えまして、女を縛つた経験として肉体的に責めるというのと精神的な責めですね、これはどう使い分けして居られます？。

木南　単純な肉体的な刺戟は慣性となつて次第に刺戟を増さなければ駄目だということ、これは私、ヴアンデヴルデの完全なる結婚が精神的なものを忘れて肉体的な技巧にばかり走つているのと同じように下手な方法だと思います。

垣内　それは一概に言えないと思います。能に楽しみを感ずる人とパチンコに興ずる人、沼正三さんが言つて居られるように、言葉だけの皮肉で相手を傷つけられる人もいるかわり、一杯気嫌で食膳を足蹴にしなければおさまらん人もいるんですよ。

辻村　そう、それでサディズム、マゾヒズムの遊戯としては――

川岸　精神的なもの必ずしも深奥とは限らんでしようね、若しマゾの女性から精神的な被虐態勢をとられゝば神経衰弱になりますヨ・

木南　私も精神的一本槍というわけじやないんです。肉体的な刺戟に慣れさせないという事ですね、マゾの女性にしたつて苦痛そのものが快感ということはない筈ですよ。

辻村　痛いけれどもいゝという感覚ですね、夫に虐めてほしい為に虚偽の姦通をするといつた女性、それに妻の過去の不義を根堀り葉堀り聞き出してサド的感情をあふり立てる男そんな経験はございますか。

木南　サドマゾの関連は知りませんが、商売女なんかで相手の男をひきつけるのに男の嫉妬心を利用するという事は行われていますね

川岸　そりや私の工場には寄宿舎があります

が若い寮生恋愛なんかでも、競争心にかられて意外な結婚をしている人達もあります。ライヴアルに勝つたというサド的気持の満足といゝますか。

垣内　人々がはつきり意識していなくて倒錯的な行動、あながちセツクスに関してばかりでありませんが、していることがありますね強い者には弱く、弱い者には強いという日本人にあり勝ちの性質なんか。

辻村　そういう見方をしてみるのも面白い。

川岸　私が少年時代に苛めた初子という女の子なんか、環境とか雰囲気がなんとなく私が苛めなくてはならないように出来ているんです。今から考えても不思議ですが当時私は他の女の子にはそんな気持は起らなかつたのですのに――。

木南　好きだから苛めたいという、貴方の潜在的な嗜虐性が偶然思春期を前にして芽を出したというわけじやないんですか。

川岸　そうかも知れません。

辻村　少年期から青年期に至る過渡期にはあらゆる仮性的倒錯症状があらわれるものですね、私なんかも今ではネオ・サデイストの一人にされていますが、やはり最初の洗礼は小学校時代の教師からと中学生時代の上級生からの受身的影響、それが自分が上級生になると逆に下級生の美しい少年に好意を持つようになりましたが然しそれも異性に興味を持つようになると霧散しましたよ。

垣内　責めに興味を持つようになられたのはその頃からですか。

辻村　はつきり何時からというような画期的なものはなかつたようです。只、月並のようですが小説なんかで女の被虐場面があると特に熱心に読みました。美しい女を見た時、このお上品にすましたお嬢さんを身動き出来ないようにして苛めたらなアという淡い感情は思春期の末期には起つた事を覚えています。

川岸　私は今でも電車の中なんかで、好みの女の人を見ると縛つてみたいなアという欲望は起ります。勿論観念的なものですが。……それで辻村さん、最初にお縛りになつたのは

辻村　それからずつと潤一郎のものや乱歩のものを耽読しまして結婚するまでは直接そういう機会もないし、強いてやつてみようという程強い衝動も起らなかつたんですが初めて縛つた女といえば妻なんです。垣内さんはお馴染の芸妓さん以外に奥さんは縛らない?

垣内　それが申し上げにくいんですが、家内は家内なりに私の気持に合うよう努力はしてくれているんですが、さつき申し上げた私の好みもありまして、専ら写真とか絵画の蒐集といつた方向へ走つてしまいました。

辻村　すると昔からの相当のコレクシヨンもお持ちなんですね、一度見せて頂きたいものですナ。

垣内　えゝ、いつでもお見せします。以前は伊藤晴雨氏のものを殆ど集めましたし、又特別に画家に頼んで自分の好みのものを描いて貰つたこともあります。なんといつても以前はそういつたものが中々手に入らなかつたものですが現在のような書店へ行けばすぐ絵でも写真でも見られる時代の事を思えば感慨無量です。嬉しいことは嬉しいですが何んだか自分のコレクシヨンの価値が下るような気がしても一つ割りきれん気持です。

木南　そうです。昔だつたらこんな写真一枚手に入れるのにどれだけ苦労しなきやいけないかと思つたりしますとね。

川岸　それだけ今は人は幸福といえば言えるわけですね。

辻村　女を縛つた経験を語るという話題が大分横道へそれましたし、それにまだ〳〵沢山お伺いしたい事もありますが予定の時間も参りましたので、一応こゝで速記を打切ります

編集室ノート

今年もまた、海へも山へも行かぬうちに夏が過ぎようとしている。異常気象とやらで、ここ数年冷夏続きだが、もしかしたら、日本にはもう夏という季節はなくなってしまうのではないか、などと考えてしまう。となると、春、秋、冬のスリー・シーズンということになるが、そのうち一年中同じ気候なんてことになるかもしれない。いづれにしろ、季節の移り変りとはあまり関係のない生活をしているのだから、どうでもいいことなのだが。

先日、SMショーとやらいうものを見てきた。15分ばかりのショーで、縄師らしい男が裸の女を縛りあげていろいろと責めるのだが、見ようによっては昔のサーカス小屋の見世物ふうの雰囲気があって面白かった。ただ、SMプレイがショーとして成立っていることを考えると、やはり、SMの変質と風化を思わずにはいられなかった（H）

（直接購読のお申込みは、きたん社へ）

新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性は、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕
〒160東京都新宿区新宿1の7の11
加藤ビル1F
㈱きたん社内
現代芸術研究会